

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第7集

# 広 畑 遺 跡

1991

えびの市教育委員会

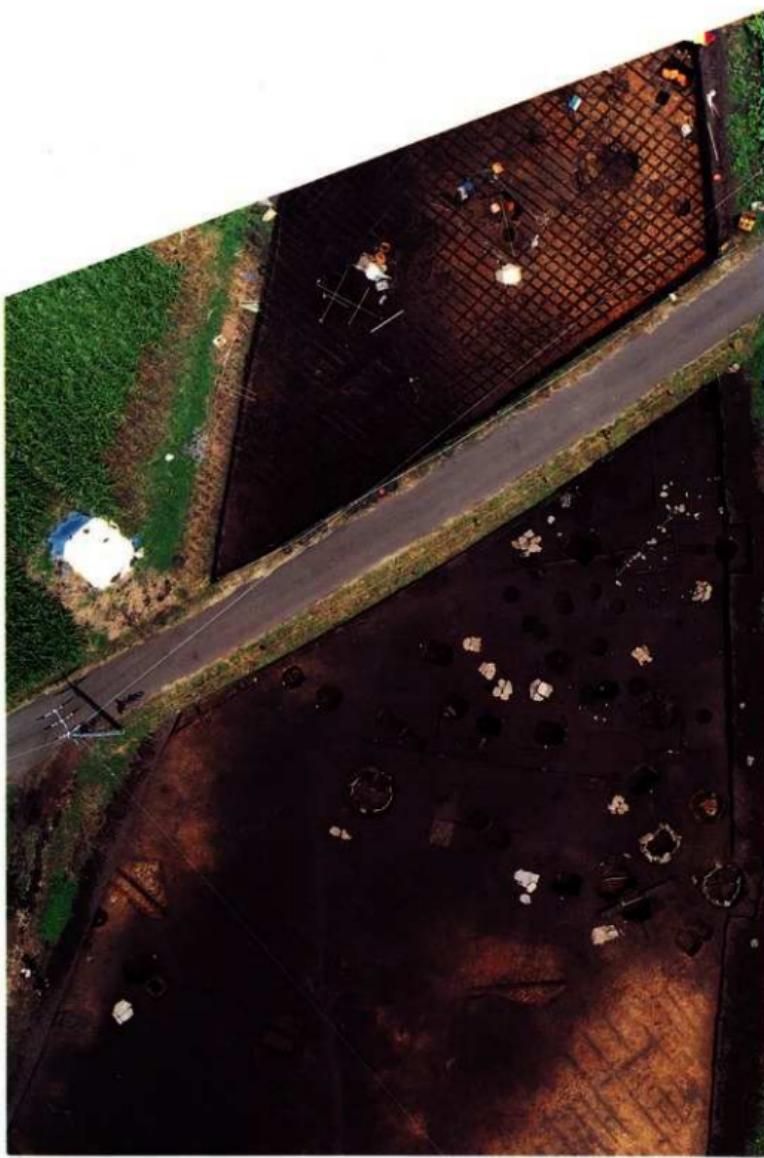
えびの市埋蔵文化財調査報告書 第7集

# 広 畑 遺 跡



1991

えびの市教育委員会



IV・V区航空写真



V区 基本的層序



S Z-01およびA群土器

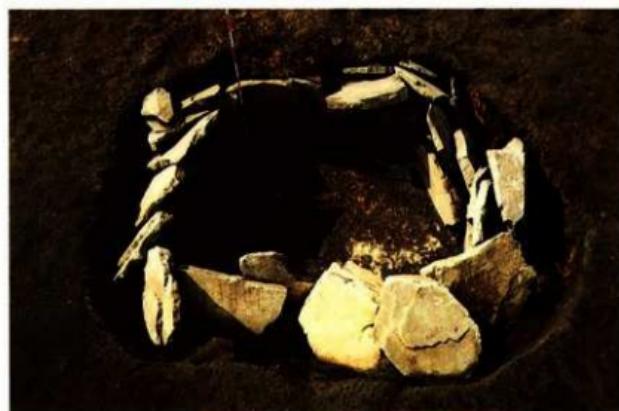
S T-11  
狭道閉塞状態  
(西から)



S I -01



S I -02



## 序

えびの市は、日向・肥後・薩摩の分岐点にあたり、古代より多様な文化・文物が混和しながらも独特の文化と伝統をもった地域であります。市内の段丘面から山麓にかけては遺跡が密集しており、本市の歴史を紐解く鍵が眠っております。

平成元年度には九州縦貫自動車道人吉-えびの間の建設が着工し産業開発も増加しつつあります。そこで、埋蔵文化財の保護行政も一層充実していかなければならぬ時期にきております。

本書は、平成元年度に実施した広畠遺跡の発掘調査報告書であります。市内で2例目の堅穴式住居や古墳時代の墳墓群を調査し、本市の古代史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。本書が学術資料としてだけではなく、学校教育・社会教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が高まれば幸いです。

なお、調査にあたって御指導、御教示頂いた諸先生方、県文化課および調査に対して御理解、御協力頂いた工事関係者並びに地元の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

えびの市教育委員会

教育長 平 田 敏 正

## 例　　言

1. 本書は、平成元年度に実施した、市道坂元芋畠線外2線整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査主体は、えびの市教育委員会である。
3. 地下式板石積石室墓は、概要報告の中では便宜上A～Eとしたが、本書では01～05に改めて掲載している。
4. 本書では方位を磁北で、レベルを海拔標高で示した。
5. 写真記録および遺物の写真撮影は、中野が行なった。
6. 人骨の実測、取り上げおよび、鑑定については長崎大学医学部の諸氏にお願いした。
7. 本書では、遺構を記号で省略している。 S A : 積穴式住居、 S B : 掘立柱建物、 S D : 溝、 S I : 地下式板石積石室墓、 S K : 土坑・土壙墓、 S T : 地下式横穴墓、 P P : 柱穴、 S Z : その他の遺構
8. 出土遺物および関係資料は、えびの市文化センターに保管している。
9. 本書の編集、執筆は中野が行なった。

## 調査組織

### 調査主体 えびの市教育委員会

平田敏正（教育長）

上別府文夫（社会教育課長）

野間寛俊（課長補佐）

浜松政弘（係長、平成元年度）

境田 貢（係長）

上加世田たず子（主事）

中野和浩（技師）

### 特別調査員

上村俊雄（鹿児島大学 教授）

### 調査協力

西健一郎（九州大学文学部 助手） 小田富士雄（福岡大学 教授） 挿田啓一

松下孝幸（長崎大学医学部解剖学第2教室 助教授）

分部哲秋（ 同 講師）

佐伯和信（ 同 助手）

小山田常一（ 同 史学部 大学院生）

近藤 敏（市原市文化財センター）

長津宗重（宮崎県教育庁文化課 主任主事）

境田博之（えびの市土木課長）、小川 博（ 同 課長補佐）、外赤勝郎（ 同 課長補佐）

北園一正（ 同 係長）、境田次男（ 同 主査）

### 造構実測・発掘調査

大内田春江、加治佐良子、白坂けい子、新原芳子、新屋敷節子、田中のり子、永田美智子、

二宮ミツ子、原口キミ子、福満悦子

### 発掘調査

有木タミ、岩下貞盛、江口タミ、上水流百合子、坂元ミカ、追田サエ、追田正雄、田中キサエ、田中康弘、鎮寺シズ、鎮寺達夫、中庭正志、浜脇正則、本二日市栄、馬越脇功、増田光夫、米延二郎、持永秀雄

### 遺物整理

川上茂子、鶴田美恵子

### 遺物実測・整図

大内田、加治佐、川上、田中、鶴田

なお調査にあたって、前出・坂元・茅畠地区の方々には多大な御援助を賜った。

## 本文目次

I.はじめに	1
II.遺跡の位置と環境	1
III.遺構確認調査	5
IV.発掘調査	
1.弥生時代の遺構と遺物	9
2.古墳時代の遺構と遺物	10
3.その他の遺構と遺物	73
V.まとめ	73

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:50,000)	2
第2図 調査地点位置図 (1:5,000)	4
第3図 層序柱状図	5
第4図 III～V区遺構配置図 (1:500)	6
第5図 S A-01 遺構実測図 (1:20)	7・8
第6図 S A-01 出土遺物実測図 (1:3, 1:2)	9
第7図 S Z-01・A群遺物出土状態実測図 (1:30)	11・12
第8図 A群遺物実測図 (その1) (1:3)	13
第9図 A群遺物実測図 (その2) (1:3)	14
第10図 A群遺物実測図 (その3) (1:3)	15
第11図 S I-01 遺構実測図 (1:30)	17・18
第12図 S I-02 遺構実測図 (1:30)	19・20
第13図 S I-02 出土遺物実測図 (1:3)	21
第14図 S I-03 遺構実測図 (1:30)	22
第15図 S I-04 遺構実測図 (1:30)	23・24
第16図 S I-04 出土遺物実測図 (1:2)	25
第17図 S I-05 遺構実測図 (1:30)	25
第18図 B群遺物出土状態実測図 (1:10)	26
第19図 B群遺物実測図 (1:3)	26
第20図 S T-01 遺構実測図 (1:30)	27
第21図 S T-02 遺構実測図 (1:30)	28
第22図 S T-02 竪坑埋土出土遺物実測図 (1:3)	29

第23図	S T -03 遺構実測図 (1 : 30) .....	31
第24図	S T -01, 03, 05, 06, 07 出土鉄鎌実測図 (1 : 2) .....	32
第25図	S T -04 遺構実測図 (1 : 30) .....	33
第26図	S T -05 遺構実測図 (1 : 30) .....	34
第27図	C群遺物出土状態実測図 (1 : 30) .....	35
第28図	C群遺物実測図 (その1) (1 : 3) .....	36
第29図	C群遺物実測図 (その2) (1 : 3) .....	37
第30図	S T -06 遺構実測図 (1 : 30) .....	39
第31図	S T -07 遺構実測図 (1 : 30) .....	40
第32図	S T -08 遺構実測図 (1 : 30) .....	41
第33図	S T -08, 10, 11, 14 出土鉄鎌実測図 (1 : 2) .....	42
第34図	S T -09 遺構実測図 (1 : 30) .....	44
第35図	S T -10 遺構実測図 (1 : 30) .....	45
第36図	S T -11 遺構実測図 (1 : 30) .....	46
第37図	S T -12 遺構実測図 (1 : 30) .....	48
第38図	S T -13 層序実測図 (1 : 60) .....	49
第39図	S T -13 遺構実測図 (1 : 30) .....	50
第40図	S T -14 遺構実測図 (1 : 30) .....	51
第41図	E群遺物出土状態実測図 (1 : 10) .....	52
第42図	E群遺物実測図 (1 : 3) .....	52
第43図	S T -15 遺構実測図 (1 : 30) .....	53
第44図	S T -15 出土鉄鎌実測図 (1 : 2) .....	54
第45図	S T -16 遺構実測図 (1 : 30) .....	55・56
第46図	S T -16・17 出土鉄鎌実測図 (1 : 2) .....	57
第47図	S T -16 出土小刀実測図 (1 : 3) .....	58
第48図	S T -17 遺構実測図 (1 : 30) .....	59
第49図	S T -18 遺構実測図 (1 : 30) .....	60
第50図	S T -19 遺構実測図 (1 : 30) .....	61・62
第51図	S T -03, 11, 13, 19 出土短剣実測図 (1 : 2) .....	63・64
第52図	S T -06, 15, 17 出土刀剣実測図 (1 : 3) .....	65
第53図	S K -01 遺構実測図 (1 : 30) .....	66
第54図	P P -01, 02 遺構実測図 (1 : 30) .....	66
第55図	D群遺物実測図 (1 : 3) .....	67
第56図	F群遺物実測図 (1 : 3) .....	67

第57図	IV区出土遺物実測図 (1 : 3) .....	68
第58図	V区出土遺物実測図 (1 : 3) .....	69
第59図	S B-01 遺構実測図 (1 : 20) .....	71・72
第60図	地下式横穴墓集合図 (1 : 20) .....	75
第61図	地下式横穴墓 群構成推定図 (1 : 200) .....	76
第62図	地下式横穴墓変遷図 .....	77
第63図	S T-13 排土模式図 .....	77

## 表 目 次

第1表	S A-01 出土遺物観察表 .....	9
第2表	A群遺物観察表 .....	15
第3表	C群遺物観察表 .....	37
第4表	E群遺物観察表 .....	52
第5表	IV区出土遺物観察表 .....	69
第6表	V区出土遺物観察表 .....	69
第7表	S B-01 柱穴一覧表 .....	70
第8表	地下式横穴墓一覧表 .....	78

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

IV・V区遺構分布状態、IV区遺構分布状態

S I-01 床面、S I-02 床面、S T-04 羨門閉塞状態

図版1 調査地周辺航空写真、調査地周辺遠景

図版2 III～V区調査前の状況

図版3 V～VII区調査前の状況、I区完掘全景、II～III区全景

図版4 III区完掘全景、IV区完掘全景、IV区作業風景

図版5 V区作業風景、VI区完掘全景、VII区完掘全景

図版6 S A-01 遺構検出状態、掘込・遺物出土状態、遺物出土状態（接写）

図版7 S Z-01・A群遺物出土状態、S I-01～03 遺構検出状態、作業風景

図版8 S I-01 層序、完掘全景、側石除去、完掘

図版9 S I-02 层序、完掘全景、側石除去、完掘

図版10 S I-03 层序、完掘全景、S I-04 层序

図版11 S I-04 完掘全景、側石除去、S I-05 完掘全景

- 図版12 ST-01 壊坑層序、狭道閉塞状態、完掘
- 図版13 ST-01 玄室内、ST-02 壊坑層序及び閉塞状況、閉塞石除去
- 図版14 ST-02 玄室内人骨、ST-03 完掘全景、玄室内出土遺物、壊坑上部閉塞状態
- 図版15 ST-04 狹道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
- 図版16 ST-05 壊坑層序、狭道閉塞状態、玄室内人骨
- 図版17 ST-06 壊坑層序、閉塞石除去、玄室内
- 図版18 ST-07 壊坑層序、狭道閉塞状態、玄室内
- 図版19 ST-08 壊坑層序、完掘、玄室内人骨
- 図版20 ST-09 壊坑層序、完掘、玄室内人骨
- 図版21 ST-10 狹道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
- 図版22 ST-11 狹道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
- 図版23 ST-12 狹道閉塞状態、閉塞石除去、玄室内人骨
- 図版24 ST-13 層序、壊坑層序、狭道閉塞状態
- 図版25 ST-13 狹道部のシラス塊、閉塞石除去、玄室内
- 図版26 ST-14 造構検出状態、完掘、玄室内遺物出土状態
- 図版27 ST-15 造構検出状態、完掘、玄室内
- 図版28 ST-16 壊坑検出状態、閉塞石除去、玄室内奥壁～右側壁、玄室内右側壁
- 図版29 ST-17 完掘、玄室内、鉄刀刺突状態
- 図版30 ST-19 壊坑上部閉塞石およびコンクリート塊、完掘、玄室内遺物
- 図版31 ST-18 完掘全景、SK-01 完掘全景、PP-01 半截、PP-02 半截
- 図版32 SB-01 造構検出状態、完掘・造構実測、SD-04 全景・層序
- 図版33 SD-05 全景、層序、B群遺物出土状態、C群遺物出土状態
- 図版34 E群遺物出土状態、SA-01 出土遺物
- 図版35 A群出土遺物（その1）
- 図版36 A群出土遺物（その2）、B群出土遺物、C群出土遺物（その1）
- 図版37 C群出土遺物（その2）
- 図版38 E群出土遺物、F群出土遺物、G群出土遺物、ST-02 壊坑内および周辺出土遺物
- 図版39 ST-13 封土内、ST-17 玄室崩落土内、SI-02 内、SI-04 内、堆土内出土遺物
- 図版40 ST-01・03・05・06・07・08 出土遺物（鉄鎌）
- 図版41 ST-10・11・14・15・16・17 出土遺物（鉄鎌）
- 図版42 ST-06 出土大刀、ST-15 出土劍、ST-16 出土小刀、ST-17 出土大刀、ST-19 出土劍先、ST-13 出土劍、ST-03 出土劍、ST-11 出土劍

## I. はじめに

### 調査に至る経緯

えびの市の北に横たわる九州山脈の一郭に、防衛施設庁に管轄される超長波（VLF）送信所が建設中である。当事業に関連して、市道坂元-芋畑線を拡幅、国道へは新規直結するという計画が持ち上がってきた。

当該地域は周知の遺跡であることから、埋蔵文化財の保護が必要となり、土木課と協議を重ねた結果、記録保存をはかることとなった。まず、単独市費で遺構確認調査を実施、遺跡の範囲や遺構面までの深さ等を確認して調査地域を絞り、重機を入れて面的調査を行なった。

調査期間は、平成元年7月31日から9月27日を充てた。調査面積は、6,220m<sup>2</sup>である。

## II. 遺跡の位置と歴史的環境（第1図、図版1）

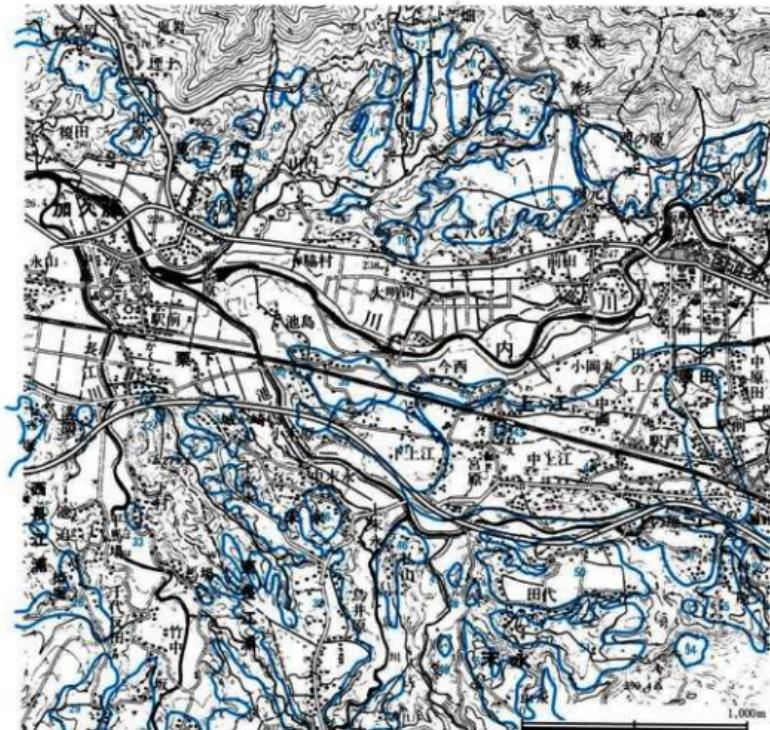
広畑遺跡は、えびの市大字坂元字二本杉・油木の元・広畑・二八山の上、大字大明司字越シ・半田に所在する。

えびの市は宮崎県の西南端に位置し、九州山脈と霧島連山に囲繞された狭長な盆地（加久藤盆地）である。加久藤盆地は、第三紀中頃以後、内陸凹地に湖成層が堆積、第三紀後半から第四紀初に火山碎屑物が堆積したのち、第四紀後半以後泥層と入戸火砕流（シラス）<sup>(1)</sup>が堆積した。この後、下刻が繰り返され、段丘面が形成されて今日に至る。段丘面には火山灰が堆積しているために水田耕作には適さず、肥沃に富んだ氾濫原が弥生時代以降の可耕地となっていたと思われる。山麓からは鉄山川、池島川、白鳥川、長江川など大小20の支流が川内川に合流し、盆地中央を西へ流れる。

本遺跡は、沖積面との比高約40m、標高約290mの高位段丘上に位置し、現況は遺跡の北半部では湧水を利用した水田、南半部では全て畠となっている。昭和60年度の遺跡詳細分布調査において、縄文時代早期の押型文土器や後期の土器片、弥生土器、土師器、国産陶磁器、剥片（黒曜石）<sup>(2)</sup>が表採されている。

遺跡の北端域は、斧底という広域地名で、字のごとく石斧や石磨丁が表採されており、集落や生産造構が想定される。また北西部では、昭和63年、トレンチャー（ゴボウ播種のための深耕掘削用機械）による掘削の際に石皿が10点余り掘り起こされた。遺跡の背後には、芋畑第1・第2・第3遺跡、山神原遺跡といった縄文時代後期・古墳時代後期を中心とする遺跡が連なっている。

遺跡の南縁部には芋畑地下式横穴墓群が分布しているが、昭和19~20年の飛行場造成の際に相当量の人骨や鉄器が出土した話を聞いている。また、耕作時に板石を振り当て、庭石等に使用する目的で地下式板石積石室墓の上部構造物はほとんど抜去された。市内には良好な石材が乏しいということも要因になっていると思われる。



番	遺跡名	時代	番	遺跡名	時代	番	遺跡名	時代
1	広畠遺跡	縄文～古墳	19	守畠第2遺跡	縄文～古墳	38	桃野第1遺跡	縄文～平安
2	守畠地下式横穴墓群	古墳	20	守畠第1遺跡	縄文～古墳	39	永田原遺跡	弥生～中世
3	東原遺跡	縄文～古墳	21	福荷下遺跡	縄文～中世	40	木崎原古戦場跡	中世
4	牧ノ原遺跡	古墳	22	飯野城跡	縄文～中世	41	小木原地下式横穴墓群	古墳
5	丸尾遺跡	縄文～平安	23	愛染院遺跡	古墳～平安	42	口ノ坪遺跡	平安
6	理土遺跡	縄文～平安	24	灰塚遺跡	古墳	43	法光寺跡	平安
7	加久藤城跡	古墳～中世	25	灰塚遺跡	縄文～平安	44	原田・上江遺跡	縄文～中世
8	城内第3遺跡	縄文～古墳	26	灰塚地下式横穴墓群	古墳	45	達山地下式横穴墓群	古墳
9	城内第2遺跡	縄文～古墳	27	長串田遺跡	古墳	46	曲田遺跡	縄文～古墳
10	城内第1遺跡	古墳	28	岡元遺跡	縄文～平安	47	井穴遺跡	縄文～古墳
11	尾山遺跡	平安	29	新田遺跡	縄文～平安	48	後追遺跡	平安
12	甘里遺跡	縄文～平安	30	瀬瀬城跡	中世	49	洲谷遺跡	縄文～弥生
13	六本原第4遺跡	古墳	31	谷川第1遺跡	平安	50	田代遺跡	縄文～古墳
14	老谷原遺跡	古墳	32	谷川第2遺跡	弥生～古墳	51	天宮遺跡	縄文～古墳
15	大明寺越遺跡	古墳	33	鶴田越遺跡	古墳	52	桜ノ木原遺跡	縄文～古墳
16	越シ遺跡	古墳	34	城ヶ崎遺跡	弥生	53	妙見原遺跡	縄文～古墳
17	山神原遺跡	縄文～古墳	35	梯ノ木城跡	弥生～中世	54	森ノ木遺跡	弥生～古墳
18	守畠第3遺跡	縄文～古墳	36	村ノ前遺跡	縄文～古墳	55	石落下遺跡	縄文～古墳
			37	畑田城跡	中世	56	大迫原遺跡	縄文～古墳

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1 : 50,000)

## 旧石器時代

遺構・遺物は発見されていない。

## 縄文時代

早期の遺跡としては、押型文土器の出土した前畠遺跡、灰塚遺跡、小木原遺跡群久見追B地区などがあげられ、久見追B地区では柱穴状遺構が検出された。前期の遺跡としては、曾畠式轟式土器の出土した前畠遺跡および灰塚遺跡があげられる。中期の遺跡は未発見である。後期の遺跡としては前畠遺跡、灰塚遺跡などがあげられ、当該期に属する遺跡が多い。晩期の遺跡としては、黒色磨研土器が出土した灰塚遺跡があげられる。

表記資料としては、村ノ前遺跡や天神免遺跡、灰塚遺跡、大迫原遺跡などで石皿が、村ノ前遺跡と天宮遺跡で石錘が、石鎧・石斧類は市内各所で採集されている。剥片石器の原石は、鹿児島市三船産、大口市日東産、人吉市桑ノ木津留産の黒曜石が多い。

## 弥生時代

中期の壺形土器が新田遺跡と小木原遺跡群久見追B地区で発見されている。後期の遺跡としては、免田式土器の出土した灰塚遺跡と久見追B地区があげられる。生活遺構としては、永田原遺跡で間仕切り住居1軒を検出しているのみである。

生産遺構に関連するものとして石窓丁が、中棚遺跡、田原陣遺跡、小木原遺跡群蕨地区、法光寺跡、天神免遺跡、さらに芋畑遺跡で各1点、灰塚遺跡で2点発見されている。<sup>(7)</sup>

## 古墳時代

生活遺構は調査されていないが、南九州独特の墓制が営まれている。

地下式横穴墓は島内、灰塚、小木原、芋畑、建山そして杉木流の6ヶ所に群在し、各々特徴がみられる。当墳墓はすべて平入り長方形ないし稍円形を呈するが、灰塚では竪坑上部閉塞、小木原のうち馬頭・久見追地区では羨道閉塞（後者の閉塞材はアカホヤ塊）、小木原地区と島内・芋畑では共存している。これらは、全て洪積世の砂礫段丘上に立地する。明治38年には、島内で「径15間、高さ4尺」の墳丘を有する地下式横穴墓が、大正2年には、建山で「高さ3m、鐘頭形」の墳丘をもつもの2基が調査されており、早くから当該墳墓は知られていた。昭和44年を中心として島内と小木原では、段丘下部に堆積している砾を建築材料とする目的で、重機による掘削を行ない、幾多の地下式横穴墓が削除した。<sup>(8)</sup>

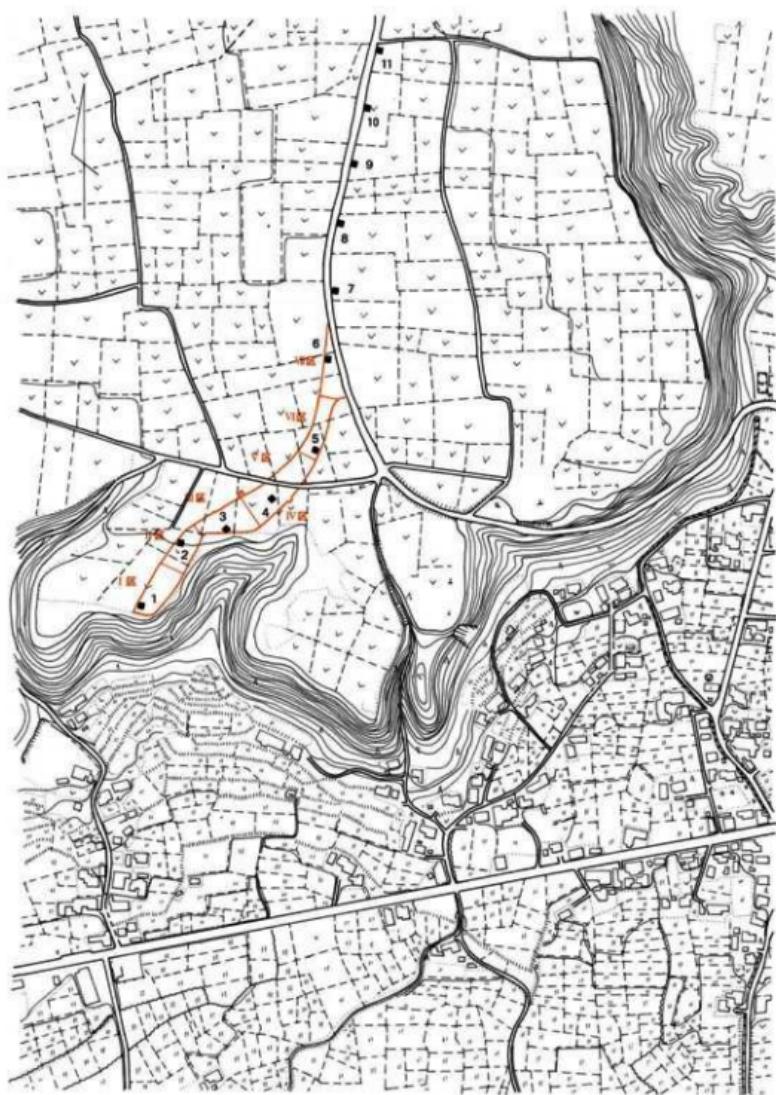
小木原1号、杉原（=島内）、杉原41-1号から甲冑が、小木原A号墳から小型彷製鏡と陶邑産の須恵器が出土している。築造年代は6世紀に集中し、7世紀に降るものは無い。

地下式板石積石室墓は、建山を除く5ヶ所と大迫原遺跡に群在し、4～5世紀代に営まれる。

## 歴史時代

奈良時代の遺物としては、天神免遺跡（宇蓮花寺）より藏骨器（須恵器）2点が発見されている。平安時代は、10世紀前半の土器や布目瓦が出土した法光寺が知られているにすぎない。

えびの市は、島津庄真幸院に組み込まれていたが、この領地をめぐって島津氏と伊東氏が激



■ TRENCHI

第2図 調査地点位置図 (1:5,000)

0 100m

戦を繰り返し、木崎原や三角田の古戦場、首塚、六地蔵などが往時を偲ばせる。飯野城・加久藤城をはじめとする20余の中世の山城は、氾濫原に突出した段丘の先端部に集中している。飯野城周辺には、漢詩を作る時の辞書『三重韻』や教科書『碧霞錄』を印刷・出版した長善寺や愛染院、昌極庵といった多くの寺院があったが、廃仏毀釈で廃寺となっている。

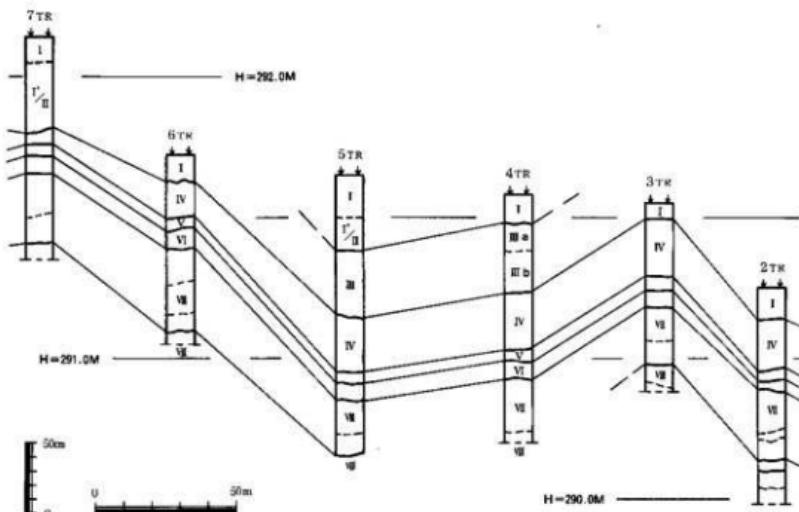
島津氏支配の後は門割制度が設けられ、新田開発・整備が行なわれていったようである。広畠遺跡の北東部には、16世紀後半、島津氏が開山したと伝えられる鉄山があり、砂鉄を原料とした製鉄が明治期まで営まれていたが、実体は不明である。また、市の北西端、西之野においては、1856年に鉄鉱石が発見され、島津齐彬の命によって短期間ではあったが、原料採掘が行なわれた。のち1897年、地元民によって10余年、精錬段階まで営まれていた。

地下式横穴墓から出土する鉄器の量を考えると、上記2ヶ所の製鉄の開始年代に興味がもたられ、今後の調査に期待される。

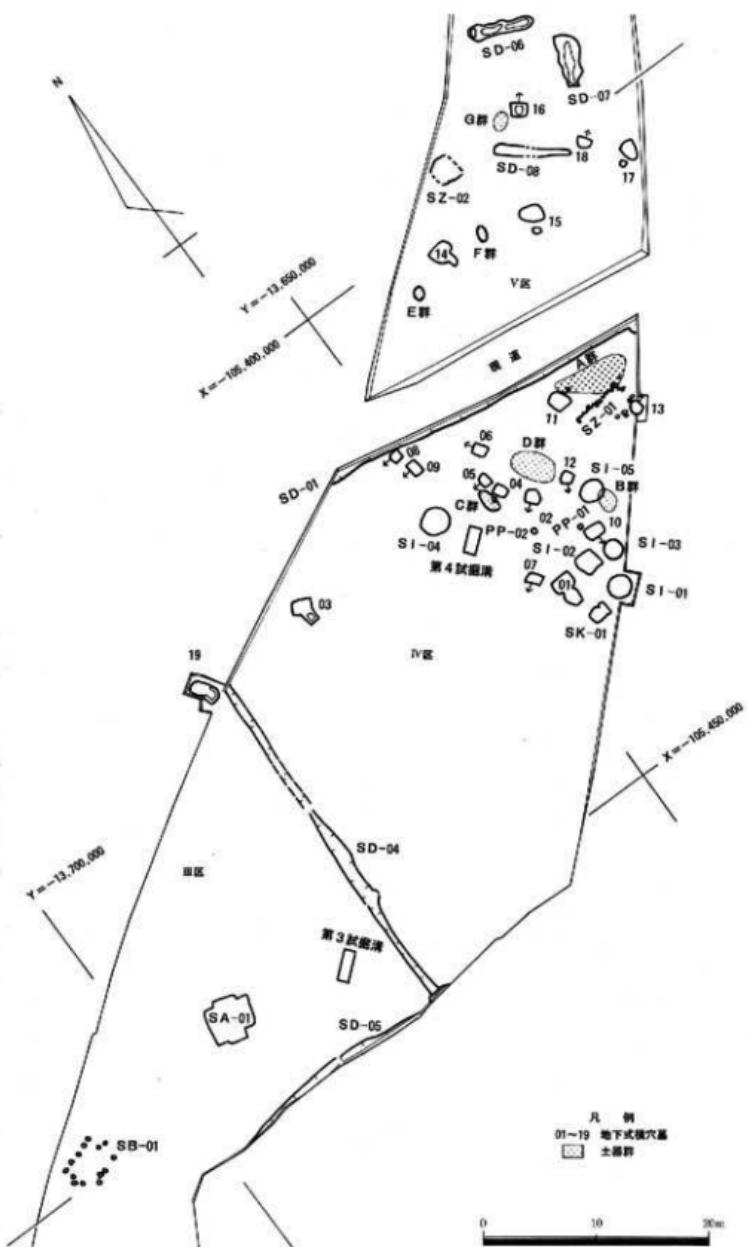
このほか、大字二八の下において、昭和54年3月、開墾整備事業に伴って塚（仕置塚）を削平する際、一字一石経が掘り出され、若干数が現存している。

### III. 遺構確認調査

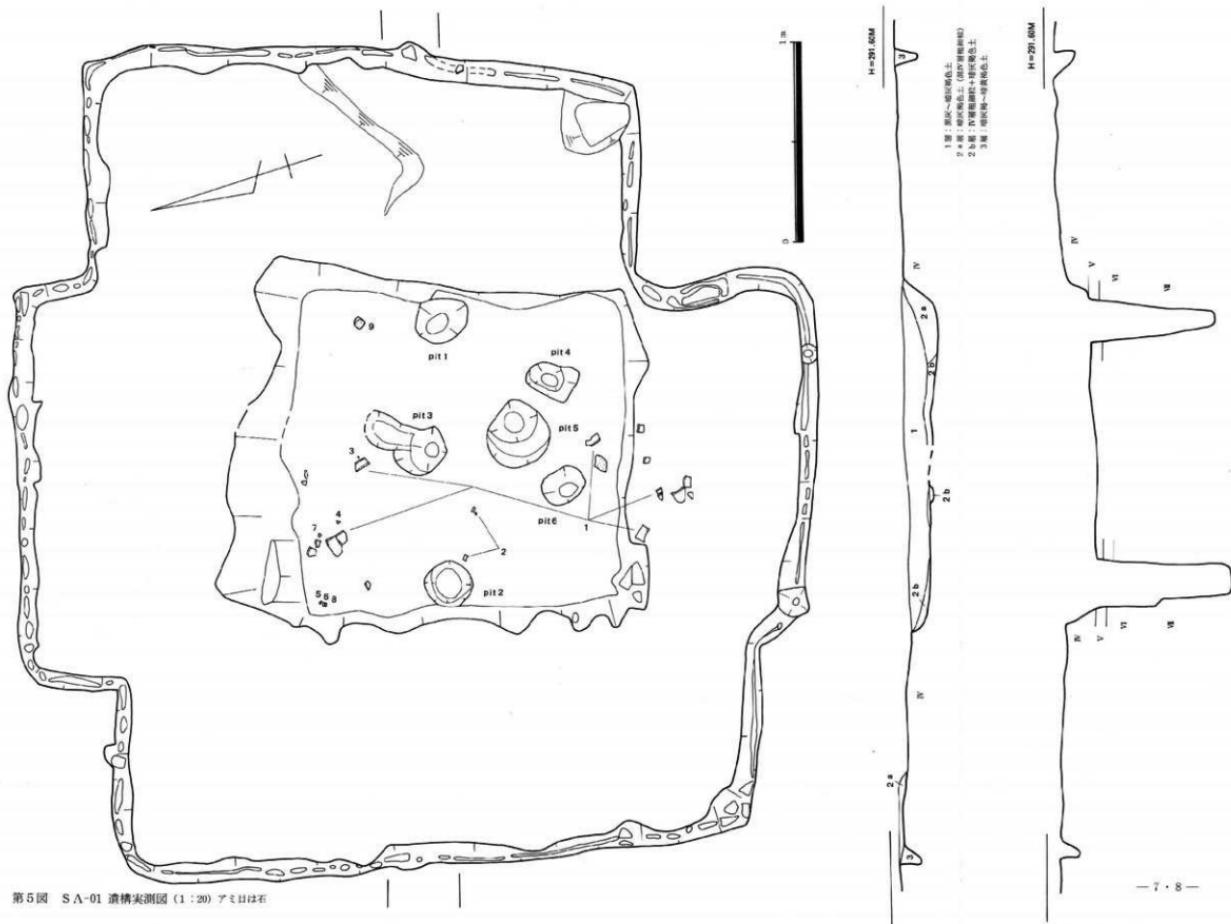
調査対象地域に、約50mおきに19ヶ所設けた。遺跡の北半部は、開墾や道路改修によって搅乱が著しい。南半部においては火山灰が良好に遺存していたものの、遺構は検出されず、極く微量の遺物が検出されたにすぎない。



第3図 層序柱状図



第4図 III~V区 遺構分布図 (1:500)



### 基本的層序（第3図）

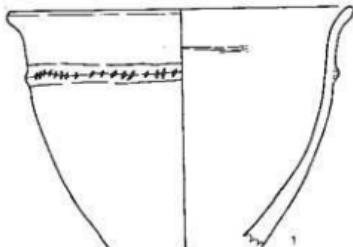
層序は上から、I層：耕作土（黒灰色土）、II層：畑作基盤土・旧耕作土（淡黒灰～暗灰色土）、III層：黒灰色土（a・b 2層に分けられ、b層は硬質である）、IV層：黄褐色微砂質土（アカホヤ火山灰）、V層：暗茶褐色～茶褐色土（硬質ローム、やや粘質、黒灰色土が斑状に混在）、VI層：暗灰～淡黒灰色土、VII層：茶褐色～淡黄褐色土、VIII層：黄褐色土（混接褐色土、硬質）、IX層：黄褐色土（混クサリ礫、=地山）に分別した。なお、台地縁部のIX層は砂礫層（更新世堆積物）である。

## IV. 発掘調査

調査は、遺構確認調査の結果から茅畑地下式横穴墓群分布域と重複する地域に絞り、排土方法等の問題から7区に区分けした。

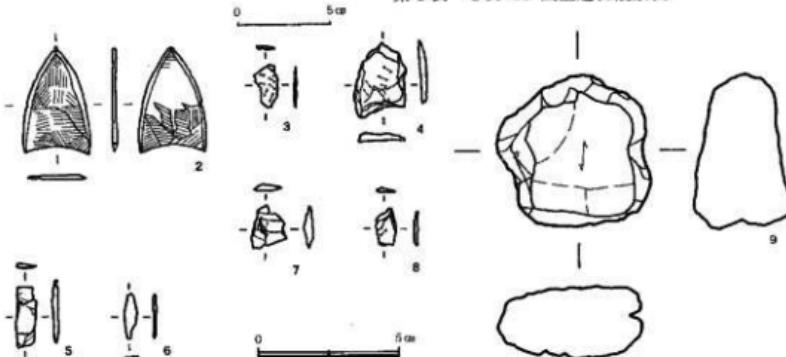
I・II・VI・VII区からは近世ないし近現代と思われる水路や土坑（一筆境畦畔沿いの樹木植栽用の穴）、イモ穴を検出したにすぎず、III～V区に遺構が集中していた。

### 1. 弥生時代の遺構と遺物



No.	回収	器種	法長(mm)	幅	厚	石質	特徴
2	34-3	磨製石鑿	37.5	34	1.5	緑色片岩	基部は面をなす
3	34-8	同 破片	16	8	1	■	A面のみ研磨痕
4	34-4	” ”	27	18	3	■	A面上半のみ研磨痕
5	34-5	剥片 ?	15	12.5	3	■	
6	34-9	剥片 ?	13.5	7.5	1	■	
7	34-6	剥片 ?	21.5	7	2	■	
8	34-7	” ”	16.5	5	1	■	
9	34-2	用途不明	34	53	35	軽石	B面は自然面

第1表 SA-01 出土遺物観察表



第6図 SA-01 出土遺物実測図

III区において、竪穴式住居1（SA-01）を検出したのみである。

#### SA-01（第5図、図版6）

造構面が高く、0.40～0.50m程度削失している。遺存部の規模は、東西3.80～4.20m、南北4.20mを測る。四隅を欠く間仕切りタイプで、幅・深さともに0.10m内外の壁溝が全周する。壁溝には板が立ててあったと思われ、溝底部において、長さ0.10m内外で若干のレベル差が認められる。南辺2ヶ所には、小柱穴が設けられている。

床面中央部（内区）は、0.10～0.18m掘り込まれ、四辺がベッド状造構（外区）になっている。pit 1（直径0.23～0.25m、深さ0.61m）とpit 2（直径0.23m、深さ0.68m）が主柱穴である。pit 3は、直径0.24～0.26m、深さ0.07mのものに、長さ0.18m、幅0.16m、深さ0.02mの浅い掘り込みを伴うものである。pit 4は、直径0.18～0.23m、深さ0.32mを測る。pit 5は、直径0.32～0.35m、深さ0.30mを測り、二段掘りである。pit 6は、直径0.17～0.22m、深さ0.36mを測る。いずれも柱底は無い。

外区は東・西辺を長く、北・南辺を短く区分けしてある。また、上面にはIII層のブロックが多量に混在している。

#### 出土遺物（第6図、第1表、図版34）

全て流れ込みで、原位置を保つものは無い。甕1、磨製石錐1、同 破片3、同 破片もしくは剥片3、用途不明石器1が出土した。

甕は、内区北西部から外区にかけて散在し、底部を欠く。口縁部は外反し、端部外面は肥厚する。体部との境には刻目凸帯1条を付す。内面はナデ調整であるが、外面にはススが付着しており、調整は不明である。内面は茶褐色を呈し、1mm前後の砂粒を含む。

磨製石錐は、完形品1が3片に割れていた（2）。四基式で左右対象形、断面は扁六角形を呈し、錐は無い。B面上半部に剥離面を残すほかは全て研磨され、基部は面をなしている。内区の北西部には、同一石材で片面が研磨されているものや、碎片もしくは剥片と考えられるものが検出された。

その他、片面に磨痕のある軽石1が内区の北東部で出土した。

## 2. 古墳時代の造構と遺物

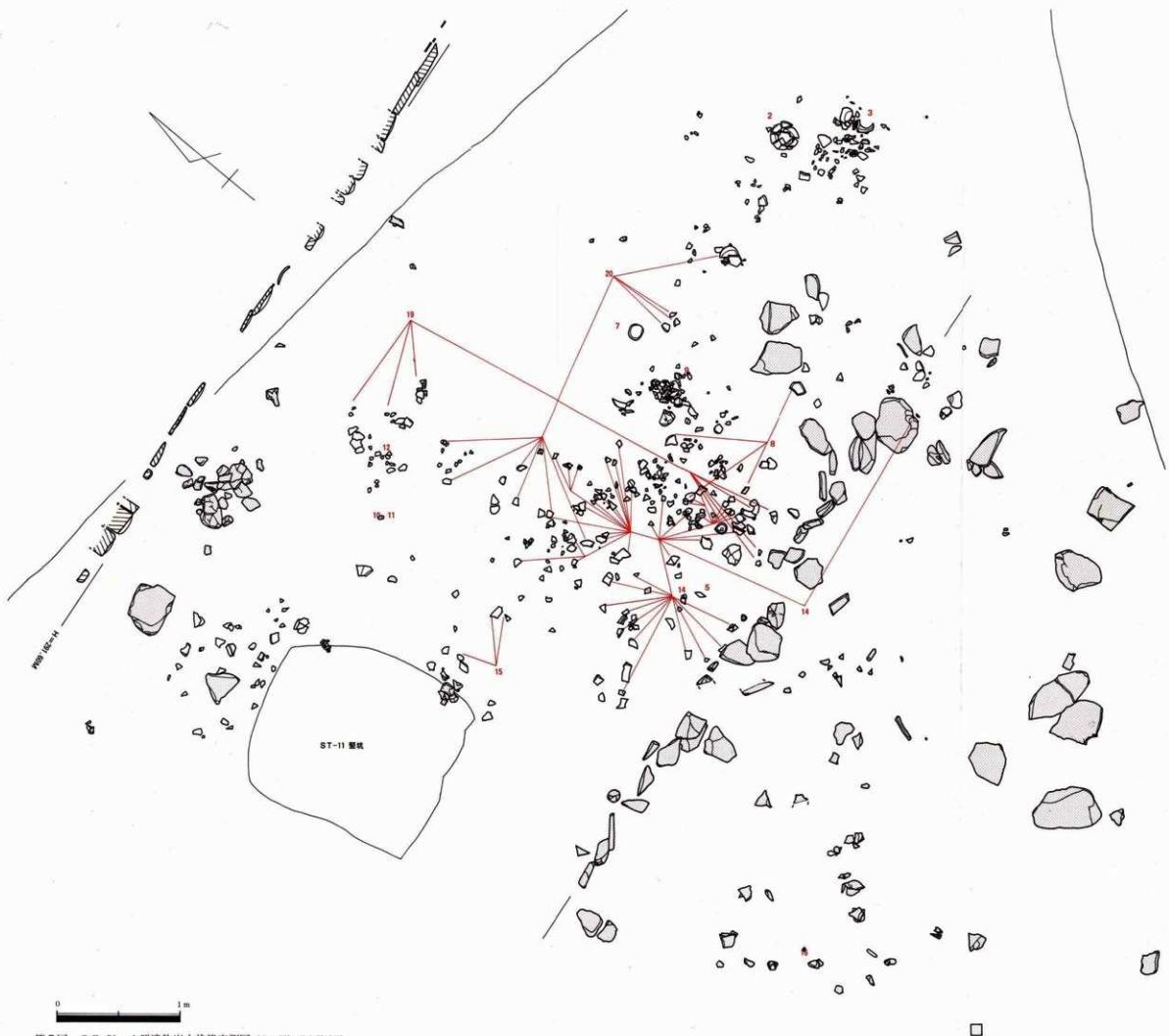
IV～V区において、石組造構1（SZ-01）、地下式板石積石室墓（SI-01～05）、地下式横穴墓（ST-01～19）、柱穴2（PP-01, 02）、土器群7（A～G群）を検出した。

#### SZ-01（第7図、図版7）

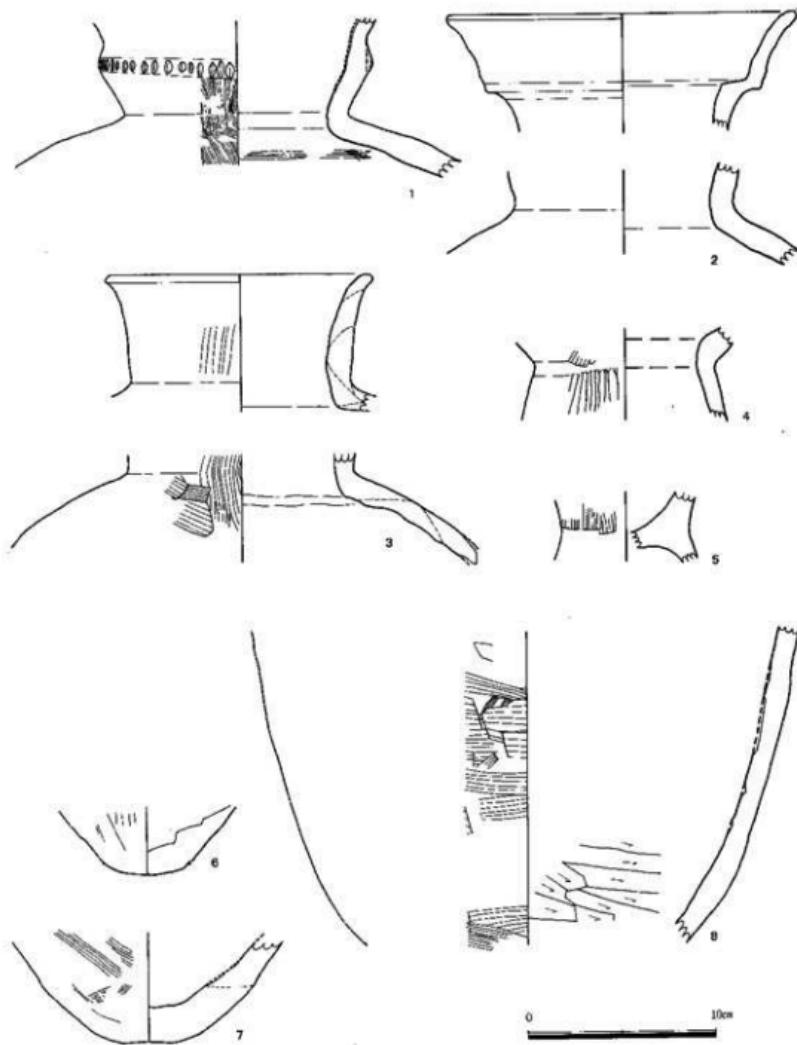
ST-13の西に接して、東西4.80m、南北2.20mの長方形に板石を配置した造構である。

板石は、地下式板石積石室墓や地下式横穴墓の塞石と同じ輝石安山岩の割り石がほとんどで、若干の扁平な河原石を使用している。

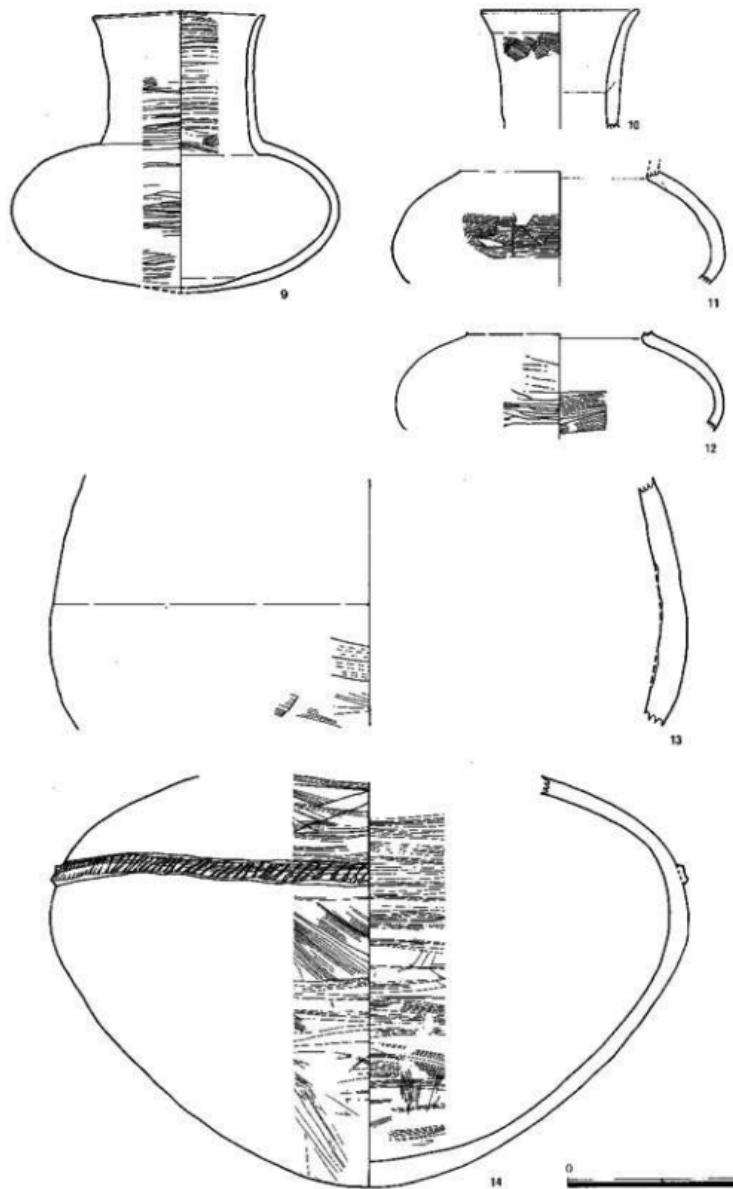
北辺は遺存状態が良い。板石の半数は埋め込まれたままで、掘形も確実された。人頭大を越



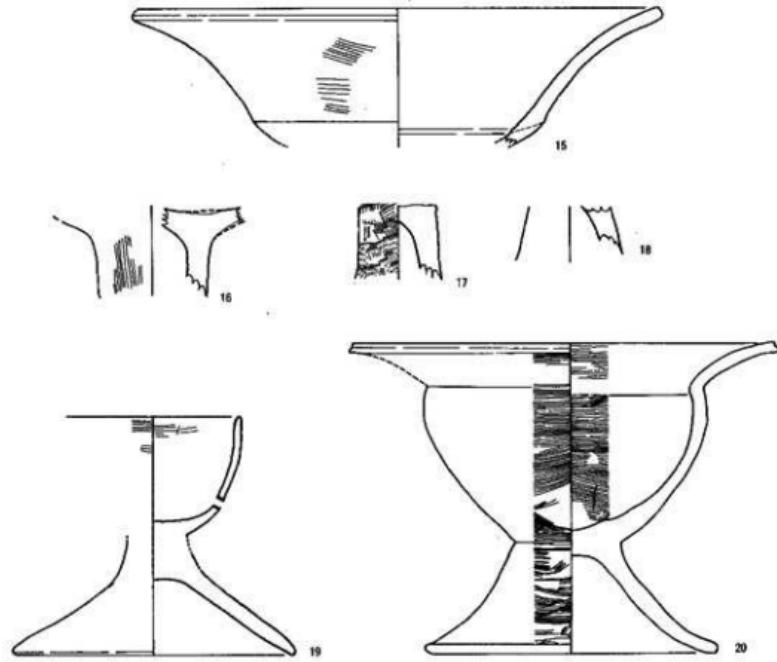
第7図 SZ-01、A群遺物出土状況実測図 (1:30) アミ目は石



第8図 △群遺物実測図(1)(その1) (1:3)



第9図 A群遺物実測図(その2) (1:3)



第10図 A群遺物実測図(その3) (1:3)

0 10cm

編	図版	器形	法量 (mm)			文様および調整			胎			土	焼成	色調	
			口径	底径	高さ	外 面	内 面	砂粒・並 しわ等	赤褐色	外 面	内 面			外 面	内 面
1	35-1	壺				ヨコナデ、ハケ	ナデ、タタキーナデ	1~5', 多	微	良好	淡灰灰	淡黄灰			
2	35-4	壺	185			ヨコナデ、ナデ	ナデ	1~2', 多	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
3	35-2	壺	141			山鱗形ヨコナデ	山鱗形ヨコナデ	1~4', 少	少	良好	淡灰灰	淡黄灰			
4	36-5	壺				船形ハケ	船形ナデ	1~5', 多	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
5		壺				ハケ	ナデ	1~2', 少	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
6		壺	33			ハケ	ハケ	1~2', 多	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
7	35-7	壺	29			ハケ	不明	1~2', 多	多	良好	淡灰灰	淡灰灰			
8	35-8	壺				ハケ	ケズリ	1~2', 多	多	良	淡灰灰	淡灰灰			
9	35-9	長頸壺	90	150	173	ハケ	深腹ハケ、以下ナデ	1'以上, 少	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
10		長頸壺	83			ハケ、ナデ	ナデ	1~2', 少	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
11		長頸壺				ハケ	ハケーナデ、ハケ	福島	1~1.5', 少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
12		長頸壺				173	ヘラミガキ	ナデ、ハケ	糖山	良好	淡灰灰	淡灰灰			
13	35-5	壺				ハケ	ナデ	1~2', 多	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
14	35-3	壺	338			ハケ	ナデ、凸巻以下ハケ	ナデ	1~5', 多	少	良好	淡灰灰	淡灰灰		
15	36-2	高环				ハケ	ナデ	1~2', 少	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
16	36-1	高环				ハケ	不明	1~2', 多	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
17		高环				ハケ	ナデ	1'以上, 多	少	良	淡灰灰	淡灰灰			
18		高环				ハケ	ナデ	1'以上, 多	少	良	淡灰灰	淡灰灰			
19	36-3	高环	84~93	143	80	ハケ、圓ハケーナデ	ハケ、ナデ	精良	少	良好	淡灰灰	淡灰灰			
20	36-4	台付鉢	227	150	165	ハケ	ハケ	1~2', 少	少	良	淡灰灰	淡灰灰			

第2表 A群遺物観察表

えるものは、全て倒れたり移動している。南辺は、大きめ（長さ0.30～0.50m）の板石が倒れている状態で、東・西辺も極く一部しか遺存していない。南西部には、5～15cm大の、破碎片と思われる板石が散在している。

**A群遺物**（第7～10図、第2表、図版35～36）

S T-11の東、S Z-01の北に遺物が集中している。S Z-01内にも微量ながら散布している。破片数は多いが、個体数としては25前後である。壺8と長頸壺4、壺2、高杯5、台付鉢1の計20点が同化できた。各々の個体片は広範囲に散り、全体の形状がわかるのは9の長頸壺のみである。

1は複合口縁の壺で、肩が強く張るタイプである。口縁丸部は肥厚し、米粒大の刻み目が施されている。2は1と異なるタイプの壺で、くの字に屈曲する部位の稜線は鋭い。口縁端部は面をなし、端部は鋭い。3は、口縁部がゆるやかに外反し、端部を屈曲させるタイプの壺である。4は小型の壺、5は壺の底部片である。6と7は壺の底部で、平垣面をわずかに有する。8と13は壺の胴部であるが、傾きに不安がある。9～12は長頸壺で、12の外面のみヘラミガキ他はハケとナデ調整である。9の底部は丸底に近く、内面の器壁は薄く削られている。13は壺の胴～底部で、破片がすべて接合したものの、半個体分しか遺存していない。胴部には、断面M字型の突帯が巡り、刻み目が施される。器壁はほぼ均等の厚さで、ハケあるいはナデ調整によって丁寧に仕上げられている。15は大型の高杯の杯部で、外面にハケ目を一部残すが、全体的に丁寧な仕上げである。16～18は高杯の脚部であるが、一様ではない。19の杯部の器壁は薄く、いびつである。脚部は直線的に扇状に広がり、内部にはモミ殻の圧痕がある。20は台付鉢で、口縁部と体部、底部と体部の境は鋭く屈曲する。口縁端面には若干の凹みがある。

**S I-01**（第11図、図版7・8）

S K-01、S T-01、S I-02、03と隣接する。

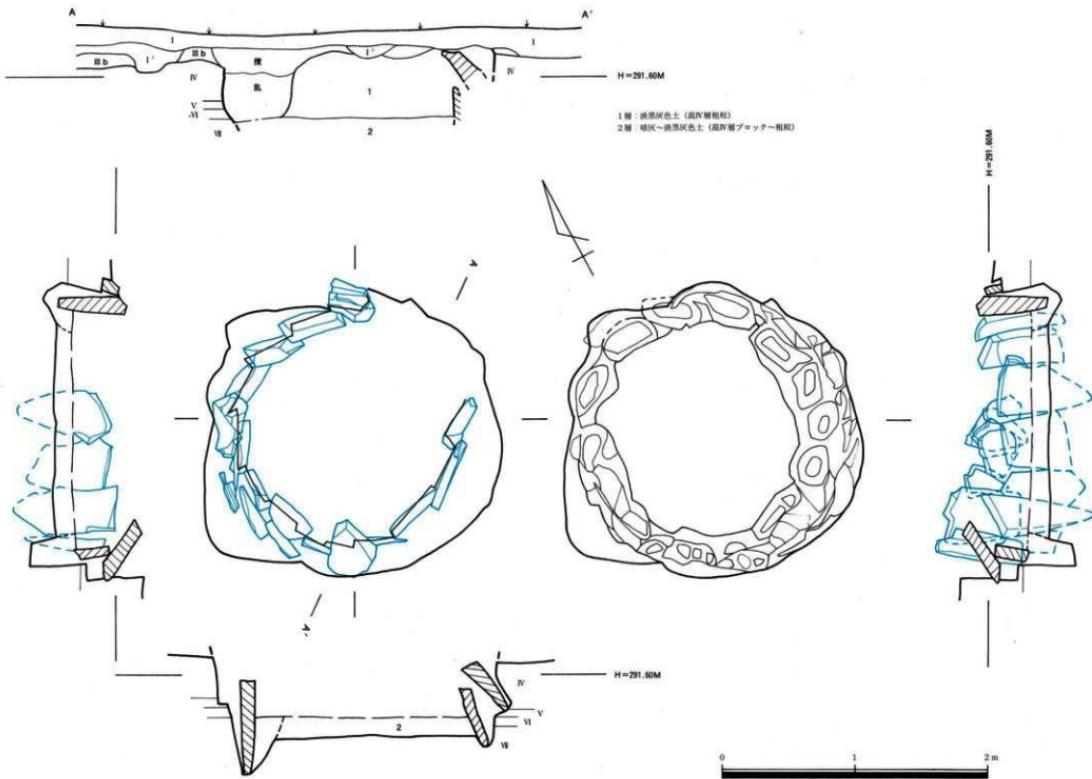
表土を剥ぐとすぐに、板石の一部が露出した。上部構造は削失し、側石（基底立石）も1/4が抜去されている。プランは半円半方形を呈し、墓壙の規模は長さ2.24m、幅2.12m、底面までの深さ0.60mを測る。床面までの深さは0.45mで、その差0.15mが貼り床である。貼り床後、周壁に、側石を立てるために深さ0.22～0.43mの坑が個別に掘削される。側石の裏込めには、アカホヤ塊が多く使用されている。側石は13枚遺存している。床面は内法径1.60～1.80mの円形を呈する。墓壙壁面は、石室構築（持ち送り）のための抉り込みやテラスが設けられている。

出土遺物は無い。

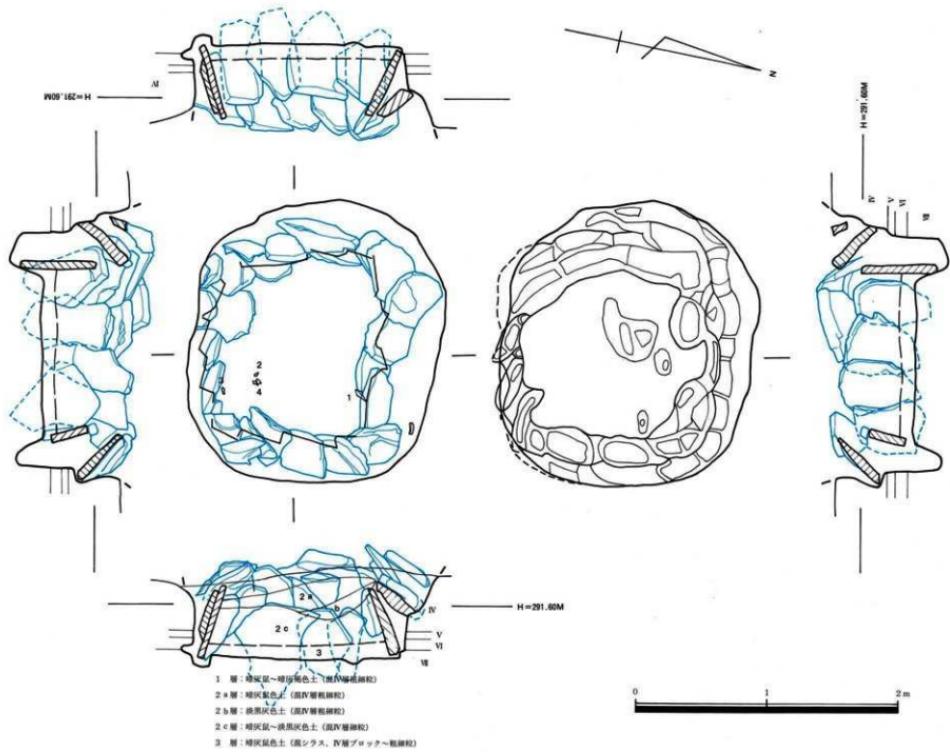
**S I-02**（第12図、図版9）

S T-10とS I-03の間に位置する。

上部構造は削失するが、天井石2～3段まで遺存している。検出時には、天井石の一部がS T-10の堅坑寄りに散乱しており、早くに損壊を受けたものと思われる。



第11図 S I-01 造構実測図 (1 : 30)



第12図 S I -02 造構実測図 (1 : 30)

プランは梢円形に近い隅丸方形で、墓壙の規模は長さ2.14m、幅1.90m、底面までの深さ0.66mを測る。さらに周壁には、深さ0.09~0.26mの側石溝が個別に掘削される。側石の裏込めと並行して、厚さ0.12m前後の貼床（第3層）が施される。床面上にはシラスも混入される。側石は北・南・東辺で各4枚、西辺3枚で構築され、床面の内法は、東西1.22~1.40m、南北1.12~1.40mの垂方形を呈する。

墓壙の壁面には、内傾する抉り込みやテラスが設けられている。

#### 出土遺物（第13図、図版39）

北東部に1点、南東部に3点の鉄鎌を検出した。1は床面から0.17m、2~4は0.05m浮いた状態で、原位置ではない。1・2・4の頭部には、樹皮巻き矢柄（竹）が遺存している。

1は、主頭広根斧箭式である。現存長96mm、鎌身長16mm、最大幅35mmを測る。2~4は、椿葉式である。2は全長81mm、鎌身長と最大幅は25mmである。3は全長52mm、鎌身長14mm、最大幅18mmである。4は全長45mm、鎌身長11mm、最大幅13mmである。

#### S I-03（第14図、図版10）

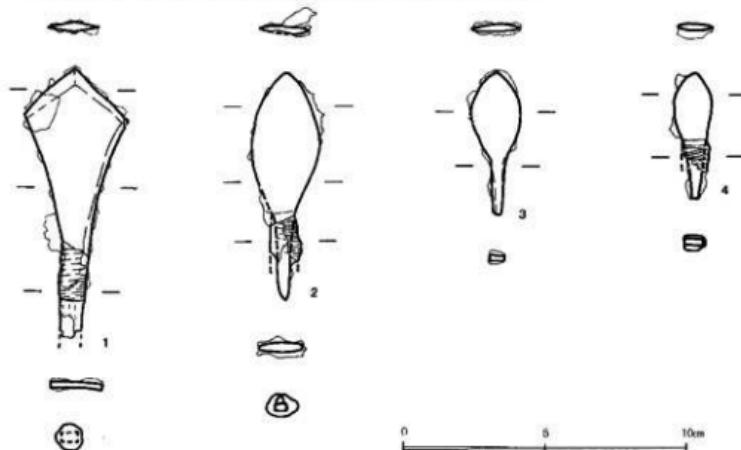
S I-02から東へ0.90mに位置する。

地下式板石積石室墓の中では、最も小規模な遺構である。

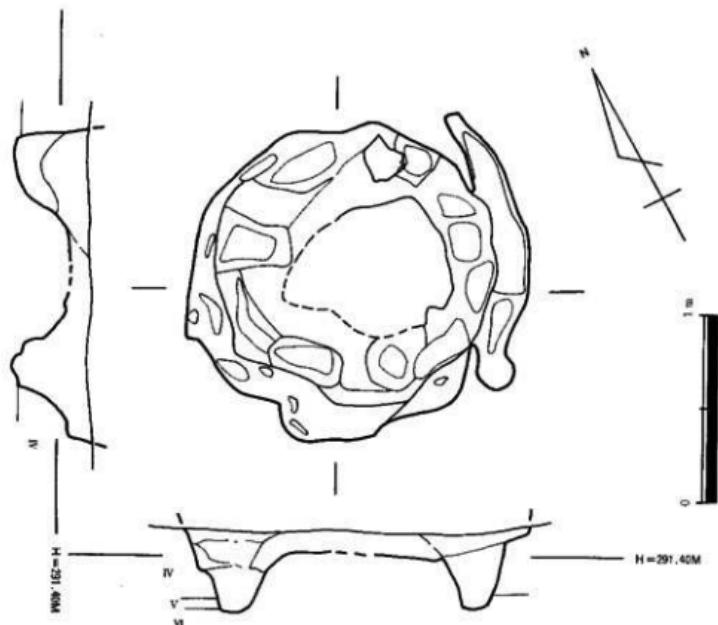
後世の削平および搅乱が著しく、板石も全て抜かれていた。

プランは円形を呈し、墓壙の規模は、直径1.70~1.80m、底面までの深さ0.11mを測る。貼り床の有無は不明である。周壁には、深さ0.20~0.30mの側石溝が掘削される。床面の内法は直径0.70~0.90mであったと推定される。

出土遺物は、側石構内から土師器片が1点出土したのみである。



第13図 S I-02 出土遺物実測図 (1:2)



第14図 S I-03 造構実測図 (1:30)

**S I-04 (第16図、図版10・11)**

他の板石積石室墓とは、距離を置く。掘形は原形を保っているものの、内部の搅乱は著しく側石9枚と天井石1枚が原位置を保っていたにすぎない。

プランはほぼ正円形で、墓域の規模は直径2.50m前後、底面までの深さ0.50~0.55mを測る。周壁には、深さ0.18~0.30mの側石溝が掘削される。側石構築後、シラス塊の混じる厚さ0.06~0.08mの貼床（第5層）が施される。

床面は、内法1.84m前後の円形を呈する。

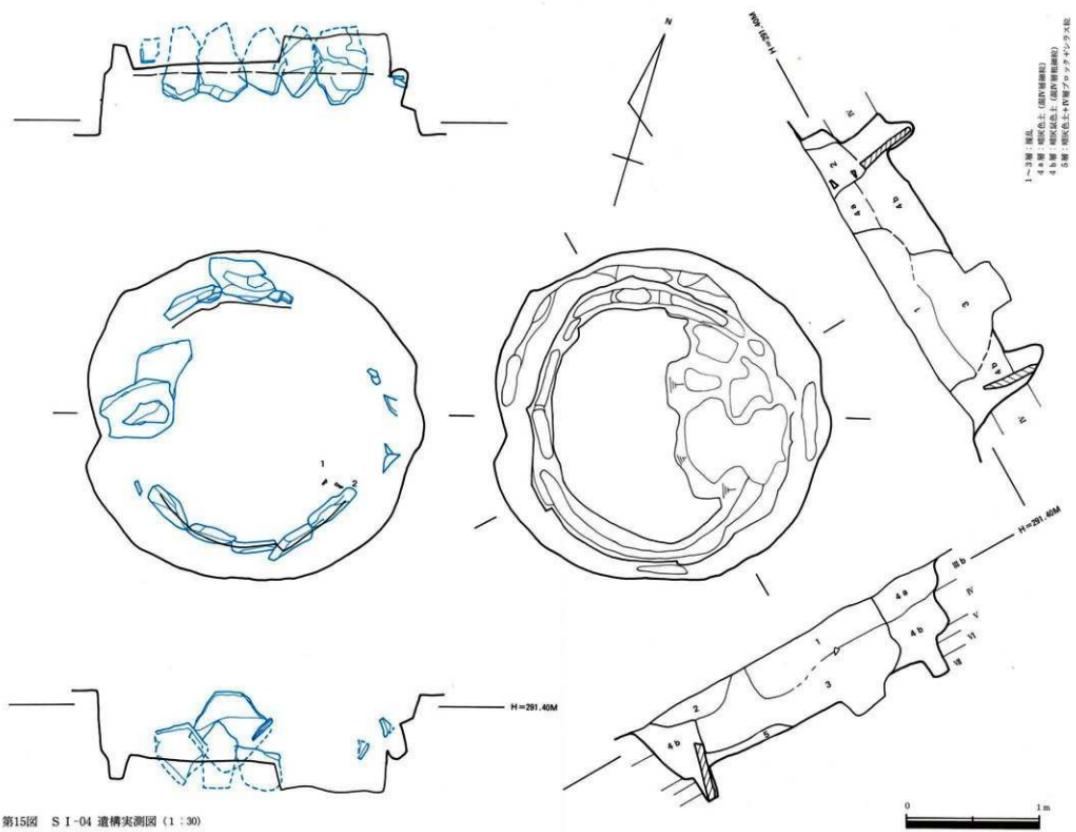
**出土遺物 (第16図、図版39)**

掲示坑から、鉄鏃の頭部2点が出土した。2点とも広根式で、1は現存長46mmを測り、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。2は現存長36mmを測る。

**S I-05 (第17図、図版11)**

S T-10の北東1.50mに位置する。

プランはほぼ円形で、掘形の規模は直径2.00~2.20m、底面までの深さ0.60mを測る。側石溝は北~東部にかけてみられ、深さは0.05~0.15mを測る。



第15図 S I-04 遺構実測図 (1 : 30)

墓壙埋上からは、1片の板石も出土していない。また、最下層はIV層のブロックを主とし、人為的に埋め戻した感を受ける。

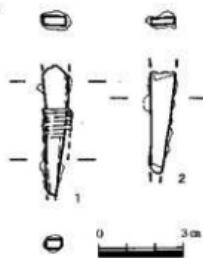
平面プラン、墓壙の規模と断面形態、側石溝の掘り込み状態、さらに板石の有無を総合すると、当墳墓は築造途中に何らかの理由で放棄されたものと思われる。

出土遺物は無い。

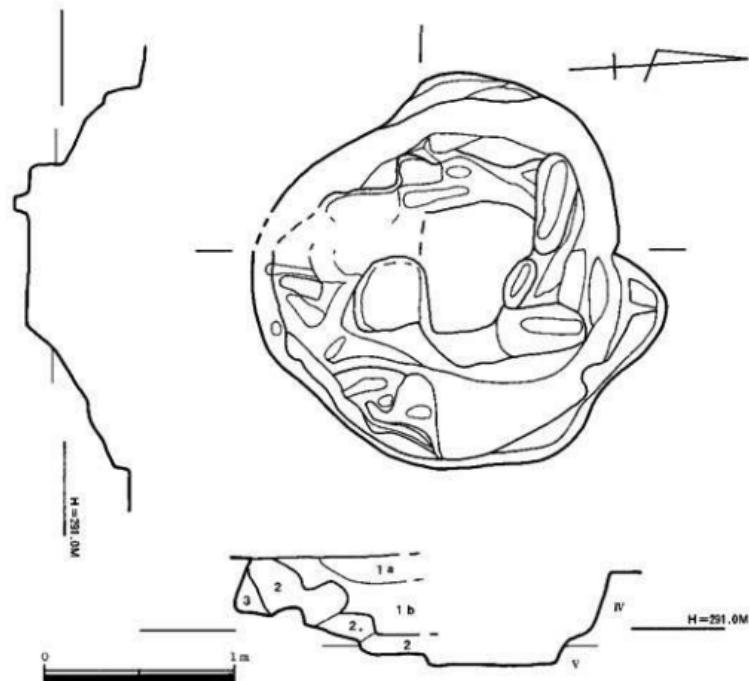
#### B群遺物（第18・19図、図版36）

S I -05上面の南部から南方にかけて、土師器の破片が集中していた。壺と長頸壺、高杯で構成されるが、図化できる遺物が少ない。

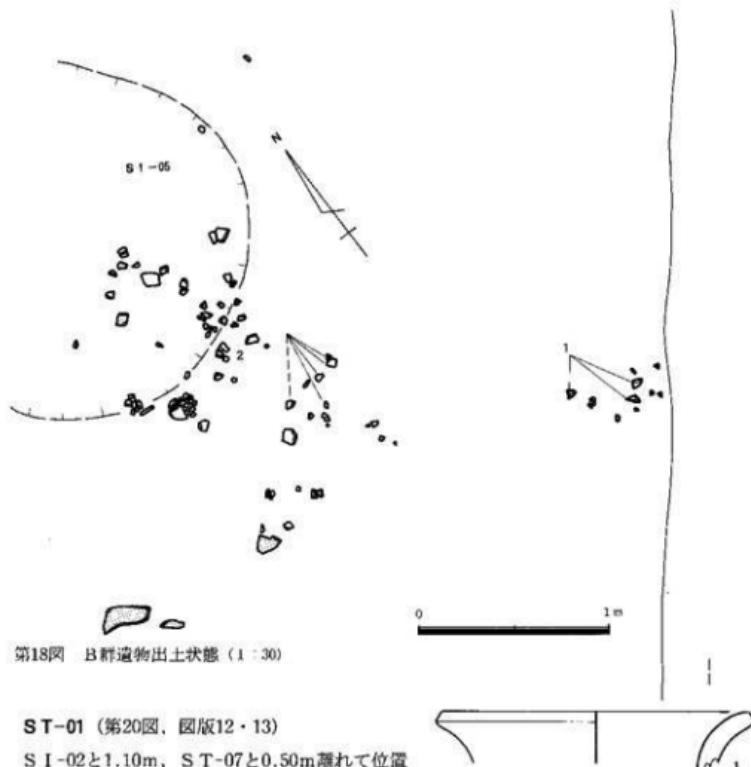
1は、壺の口縁部で口径16.2cmを測る。外反する口縁部の端部は面をなす。調整は不明である。2は、長頸壺の肩～胴部で、最大径11.7cmを測る。調整は不明である。



第16図 S I -04出土遺物



第17図 S I -05 造構実測図 (1 : 30)



第18図 B群遺物出土状態 (1:30)

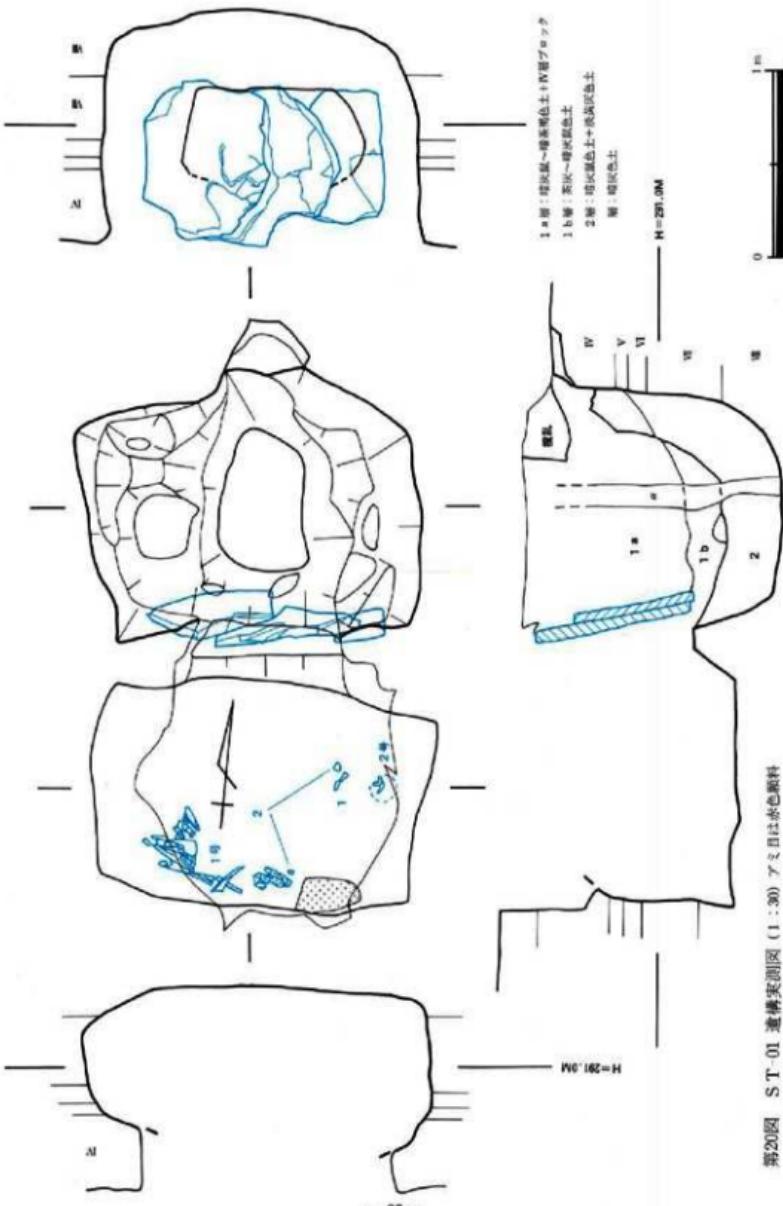
ST-01 (第20図、図版12・13)  
SI-02と1.10m、ST-07と0.50m離れて位置する。主軸方位は、N175°Eを示す。

狭道板石閉塞、平入り長方形プランである。  
竪坑は長さ1.86m、幅1.30mを測り、北辺が不整形となる。深さは1.39mを測り、底面は浅い凹面形態である。玄室との間には、断面台形の仕切りが削り出されている。上面は長さ0.10~0.20m、幅0.66~0.81mの台形で、竪坑との比高0.47m、玄室との比高0.22mを測る。玄室は長さ1.66~1.82m、幅1.00~1.22mで、長辺が外湾する。高さは0.90m前後と推定される。壁面は直立するが、明瞭な稜線を持たない。

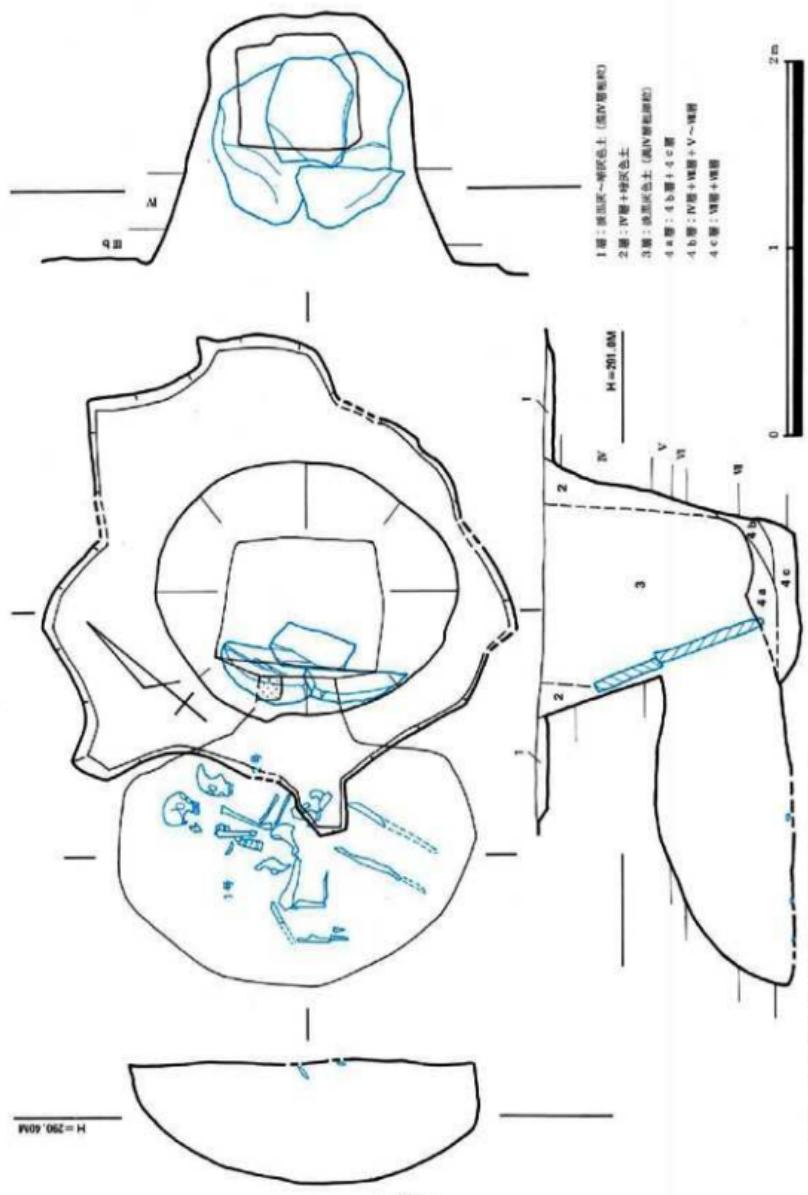
被葬者は2体であるが、遺存状況が悪い。1号人骨の頭部にあたる所には、赤色顔料が認められた。2号人骨は、頭骨の一部のみ遺存していた。

狭道は、長さ0.7~0.8m、幅0.4~0.8m、厚さ0.05m前後の板石3枚で閉塞されている。

竪坑埋土は、III~VII層のブロックからなる1a層、III~VII層を主とする1b層、III~VII層のブロックを主とする2層に区分できる。a層は軟質で、木炭のようである。



第20図 ST-01 連携実測図 (1:30) アミはが色顔料



第21図 S-T-02 竜樽実測図 (1:30) ア: 目赤色断面

玄室周囲に土層観察用土手を残せたが、盛土は確認できなかった。

閉塞石下底が1b層上面にあること、1層と2層の層界の様子、堅坑北辺部の突出状況、さらには人骨2体の遺存状況の差を総合すると、当墳墓の追葬行為を想定できる。

#### 出土遺物（第24図-1・2、図版40）

1号人骨の北に鉄鎌の頭部(1)が、2号人骨の西に1の鎌身部と2が検出された。1の鎌身部は、床面下に突き刺さっていた。当墳墓は玄室の天井が陥没したため、遺物は原位置を保っていない（多少の移動）と考えられる。

2点とも主頭広根斧箭式で、1は小型のタイプである。1は現存長49mm、鎌身長13mm、最大幅23mmを測り、樹皮が一部に遺存している。2は現存長85mm、鎌身長12mm、最大幅34mmを測り、樹皮巻き矢柄が遺存している。

#### ST-02（第21図、図版13・14）

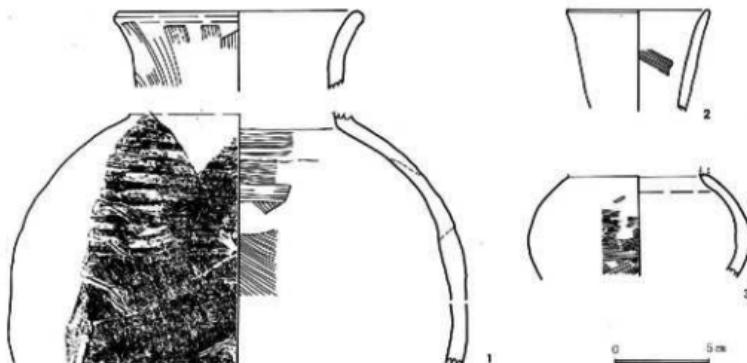
主軸方位は、N130°Wを示す。羨道板石閉塞、平入り梢円形プランを呈する。

堅坑上面は長さ1.60m、幅1.38mの梢円形を呈し、さらに外周には、直径2.50m前後、深さ0.02~0.13mの不整形な掘り込みが認められた。これは、閉塞後、堅坑を埋め戻す際に偶然削られたものと思われる。深さは1.36mを測り、底面は長さ0.72~0.86m、幅0.62~0.69mの長方形を呈する。羨道は長さ0.36m、幅0.39~0.67m、高さ0.66~0.69m、堅坑底部との比高0.10mを測り、玄室へ向かって緩やかに傾斜する。玄室は長さ1.88m、幅1.31mを測り、奥壁と側壁の区分がない。高さは0.72mを測り、アーチ形を呈する。壁面は、左側のみ直立する。

被葬者は女性2体で、1号人骨は屈膝葬である。

羨道は長さ0.55~0.85m、幅0.32~0.52m、厚さ0.06m内外の板石4枚で閉塞される。

堅坑埋土は、大きく3層（第2層、3層、4a~b層）に分けられ、第3層の切り込み状態および閉塞石下底のレベルから追葬行為が確認できる。



第22図 ST-02 堅坑埋土山上遺物実測図（1:3）

### 出土遺物（第22図、図版38）

副葬品はないものの、堅坑埋上から土師器片が出土した。

1は、口径12.6cmを測る長胴型の壺である。口縁部は直線的に曲がり、端部は丸みをもっている。口縁部内面はナデ、口縁部・胴部外面はハケ、胴部外面はタタキのあとハケ調整が施される。2と3は、長頸壺である。2は口径7.6cmで、口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面ハケ調整である。3は胴部最大径18.8cmで、外面ハケ、内面ナデ調整を施す。

### S T-03（第23図、図版14）

狭道閉塞の墳墓群とは距離を置いて位置する。遺構検出時には、すでに玄室の天井が崩落し黒灰色土が埋積していた。

主軸方位は、磁北を示す。堅坑上部閉塞、平入り長方形プランである。堅坑の1段目は、長さ1.10m内外、幅0.94～1.22m、深さ0.18～0.22mを測る。2段目は長さ0.62m、幅0.52m、深さ0.96m、遺構面からの深さは1.14mを測る。底面は、袋状に広がる。羨道は長さ0.30～0.46m、幅0.42～0.66m、高さ0.75mを測る。玄室は長軸と斜交し、長さ1.46～1.57m、幅1.20mを測る。高さは1.10m前後と思われる。壁面は直立する。側壁は不整形で、片袖に近い。

堅坑上部は、長さ0.66～0.90m、幅0.10～0.48m、厚さ0.05m内外の板石4枚で閉塞される。

### 出土遺物（第24図-3～5、第51図-43、図版40・42）

玄室の北東端に、右側槅とほぼ並行して鐵鎌3本と短剣1振が副葬されていた。3は、全長91mm、鎌身長15mm、最大幅24mmを測る三角形式である。4は、全長132mm、鎌身長19mm、最大幅35mmを測る圭頭広根斧箭式である。5は、現存長116mm、鎌身長24mm、最大幅38mmを測る圭頭広根斧箭式である。いづれも樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。43は現存長195mm、鎌身長167mm、身幅38mmを測る。身部には木製鞘の一部が、柄には鹿角が遺存している。

### S T-04（第25図、図版15）

S T-02と1.60m、S T-05と0.55m離れて位置する。主軸方位は、N127°Wを示す。

狭道板石閉塞、平入り楕円形プランである。堅坑は、長さ1.35m、幅1.19m、深さ1.40mを測る。底面は長さ0.85m、幅0.50～0.62mの隅丸長方形を呈する。羨道は長さ0.14m、幅0.51m、高さ0.52m、堅坑底面との比高0.22mを測る。玄室は、長さ1.70m、幅1.13m、高さ0.66mのアーチ型を呈する。床面には、0.04mの貼床が施される。

被葬者は女性1体で、頭部と足先にシラス塊が置かれている。

羨道は、長さ0.40～0.80m、幅0.10～0.44m、厚さ0.05m内外の板石5枚で閉塞される。

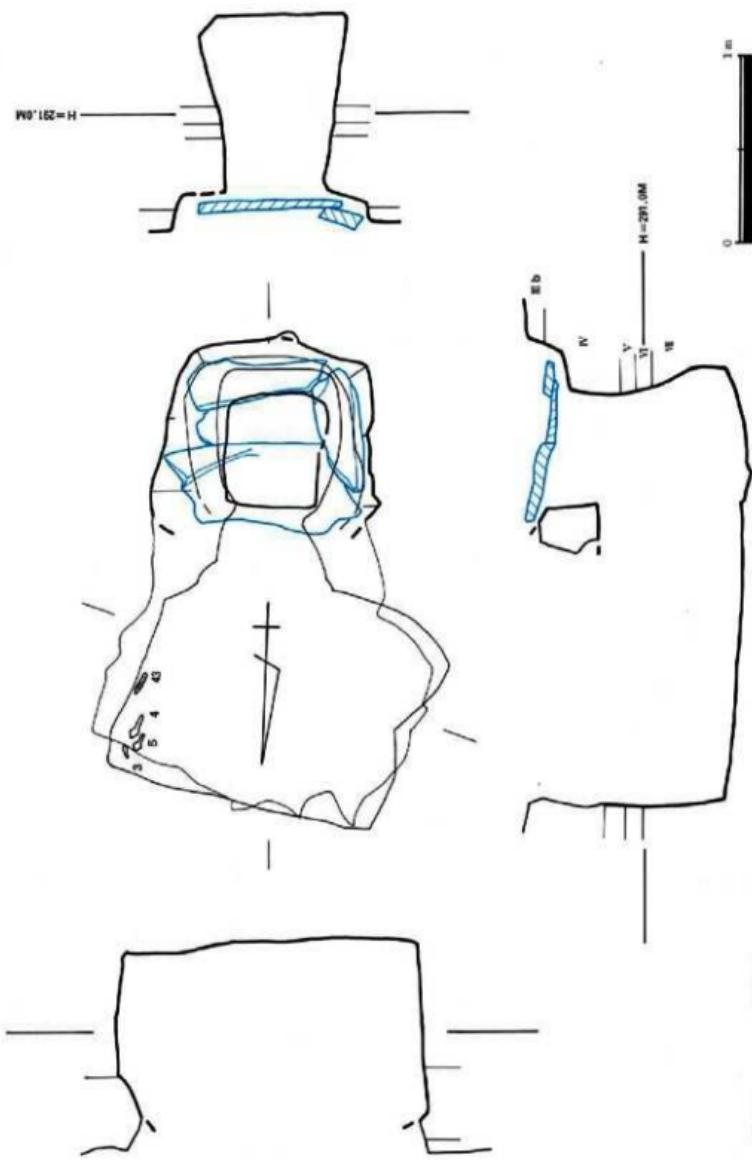
出土遺物は無い。

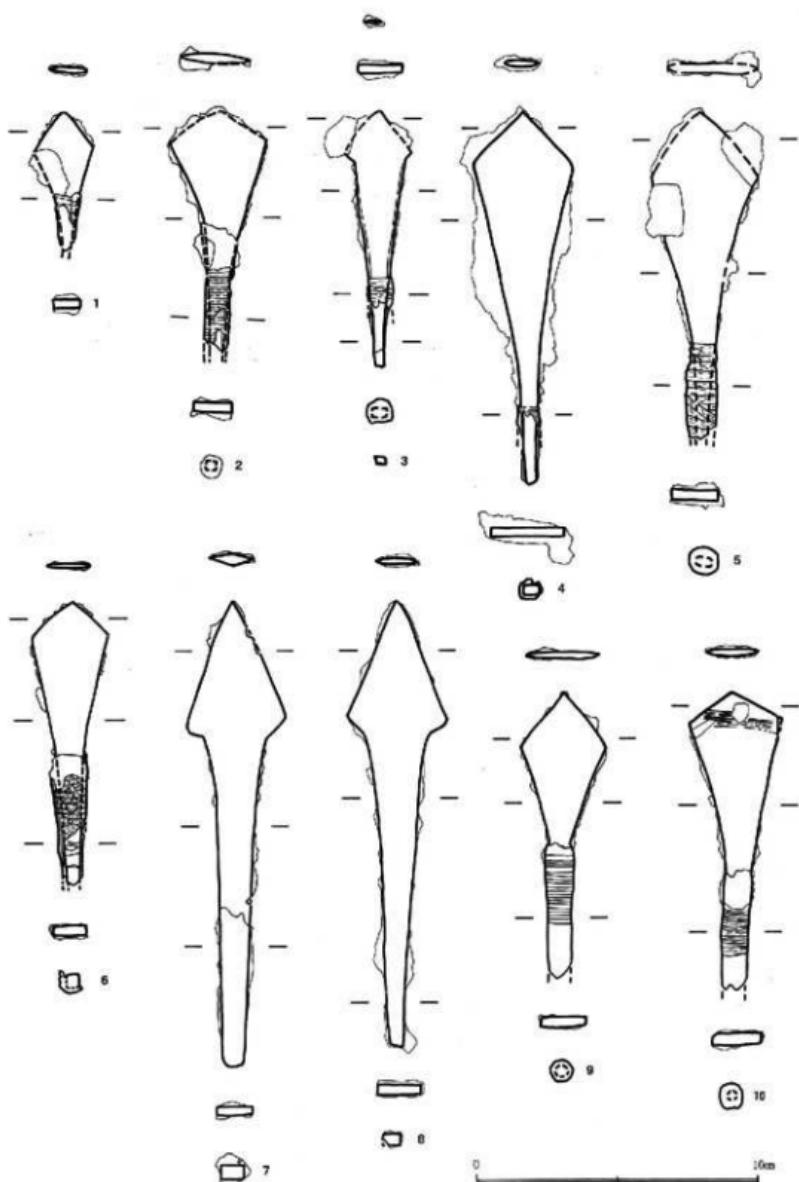
### S T-05（第26図、図版16）

主軸方位は、N98°Wを示す。羨道板石閉塞、平入り楕円形プランを呈する。

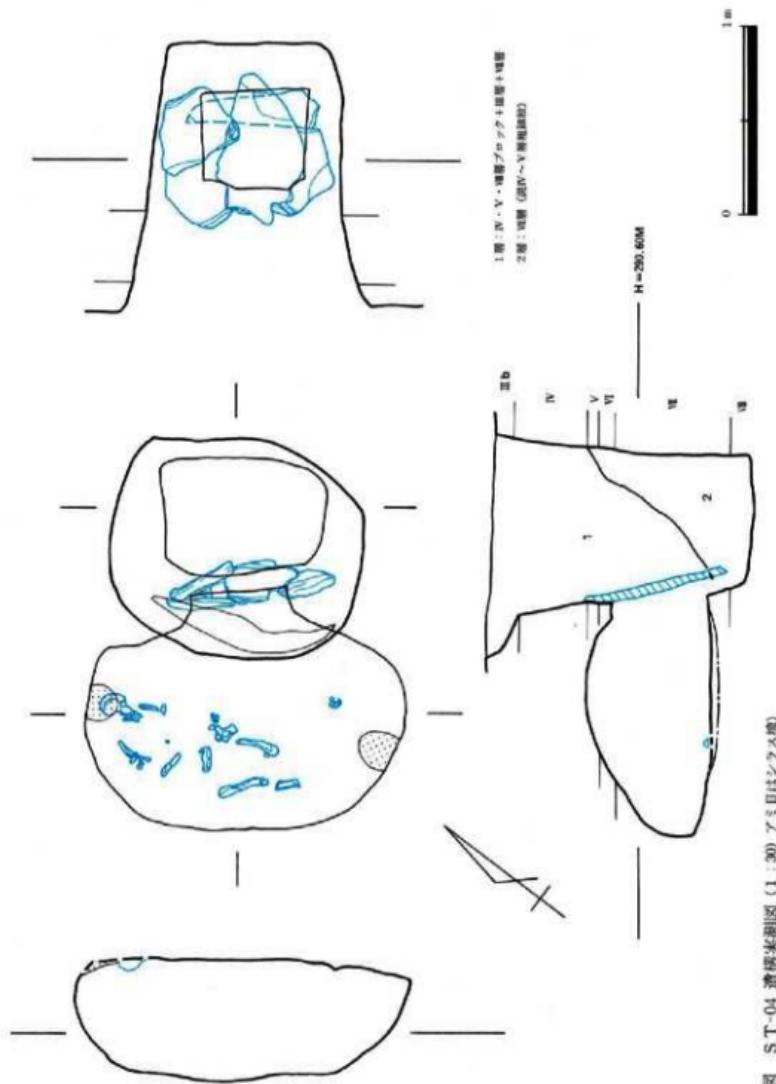
堅坑は長さ1.15m、幅0.97m、深さ1.07mを測る。底面は、長さ0.94m、幅0.66mの隅丸長方形を呈する。羨道は、長さ0.11～0.17m、幅0.42m、高さ0.50m、堅坑底面との比高0.04m

第23図 ST-03 造構光剥図 (1 : 30)

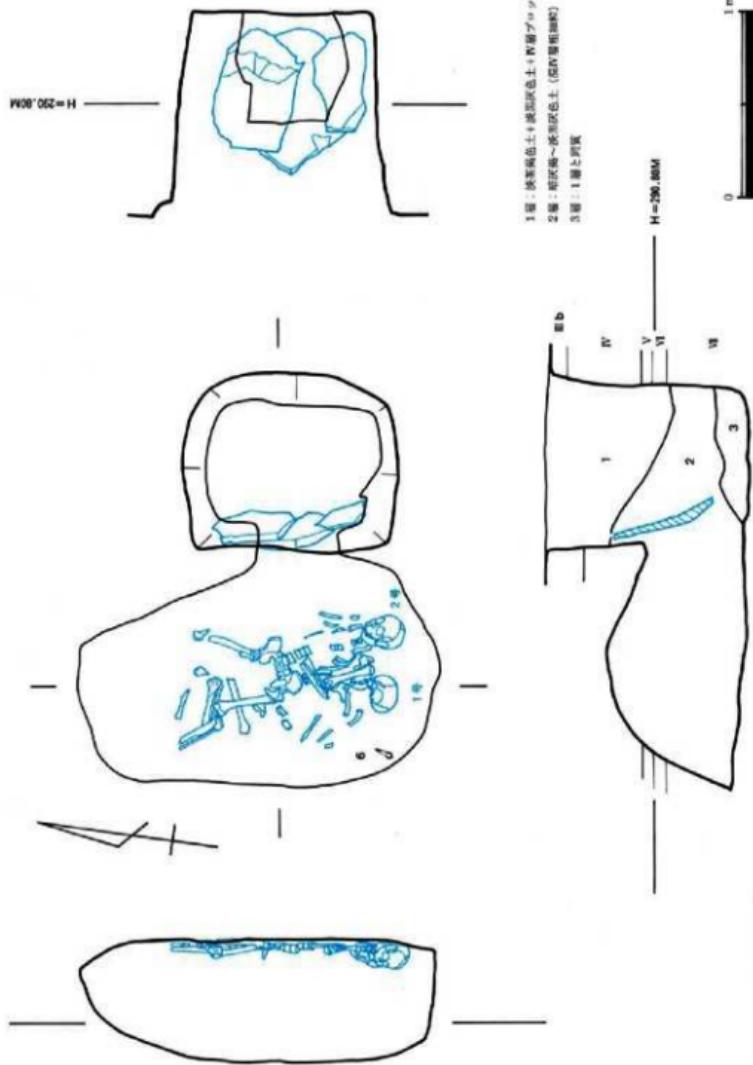




第24図 S T-01, 03, 05, 06, 07出土鉄鎌 実測図 (1 : 2)



第25図 ST-04 遺構実測図 (1:30) アミナシラス境



第26図 ST-05 遺構実測図 (1:30)

を測る。玄室は、不整形で北側に張り出し、長さ1.92m、幅0.74~1.24m、高さ0.73mを測りアーチ型を呈する。

被葬者は男性2体で、遺存状態も良い。

羨道は、長さ0.53~0.77m、幅0.15~0.50m、厚さ0.04m内外の板石3枚で閉塞される。

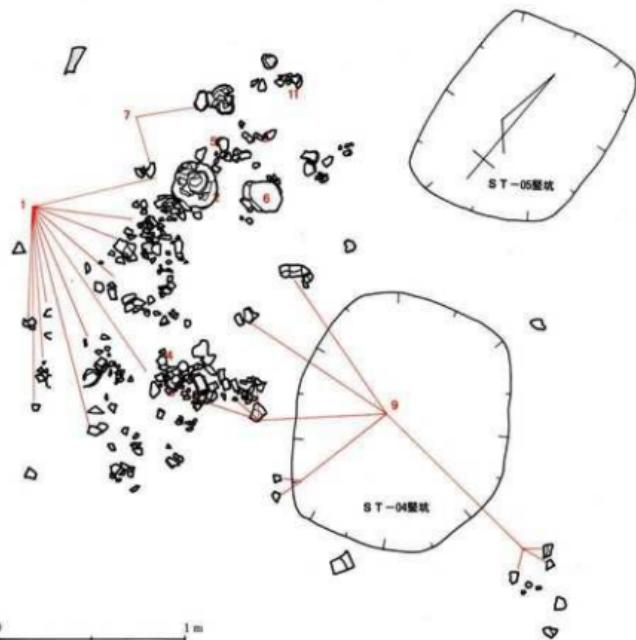
#### 出土遺物（第24図-6、図版40）

1号人骨の頭部に並行して、鉄鎌を1本副葬している。現存長101mm、鎌身長12mm、最大幅27mmを測る。圭頭広根斧箭式で、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。

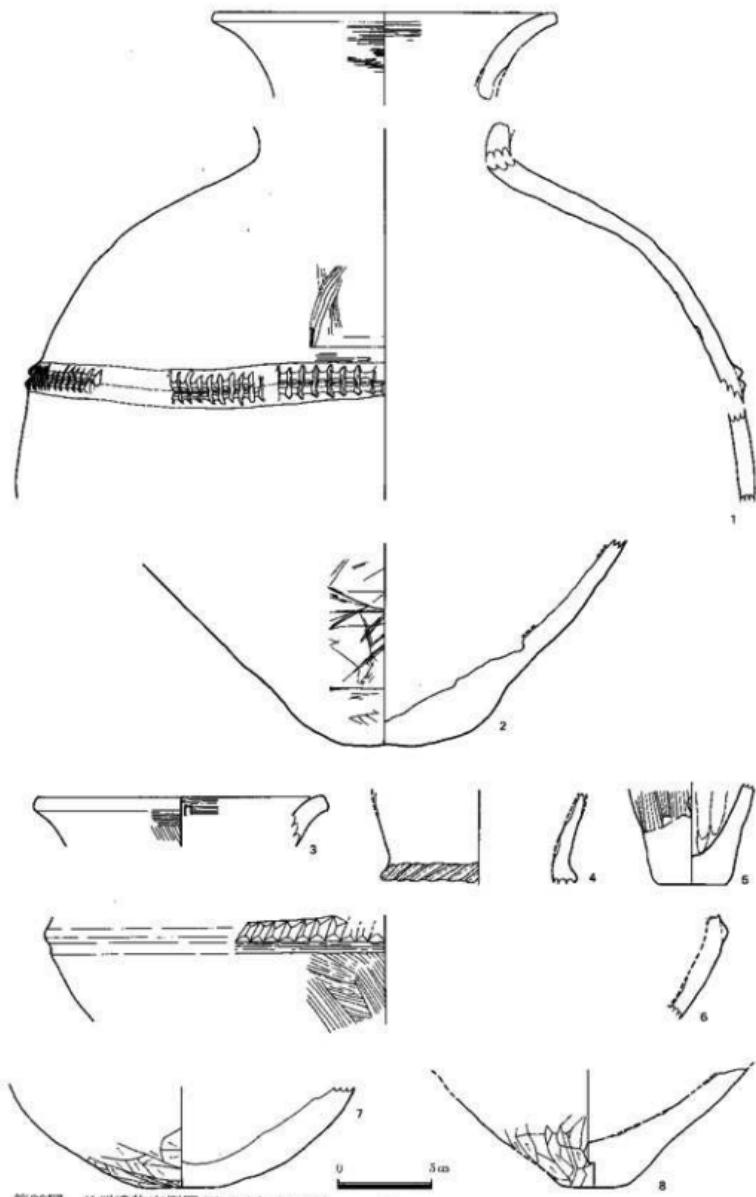
#### C群遺物（第27~29図、第3表、図版36・37）

S T - 04と05の玄室上面にあたる区域において、土師器が纏まって出土した。壺4、甕1、脚台付鉢1、塙2、手捏ね土器1で構成される。1と10は、広範囲に散在していた。

1の胸部に貼り付けてある突帯は、回部に沈線を施した後に、刻み目を入れていて。6の壺は、蒲鉾形に面取りされた突帯を有し、その直下は箆状工具で調整される。10の脚台部には、小孔が4個穿たれている。



第27図 C群遺物出土状態実測図 (1:30)



第28図 C群遺物実測図(その1) (1 : 3)

### ST-06 (第30図、図版17)

ST-05と1.3m離れて位置する。主軸方位はN 58° Wを示す。

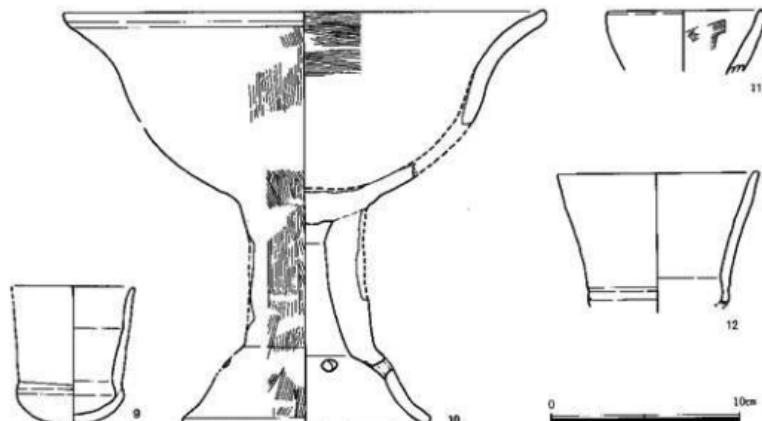
羨道板石閉塞、平入り長方形プランである。竪坑は隅丸長方形で、長さ1.52m、幅1.18m、深さ1.12mを測る。底面は不整形である。羨道は長さ0.20~0.27m、幅0.41~0.60m、高さ0.50m、竪坑底面との比高0.14mを測る。玄室は、長さ1.64~1.82m、幅1.12~1.24m、高さ0.79mを測る。天井部は奇抜造りで、棟木が削り出されている。

被葬者は男性1体で、良好に遺存している。

羨道は、長さ0.40~0.50m、幅0.30m内外、厚さ0.04m内外の板石5枚で閉塞される。

### 出土遺物 (第24図-7、8、第51図-41、図版40・42)

玄室東隅から鋸を中央に向かって直刀1振と、並行する鉄鎌2本が副葬されていた。41は、鋸



第29図 C群遺物実測図(2) (1:3)

A	面版	形	法 軸 (mm)		文様および調査		助 手	焼成	色 調		
			口径	底径	器高	外 面	内 面		しそ算石	赤褐色斑	外 面
1	37-1.3	壺	183		395	口コナギ、ナデ	ハケ、肩部は不明	1~2'、多		良好	淡茶褐色
2	37-6					ハケ、ナデ	不明	1~3'、多	多	良	淡茶褐色
3	37-2	壺	156			ハケ	ハケ	1~4'、少	微	良	淡茶褐色
4	36-8	壺				ナデ	ナデ	1~2'、多		良	淡茶褐色
5	37-5	壺	36			ハケ、ナデ	ナデ	1~2'、多	~3'、少	良	淡茶褐色
6	37-4	壺			364	ハケ	不明	1~2'、多		良	黄灰
7	37-7	壺	45			タタキ→ハケ	不明	1~3'、多	多	良	淡茶褐色
8	37-8	壺	32			ヘラケズリ	不明	1~2'、多	~3'、少	良	淡茶褐色
9	37-11	壺	65	74	74	ナデ	ナデ	精良	~2'、少	良	淡茶褐色
10	37-9	脚付鉢	255	126	220	ハケ	ハケ、脚はナデ	1~2'、少	多	良	淡茶褐色
11	36-9	半腹ね	79			ナデ	ハケ、ナデ	精良	~2'、少	良	淡茶褐色
12	37-10	壺	106			ナデ	ナデ	1~2'、少	~2'、少	良好	淡黄灰

第3表 C群遺物観察表

が床面から0.04m、把部が0.10m浮き、把頭と右側壁が接していた。現存長680mm、刀身長536mm、最大幅33mm、最大厚9mmを測る。部分的に木製鞘の一部、闇から把にかけて宛角、さらに把には木質と糸巻きの一部が遺存している。

鉄鎌2本は同形式であり、矢柄の痕跡は無い。7は全長165mm、鎌身長43mm、最大幅35mm、8は、それぞれ157、41、36mmを測る。

#### ST-07 (第31図、図版18)

ST-01と0.50m離れて位置する。主軸方位は、N126°Wである。

狭道板右閉塞、平入り略長方形プランである。堅坑は長方形で、長さ1.41m、幅1.12m、深さ1.57mである。底面は不整形で、狭道部側のほうが深掘されている。狭道は長さ0.35~0.41m、幅0.39~0.57m、高さ0.84m、堅坑底面との比高0.16mを測る。玄室は、長さ1.97m、幅1.12~1.24m、高さ0.84mを測る。左袖から側壁にかけてのみ、直線的に掘削されている。壁面には、刀幅80mm内外の工具痕が明顯に残っている。天井は平垣で、狭道との境が無い。

被葬者は1体で、頭骨の一部のみ遺存している。

狭道は、長さ0.25~0.74m、幅0.12~0.50m、厚さ0.06m内外の板石7枚で閉塞される。

#### 出土遺物 (第24図-9・10、図版40)

玄室の奥壁寄りに、鉄鎌2本が重なって副葬されていた。2本とも丰頭広根式で、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。9は現存長101mm、鎌身長20mm、最大幅30mmを測る。10はそれぞれ106、11、32mmを測る。

#### ST-08 (第32図、図版19)

ST-09と0.80m離れて位置し、堅坑の北辺上部に後世の溝による削平を受ける。主軸方位はN81°Wで、狭道閉塞、平入り梢円形プランである。

堅坑は、長さ1.12m、幅1.04m、深さ0.96m、底面は長さ0.74m、幅0.70mを測る。狭道は長さ0.22~0.28m、幅0.50~0.58m、高さ0.41m、堅坑底面との比高0.08mを測る。玄室は、長さ1.89m、幅1.21m、高さ0.61mを測り、プラン・天井とともに不整形である。

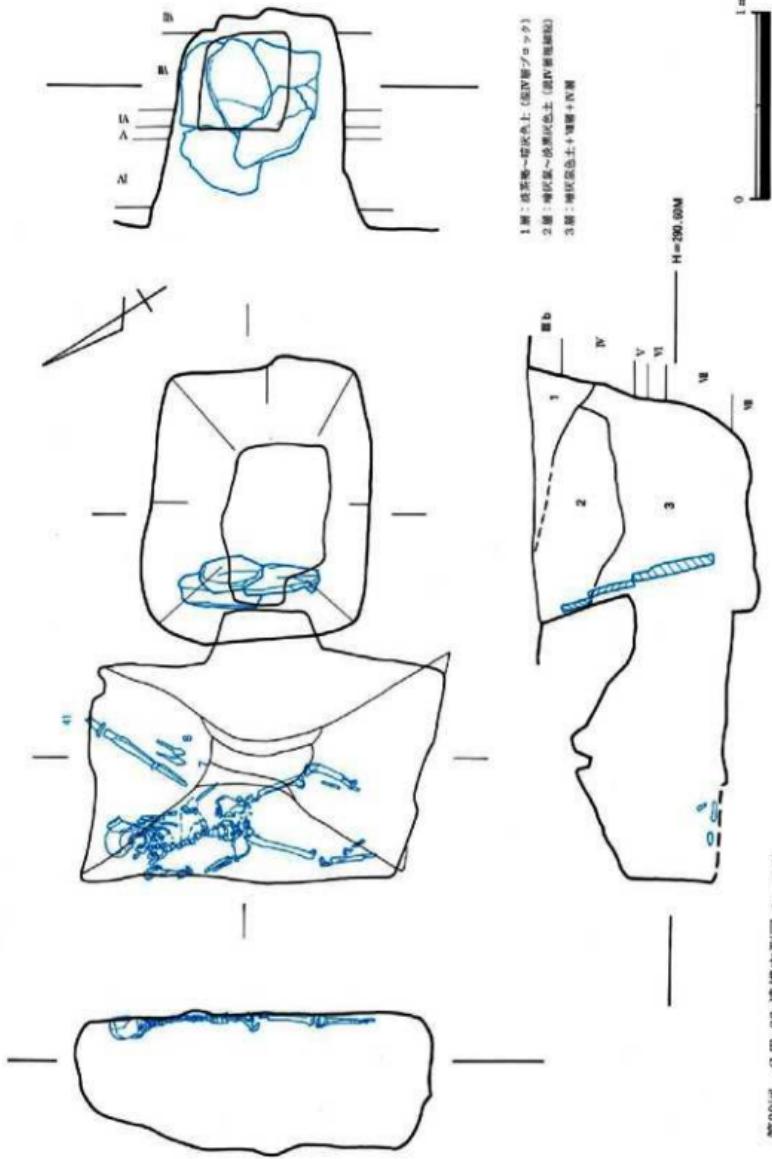
被葬者は2体で、1号人骨は流入土により押し寄せられ、持ち上げられている。2号人骨は、頭骨の一部のみ遺存する。

狭道には閉塞の痕跡が無かったが、堅坑埋土の第1層がレンズ状を呈すること、軟らかい黒土が玄室に流入して狭道が完全に塞がれていることから、有機質（木板）で閉塞されていたものと思われる。

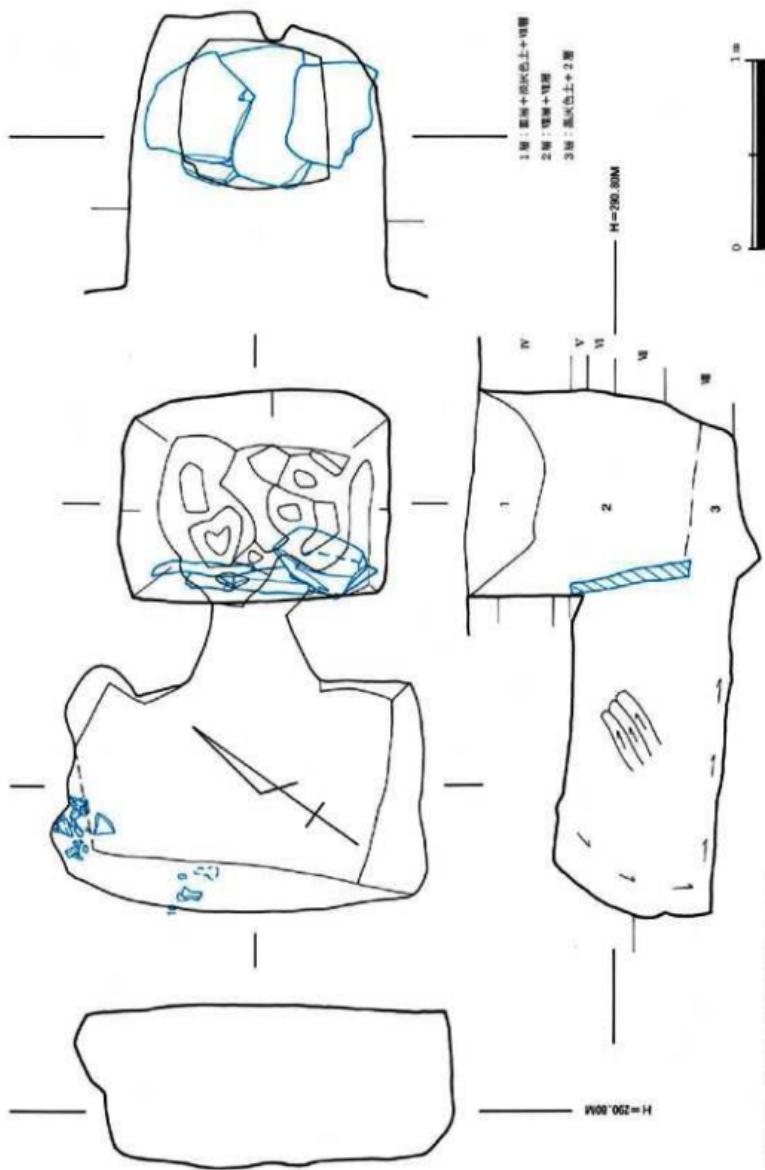
#### 出土遺物 (第33図-11~13、図版40)

玄室の奥壁寄りに鉄鎌1本、2号人骨付近に鉄鎌2本が副葬されていた。11は、現存長99mm、鎌身長15mm、最大幅30mmを測る。12は、現存長198mm、鎌身長29mm、最大幅34mmを測り、矢柄の表面には、鰐の歯の抜け殻が密集、鏽化している。13は、現存長137mm、鎌身長59mm、最大幅23mmを測る二段逆刺式である。3点とも樹皮巻き矢柄が遺存する。

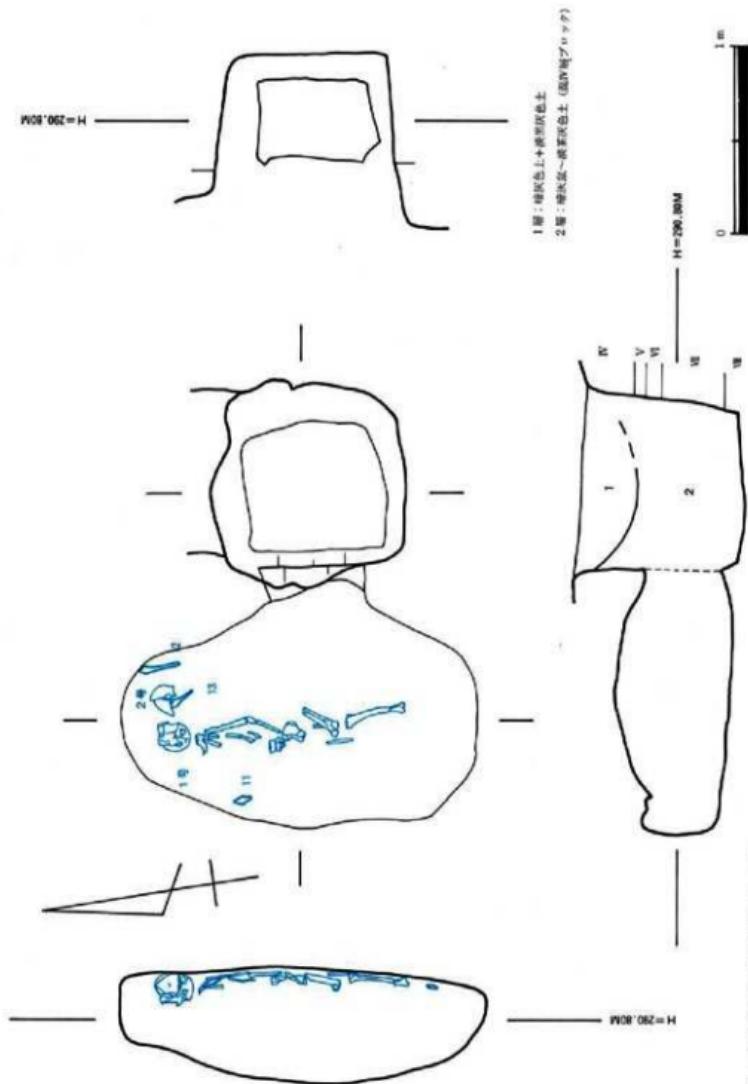
第30図 ST-06 遺構実測図 (1 : 30)

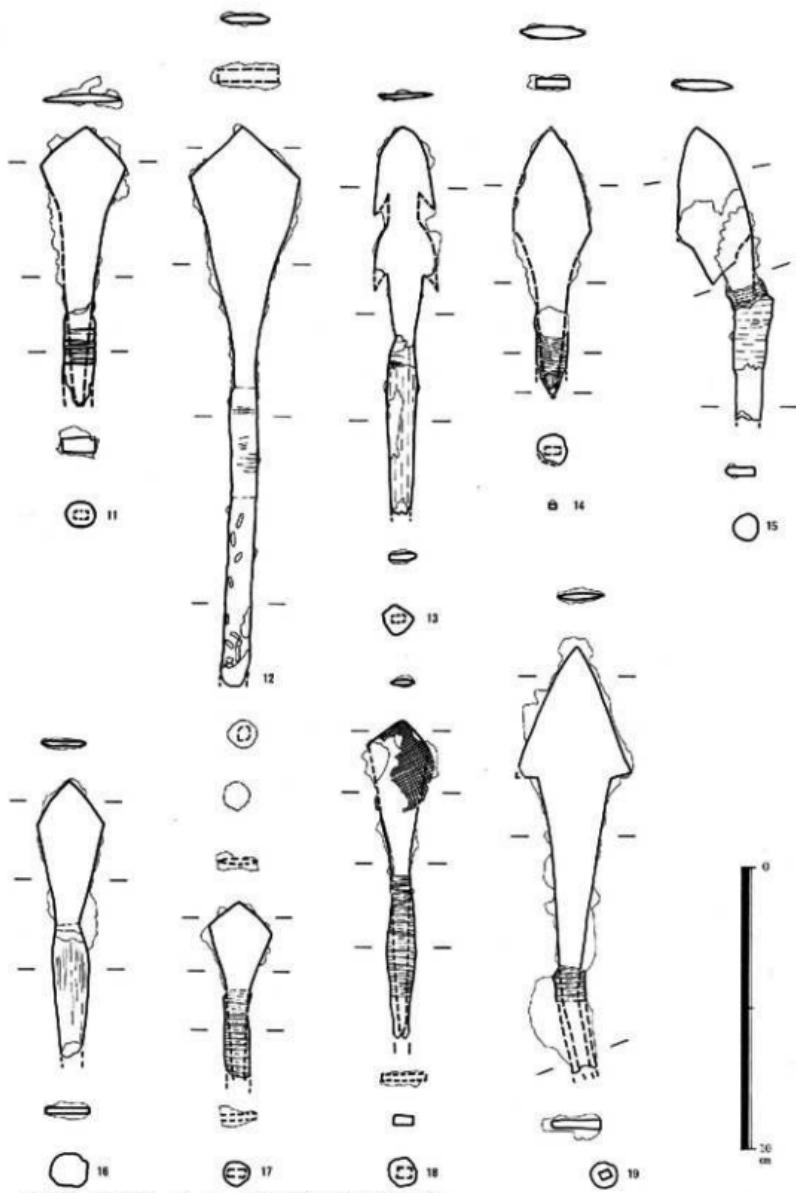


第31圖 ST-07 造模実測図 (1 : 30)



第32図 ST-08 遺構実測図 (1 : 30)





第33図 ST-08、10、11、14出土鐵鎌 実測図 (1 : 2)

### S T-09 (第34図、図版20)

主軸方位はN87°Wで、羨道閉塞、平入り梢円形プランである。

堅坑は、長さ1.35m、幅1.16m、深さ0.90mで、底面は長さ0.90~1.0m、幅0.64~0.80mを測る。羨道は長さ0.30m、幅0.43~0.48m、高さ0.55~0.69mを測る。玄室は、長さ1.71m、幅1.05m、高さ0.69mを測り、左側辺と奥壁は直線的である。全体的に不整形で、荒削りな構築である。

被葬者は1体で、遺存状態も悪い。人骨は流入土（第1層と同質）によって、0.10m前後持ち上げられている。

羨道はS T-08と同様、木板で閉塞されていたものと思われる。

山上遺物は無い。

### S T-10 (第35図、図版21)

S I-02と1.4m、S I-05と1.6m離れて位置する。主軸方位はN179°Eを示す。羨道閉塞平入り長方形プランである。

堅坑は、長さ1.20~1.61m、幅1.21m、深さ1.05mを測り、底面中央部が若干凹む。底面のレベルは羨道に向かって下降する。羨道は、長さ0.21~0.30m、幅0.65~0.70m、高さ0.52mを測る。玄室は1段(0.14m)低くなり、長さ1.55m、幅0.80~0.91m、高さ0.72mを測る。壁面と床面は丁寧に整形され、両側壁は直立する。

被葬者は男性1体で、頭骨等一部が遺存している。

羨道は、長さ0.26~0.46m、幅0.12~0.32m、厚さ0.06m内外の板石6枚で閉塞される。

### 出土遺物 (第33図-14~16、図版41)

人骨に接して、鉄鎌3本が副葬されていた。14は現存長96mm、鎌身長37mm、最大幅27mmを測る。15はそれぞれ107、39、27mm、16はそれぞれ99、15、23mmを測る。3本とも、樹皮巻き矢柄の一部が遺存している。

### S T-11 (第36図、図版22)

S Z-01の北西に位置する。主軸方位はN73°Eである。羨道板石閉塞、平入り梢円形プランを呈し、羨道閉塞地下式横穴墓中、最大規模のものである。

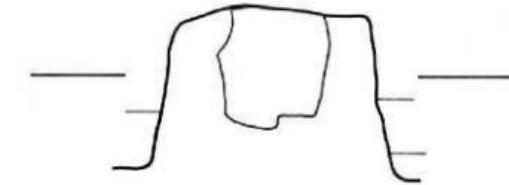
堅坑は、長さ1.63m、幅1.56m、深さ1.52mを測る。底面は長さ0.64~0.98m、幅0.81mの台形を呈する。羨道は、長さ0.20m、幅0.65~0.76m、高さ0.60mを測る。玄室は、長さ1.97m、幅1.40m、高さ0.88mを測り、アーチ型の天井を有する。

被葬者は3体で、頭骨および下肢骨の遺存状態が良く、1号人骨の頭骨には赤色顔料が塗布されている。右側壁の中央部には、シラスの土塊が置かれている。

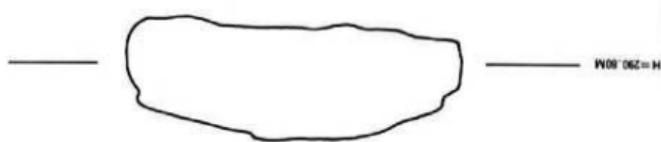
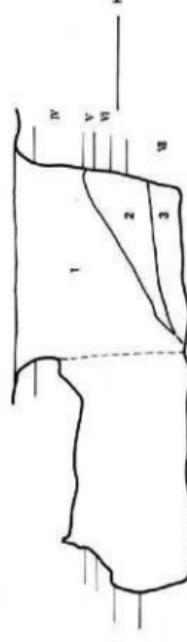
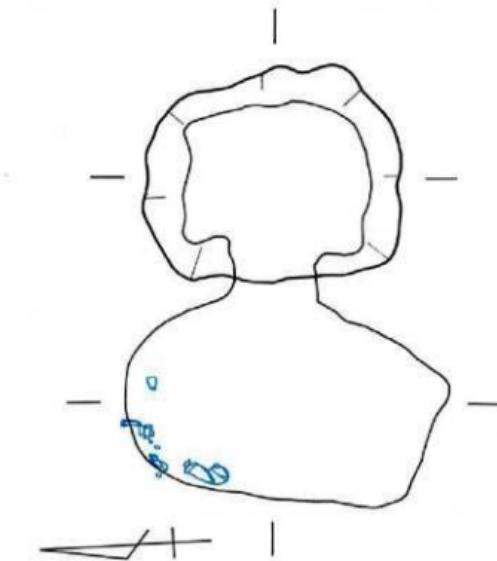
羨道は、長さ0.34~0.52m、幅0.18~0.38m、厚さ0.05m内外の板石11枚で閉塞される。

### 出土遺物 (第33図-17・18、第52図-44、図版41・42)

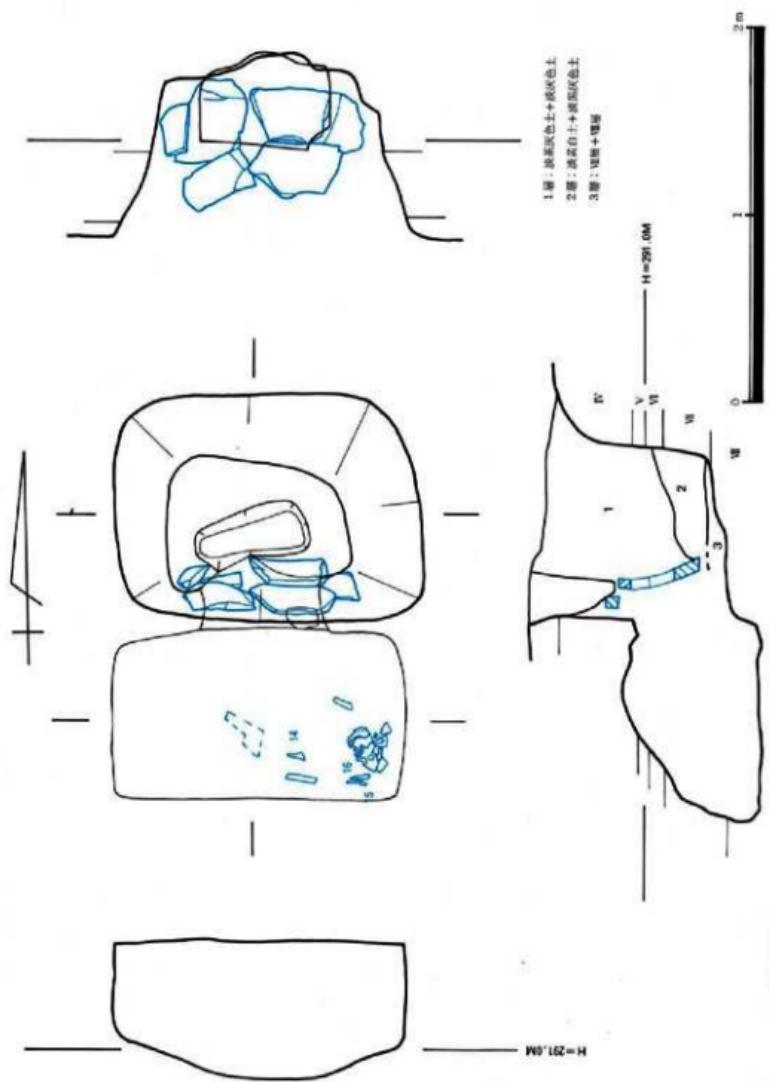
1号人骨の横に、短剣1振と鉄鎌2本が副葬されている。44は現存長262mm、剣身長180mm、



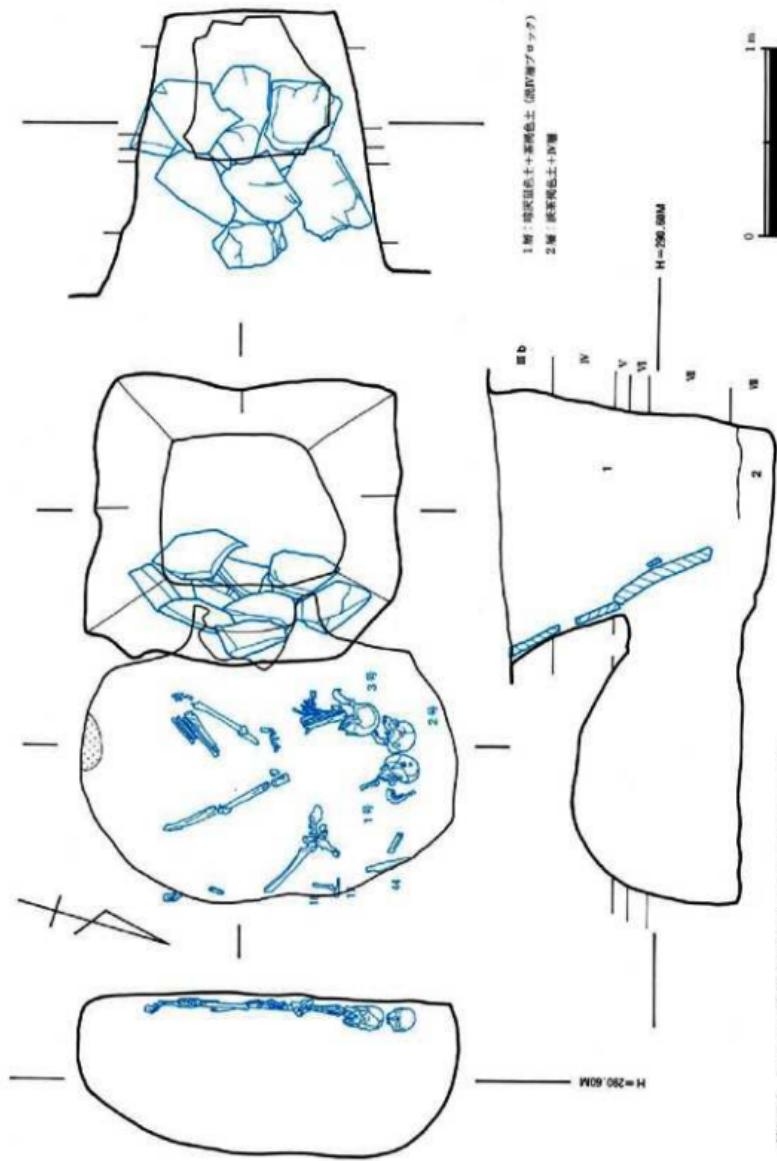
1带：黒灰～黒褐色土（ルビンブロック）  
2带：赤褐色土（IV～VI带）  
3带：黄赤褐色土（ルビン層底材）



第34図 ST-09 造構実測図 (1:30)



第35图 ST-10 遗址实测图 (1:30)



第36図 ST-11 造構実測図 (1:30) アミ目はシラス塊

幅26mmを測る。把部には、把木が遺存している。鉄鎌は直頭式で、樹皮巻き欠柄の一部が遺存する。17は現存長62mm、鎌身長10mm、最大幅22mmを測る。18は、それぞれ113、10、22mmを測り、鎌身から頭部にかけて布が付着している。

#### S T-12 (第37図、図版23)

S I-05と1.1m、S T-02と2.1m離れて位置する。主軸方位は、N142°Wを示す。

羨道板石閉塞、平入り楕円形プランである。竪坑は、長さ1.12m、幅1.00mの楕円形を呈し深さ1.18mを測る。玄室との間には、上面の長さ0.10~0.14m、幅0.68~0.78mの断面台形の仕切りが設けられており、竪坑底面との比高0.17m、玄室床面との比高0.13mを測る。玄室は、長さ1.58m、幅1.00m、高さ0.60mを測る。

被葬者は男性1体で、頭骨、寛骨および下肢骨が遺存する。

羨道は、長さ0.18~0.58m、幅0.14~0.33m、厚さ0.03m内外の板石6枚で閉塞される。

出土遺物はない。

#### S T-13 (第38・39図、写真1、図版24・25)

S Z-01の南東部に位置し、遺構検出時においては竪坑の北半部が調査区にかかった。このため、当墳墓を構築する際の排土処理の様子を伺うことができる。竪坑掘削の初期の排土であるIII・IV層は、玄室奥壁を想定してその外側に置かれる(C層に相当)。V層以下底面までと羨道および玄室の掘削土は、竪坑の周囲に置かれる。被葬者を埋葬し、羨道を閉塞した後に玄室上位の排土を主として埋め戻す。この際、下部のIII b層も0.10m内外の削平を受けている。最後に、地表に残った排土(A1、A2a~r、B層)を押し広げて整地していることが伺われる。平面的には、長さ9.16m、幅1.5~2.5m(推定)の長方形~長楕円形を呈し、厚さ0.15~0.26mを測る。なお、B・C層には、S Z-01の構築材と思われる板石や土器片を含んでいる。

当墳墓の主軸方位は、N67°Eを示す。羨道板石閉塞、平入り楕円形プランである。竪坑は長さ1.20m、幅1.14m、深さ1.24mを測る。底面は長さ0.68~0.87m、幅0.74mの台形を呈し中央部と西隅に、径と深さが0.10m内外の小柱穴を有する。羨道には仕切りが設けられ、上面の長さ0.22m、幅0.59m、竪坑底面との比高0.20m、玄室との比高0.10mを測る。玄室は、長さ1.86m、幅1.16m、高さ0.73mを測る。羨道部には、シラスの土塊が置かれていた。

被葬者は男女各1体で、1号人骨のほうが遺存状態が悪い。

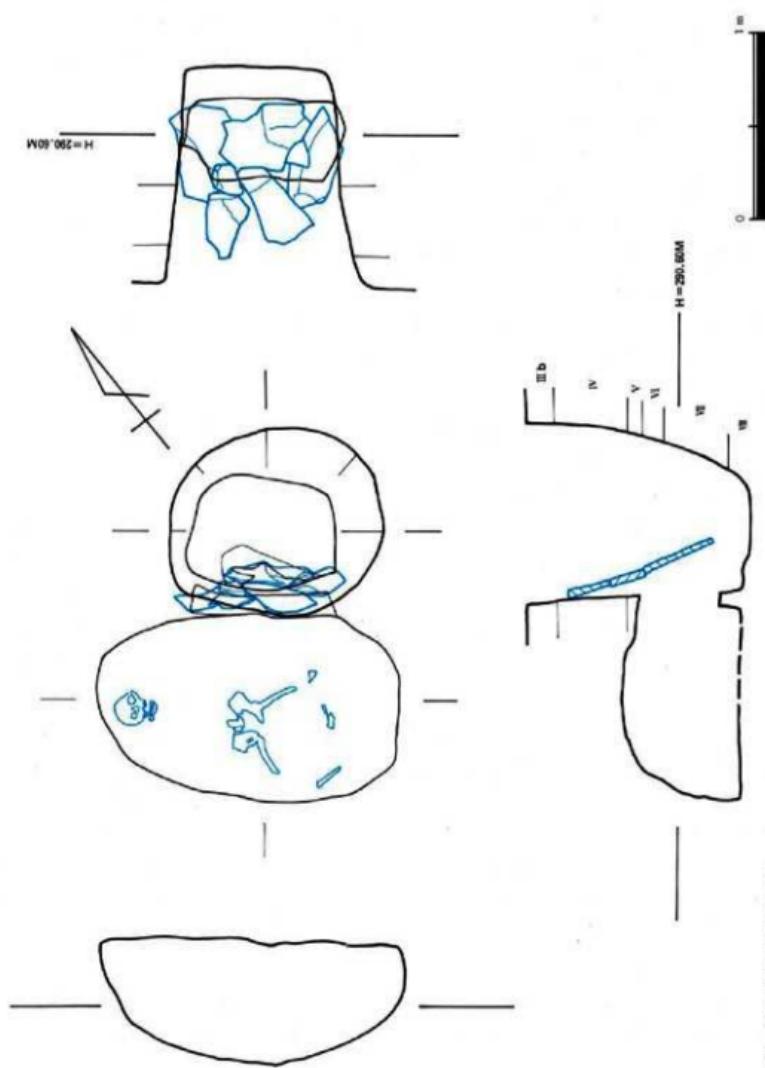
羨道は、長さ0.28~0.71m、幅0.22~0.32m、厚さ0.03~0.10mの板石10枚で閉塞される。

#### 出土遺物 (第52図-46、図版42)

2号人骨の頭骨の西側に、鋒を左側壁に向けた短剣1振が副葬されている。現存長355mm、剣身長252mm、幅29mmを測る。鏑は明瞭でない。把部には目釘孔が1孔確認できる。また、把木が遺存している。

#### S T-14 (第40図、図版26)

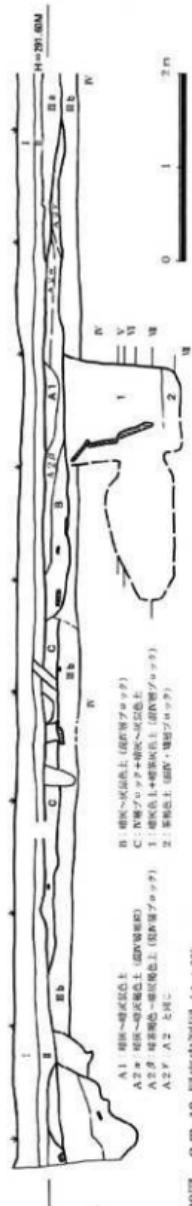
遺構検出時には、すでに玄室の天井が崩落して黒色土が堆積し、閉塞石も移動していた。



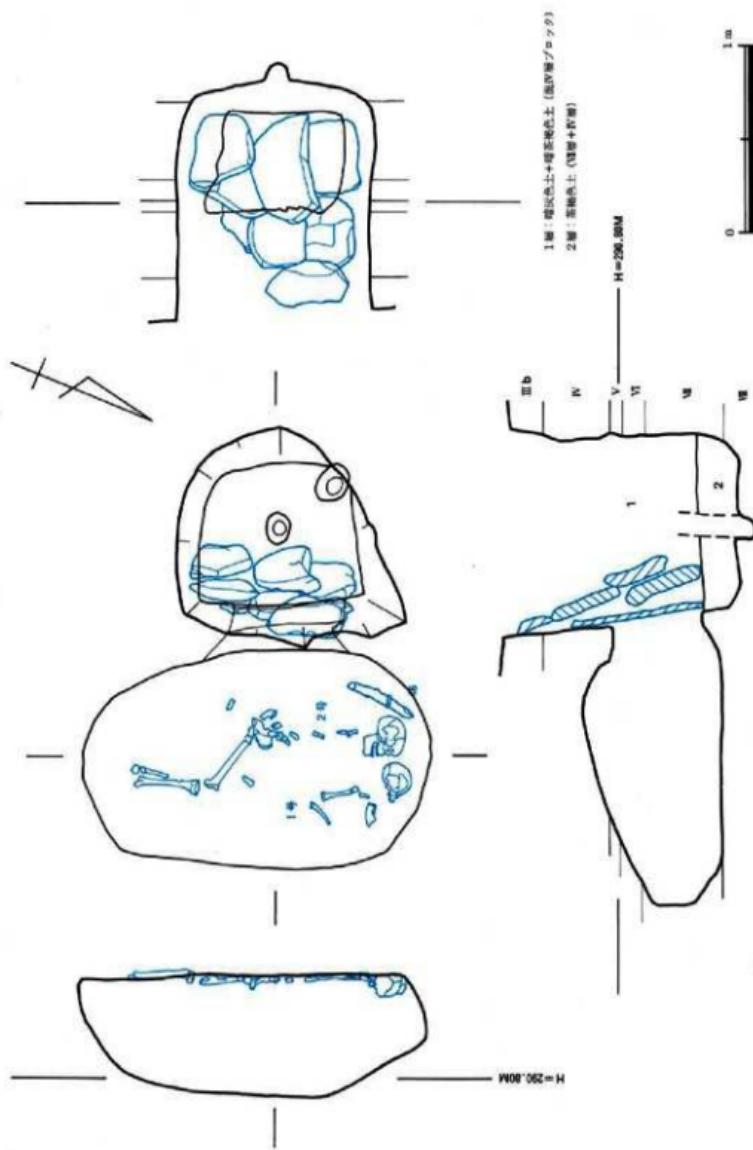
第37图 ST-12 遗体实测图 (1 : 30)



写真1 ST-13 層序

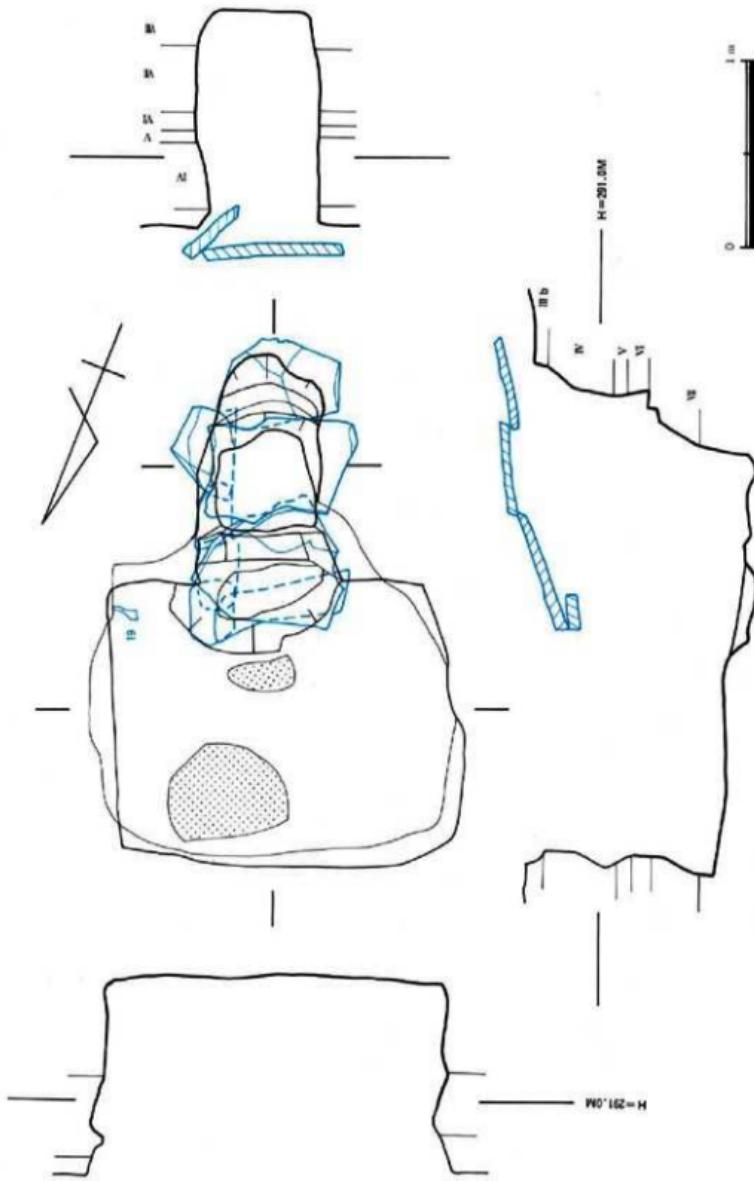


第38図 ST-13 層序実測図 (1 : 60)



第39図 S T-13 遺構実測図 (1:30)

第40図 ST-14 透構実測図 (1 : 30) ア:白赤色断面



主軸方位は、N $21^{\circ}$ Wを示す。豊坑上部開塞、平入り長方形プランである。

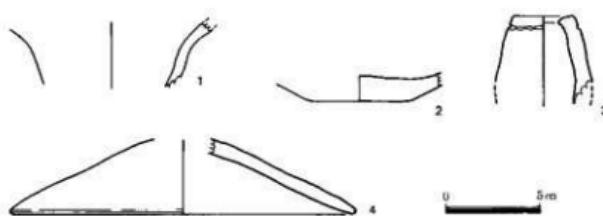
豊坑は不定形で、長さは不明、幅0.66m、深さ1.17mを測る。羨道には断面台形の低い仕切りが設けられるが、玄室床面のレベルが高くなつたために平坦に埋め戻されている。羨道の全長は0.24m、幅0.67~0.75mを測る。玄室は、長さ1.67~1.80m、幅1.41~1.51mを測り、高さは不明である。両側壁はほぼ直立する。床面には、2ヶ所に赤色顔料の塗布が認められた。

人骨は遺存していない。

羨道は、長さ0.34~0.80m、幅0.17~0.73m、厚さ0.04m内外の板石8枚で閉塞される。



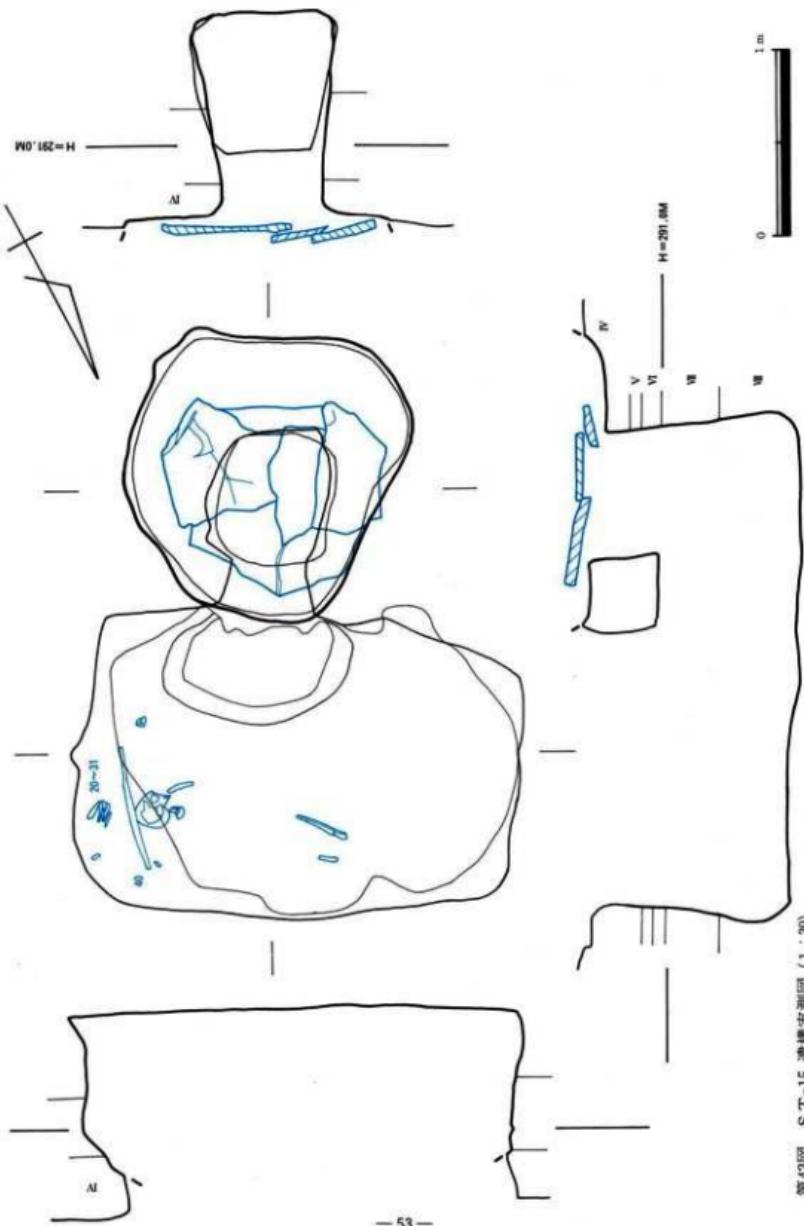
第41図 E群遺物出土状況実測図 (1:10)



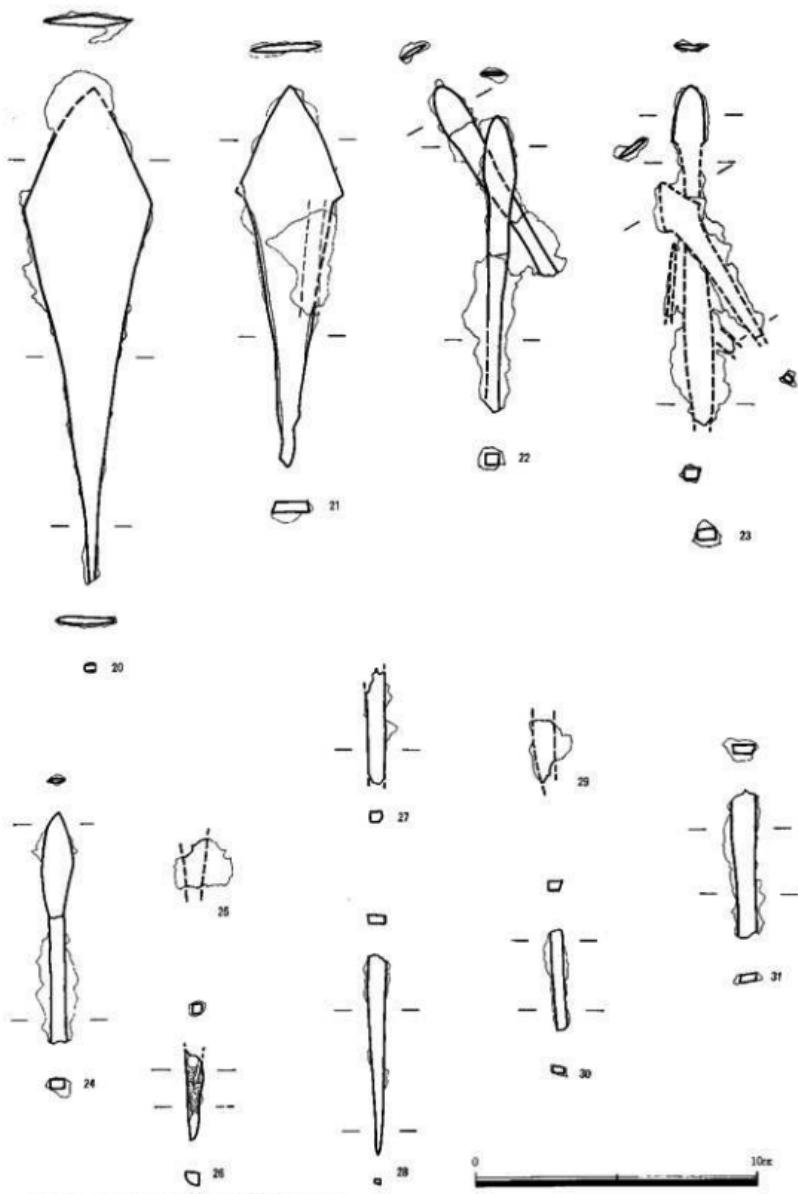
第42図 E群遺物実測図 (1:3)

編 号	回数	器形	法 量(mm)		文様および調査		胎 土		焼成	色 調	
			外 径	底 径	外 面	内 面	砂輪・墨	水滴包粒		外 面	内 面
1		板			不明	不明	精良		55~65 ふくい 灰		
2		盤		33	ナデ	ナデ	1'~, 数	1~2'~, 多	55~65 精良 淡黄褐		
3	38-2	不明			ナデ	ナデ	精良		55~65 淡褐青		
4	38-1	板以		154	不明	不明	1'~, 少		55~65 あまい 淡褐色		

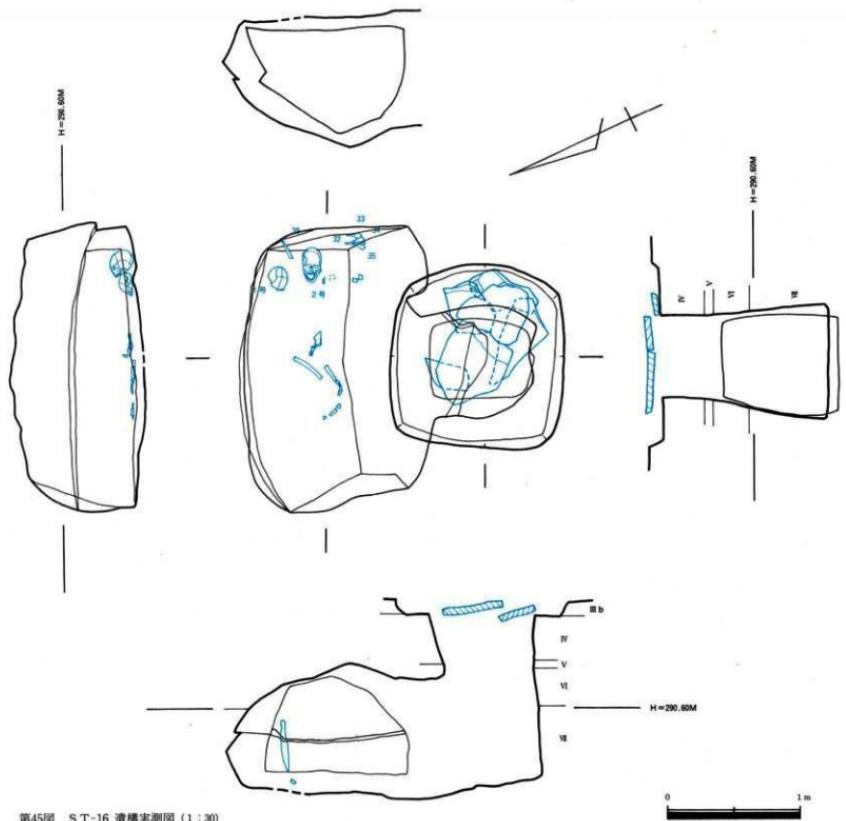
第4表 E群遺物観察表



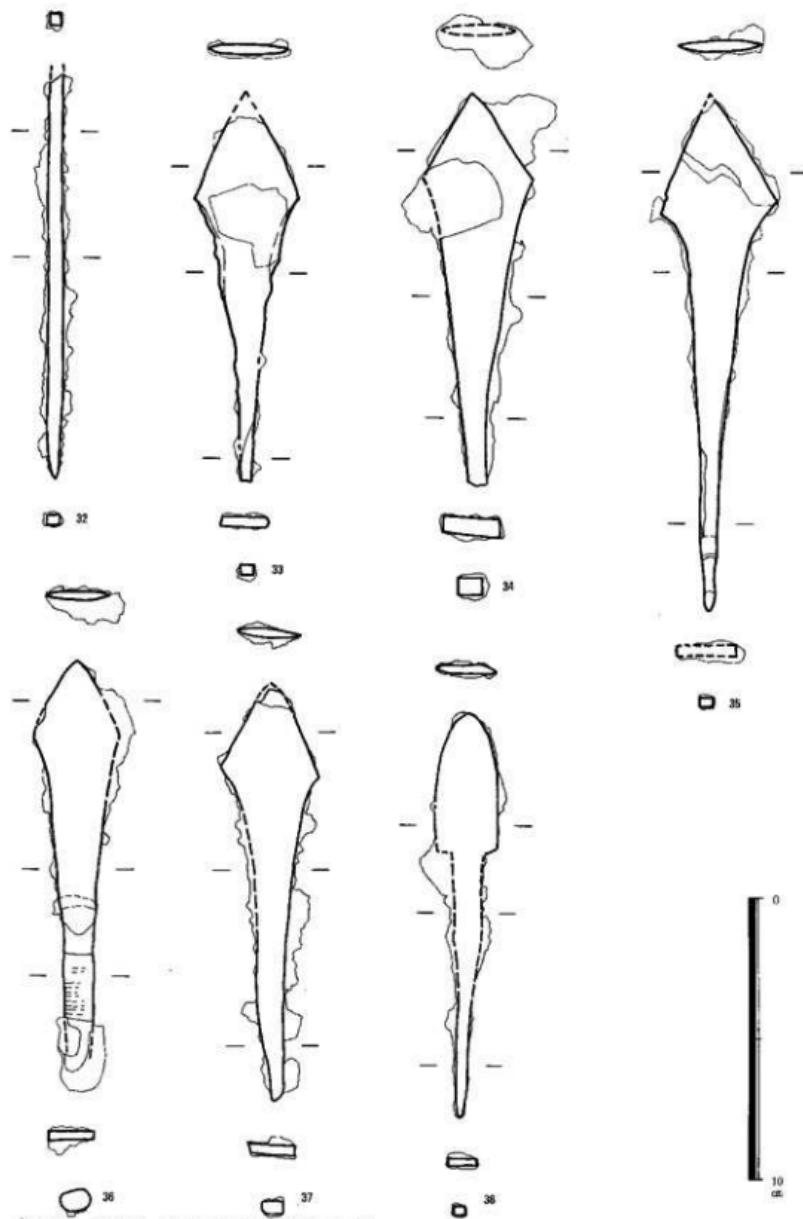
第43圖 ST-15 遺構實測圖 (1:20)



第44図 ST-15出土鐵器 実測図 (1 : 2)



第45図 S-T-16 遺構実測図 (1:30)



第46図 ST-16, 17出土鐵器 実測図 (1 : 2)

#### 出土遺物（第33図-19、図版41）

玄室の右袖部に鉄鎌1本が副葬されていた。大形の三角形式で、現存長152mm、鎌身長47mm、最大幅42mmを測る。頭部は腐蝕で丸がっているが、横皮巻き欠柄が遺存している。

#### E群土器（第41・42図、第4表、図版38）

S T-14から南東へ2.2~3.0mの小範囲に、十器群が検出された。すべて土師器で、壺2、長頸壺1、甕1、高壺1、用途不明土製品1で構成される。碎片ばかりで、器形を復元できるものは無い。3の口縁部には、箋状工具で1条の沈線が施されている。

#### S T-15（第43図、図版27）

調査前（平成2年3月）に耕作機械の重圧で玄室の天井が崩落し、地権者によってその存在が知らされていた墳墓である。

S T-14と8.0m離れて位置する。主軸方位は、N28°Eを示す。

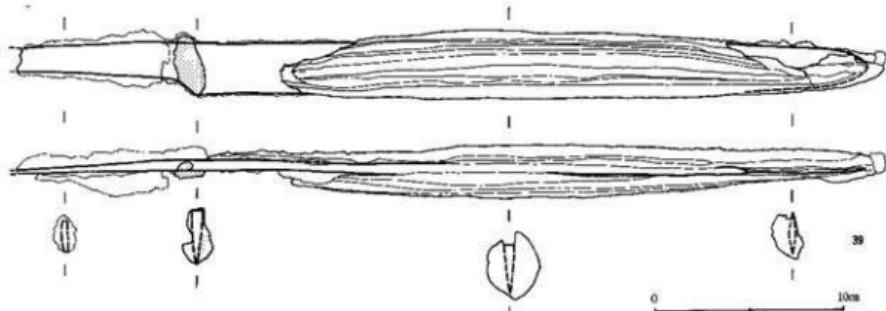
堅坑上部閉塞、平入り長方形プランを呈する。堅坑の1段目は不定形で、長さ1.51m、幅1.42m、深さ0.07mを測る。2段目は長さ0.70m、幅0.60m、深さ1.10mを測る。羨道は、長さ0.28m、幅0.38~0.49m、高さ0.73mを測る。玄室へ少し入った所までは同一レベルで掘り進められるが、玄室床面の大部分は若干高くなっている。玄室は、長さ2.25~2.38m、幅1.20~1.63mを測り、左側壁が短い。壁面には、刀幅40~50mmの横位の掘削痕が明瞭に残っている。堅坑の2段目と玄室の壁面中位（VII層に相当する部分）には、赤色顔料が塗布されている。

被葬者は男性1本で、頭骨のみ遺存状態が良い。

堅坑上部は、長さ0.62~0.90m、幅0.13~0.70m、厚さ0.04m内外の板石5枚で閉塞される。

#### 出土遺物（第44図、第51図-40、図版41・42）

頸骨に接して鉄剣1振、その奥に鉄鎌7~8本が副葬されていた。40は、現存長790mm、剣身長645mm、最大幅37mm、最大厚9mmを測る。鎌は不明瞭で、やや丸みを持つ。剣身には木鞘の一部が、把には把木の一部が遺存する。日釘穴は、鋳化のために見い出せない。鉄鎌は、主



第47図 S T-16 出土 小刀実測図 (1:3)

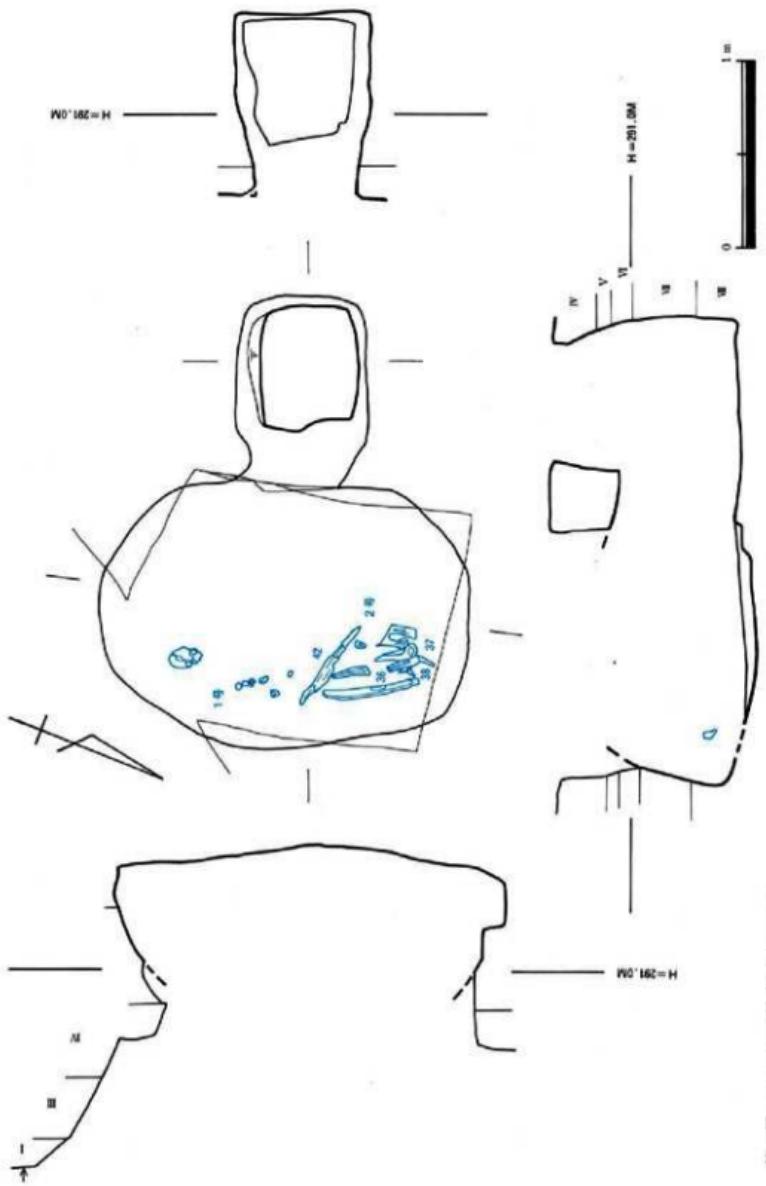


圖48 圖 ST-17 遺構実測図 (1 : 30)

頸・三角形・長頸鎌からなる。20は現存長176mm、鎌身長46mm、最大幅45mmを測る。21は、それぞれ136、39、38mmを測る。22~31で5~6本分であり、長さ70~150mm前後、最大幅11~16mmを測る。樹皮巻き矢柄は、23に遺存する。

#### ST-16 (第45図、図版28)

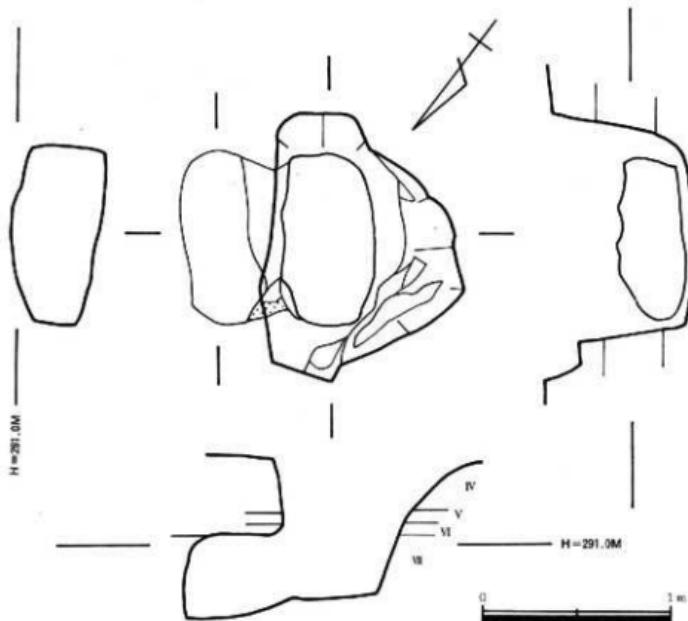
地下式横穴墓分布域の北端に位置し、整坑上部閉塞のものとしては唯一、原形を保っていたものの閉塞石は若干移動し、竖坑内に1枚落ち込んでいた。

主軸方位は、N25°Eを示す。平入り長方形（やや胴張り）プランを呈する。

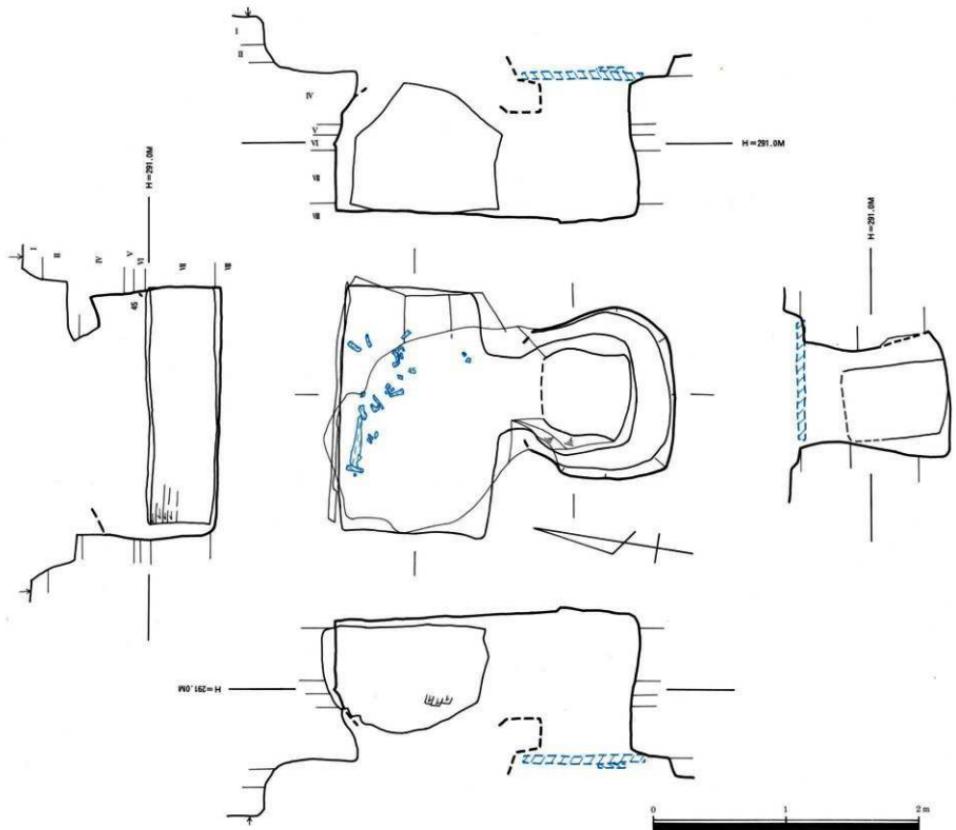
竖坑1段目は、長さ1.38m、幅1.31mのほぼ方形を呈し、深さは0.11mである。2段目は、長さ0.80m、幅0.62m、深さ1.34mを測る。羨道部は明瞭でないが、底面は若干凹み、高さは0.89mを測る。玄室は、長さ2.00~2.16m、幅1.07~1.42m、高さ0.97mを測る。両側壁はほぼ直立し、奥壁と右側壁には幅0.06~0.08mの庇を有する。天井は切妻の屋根形を呈するが、丁寧な造りではない。右の袖部はいびつて、突出している。

被葬者は男性2体で、1号人骨のほうが遺存状態が悪い。

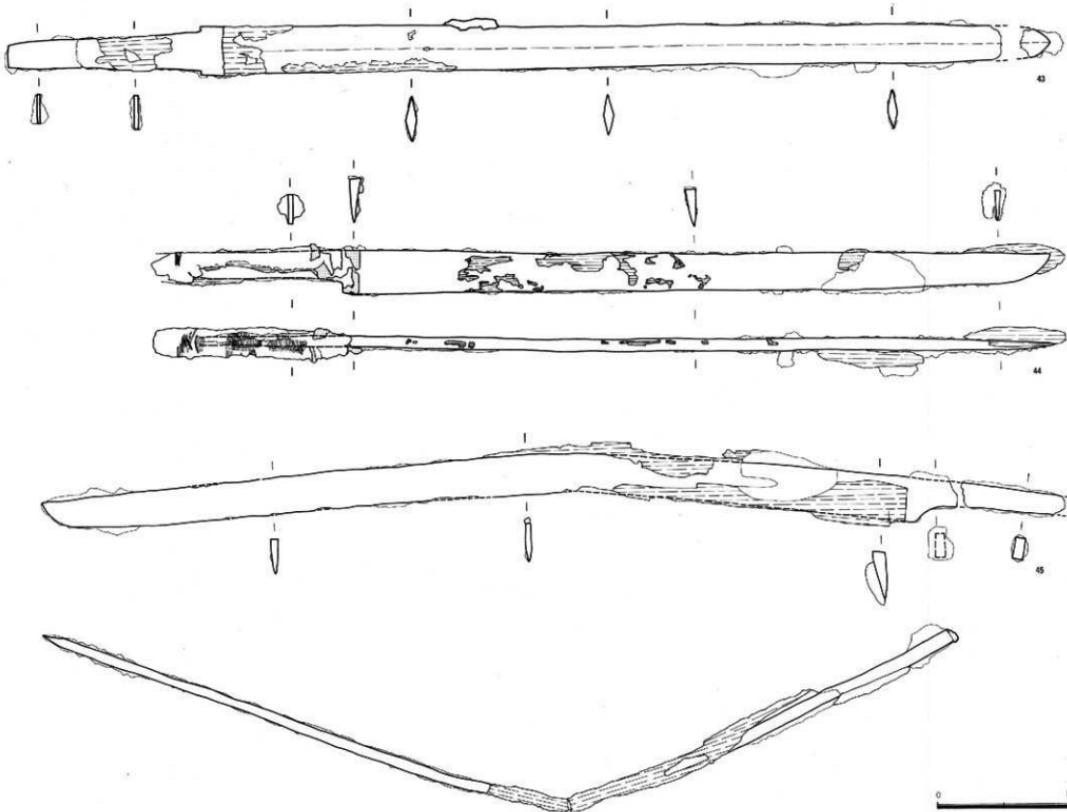
竖坑上部は、長さ0.30~0.70m、幅0.18~0.50mの板石7枚で閉塞される。



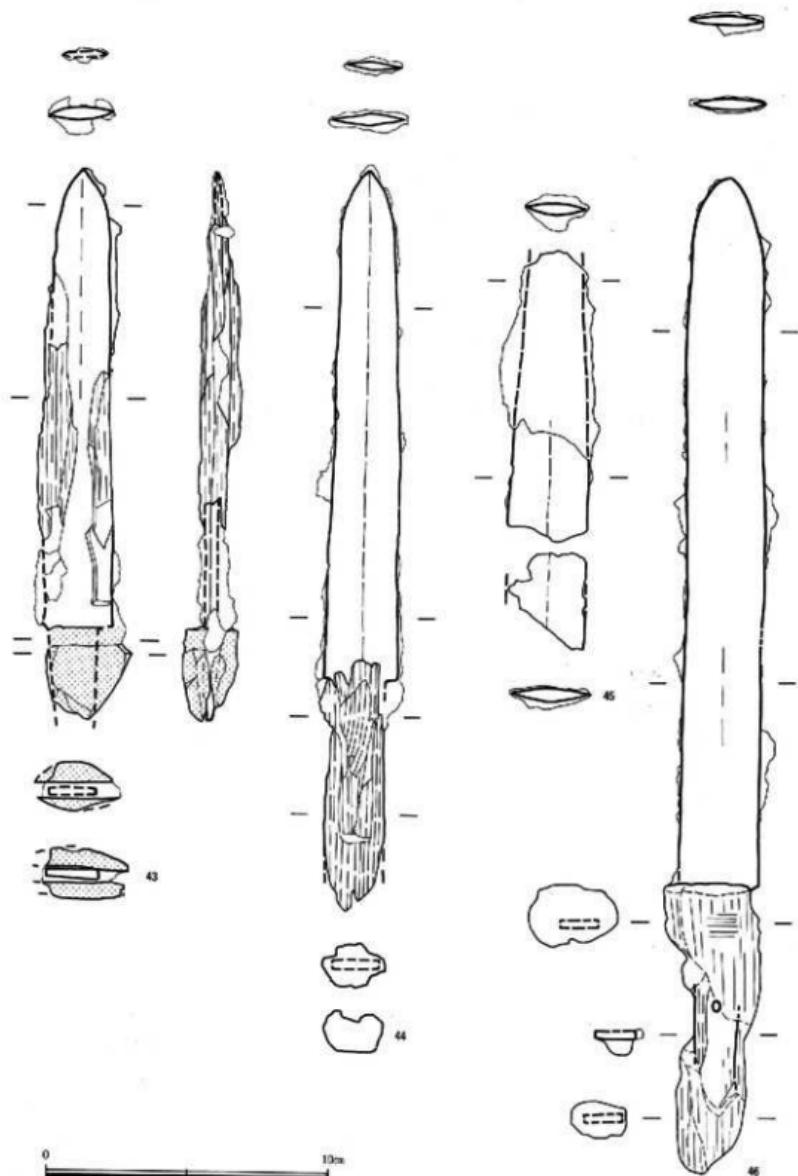
第49図 ST-16 遺構実測図 (1:30) アミ目はシラス焼



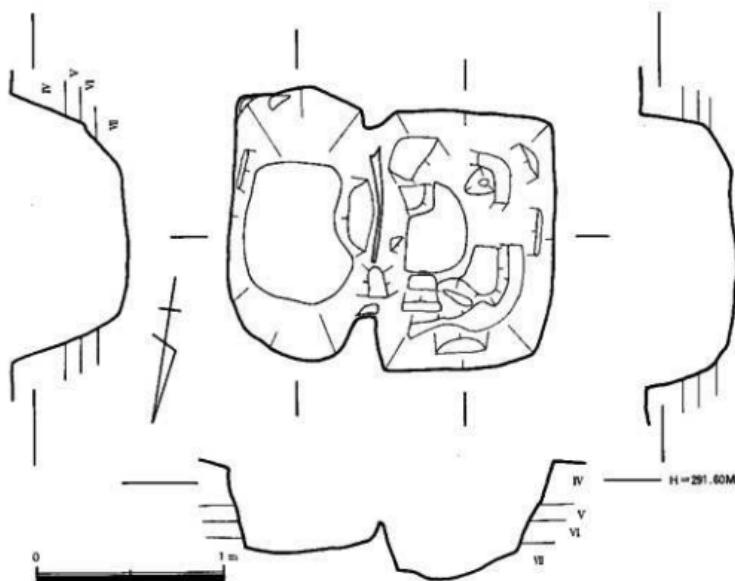
第50図 ST-19 造構実測図 (1:30) (閉塞石は図上復元)



第51図 ST-06, 15, 17出土刀剣実測図 (1 : 3) アミ口は鉤角



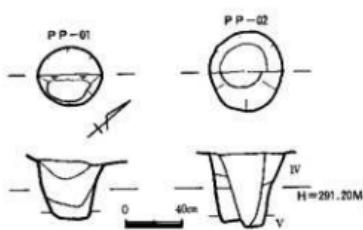
第52図 S T-03, 11, 13, 19出土短剣 実測図 (1:2) アミ目は施角



第53図 SK-01 遺構実測図 (1:30)

出土遺物 (第46図-32~35、第47図-39、図版41・42)

2体の頭骨の間に、既に立て掛けた小刀1振と、2号人骨の横に側壁と並行して鉄鎌4本が副葬されている。39は、現存長460mm、刃身長358mm、最大幅27mmを測る。鋒67mmは、左右対象の両刃造である。刀身には木製鞘が遺存、錆着しているために、鎌の形状は不明である。鞘口には鹿角が、把には把柄の一部が遺存する。32は鎌身部を欠き、現存長143mmを測る。33~35は主頭鎌で、矢柄を着装した痕跡は無い。33は現存長130mm、鎌身長29mm、最大幅37mmを測る。34は、それぞれ140、30、39mm、35はそれぞれ180、40、41mmを測る。



第54図 PP-01, 02 遺構実測図 (1:30)

ST-17 (第48図、図版29)

調査区の東端、ST-16と約10m離れて位置する。遺構検出時には、すでに天井が崩落して黒色土が埋積していた。

また、堅坑上部の閉塞石も全て消失していた。

主軸方位は、N72°Eを示す。プランは、平入り楕円形を呈する。

堅坑の1段目は削失する。2段目は、長さ0.68m、幅0.53m、深さ0.99mを測る。羨道は、長さ0.24m、幅0.54~0.62m、高さ0.64mを測る。玄室は長さ1.98m、幅1.42mを測る。床面中央部は若干凹み、貼り床が施される。壁面全体には、赤色顔料が塗布されている。

被葬者は2体であるが、遺存状態が悪い。

#### 出土遺物（第46図-36~38、第51図-41、図版41・42）

人骨の中央部に大刀1振、下肢骨下部に鉄鎌3本を検出した。大刀（41）は、2号人骨の下肢部に、鋒から0.26mの部分まで床面下に突き刺した状態で、天井部崩落の影響で中途から折れ曲っている。把部は一部欠損する。現存長805mm、刀身長694mm、最大幅34mmを測る。36は、現存長152mm、鎌身長26mm、最大幅30mmを測る。樹皮巻き柄の一部が遺存する。37はそれぞれ146、31、34mmを測る。38はそれぞれ144、49、22mmを測り、範板を有する。

#### S T-18（第49図、図版31）

S T-17から北東へ約4m離れて位置する。主軸方位は、N52°Eを示す。

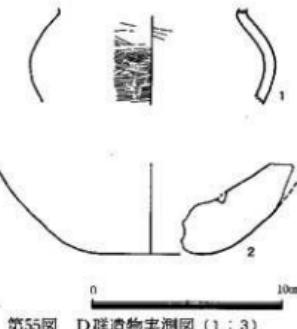
羨道閉塞、平入り楕円形プランを呈する。堅坑は、長さ1.42m、幅1.08m、深さ0.74mを測る。羨道は不明瞭である。玄室は長さ0.92m、幅0.49m、高さ0.45mで、床面は傾斜している。左袖部には、シラス塊が置かれていた。

当墳墓には黒色土が充填しており、人骨・副葬品および羨道閉塞材は認められないものの、玄室内の流入土は軟質であることから、S T-08や09と同様、板（有機質）閉塞であったと思われる。

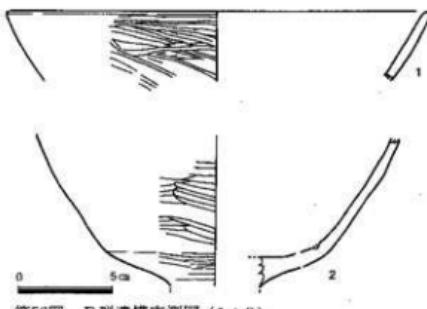
また、その規模から、小人用の墳墓であると思われる。

#### S T-19（第50図、図版30）

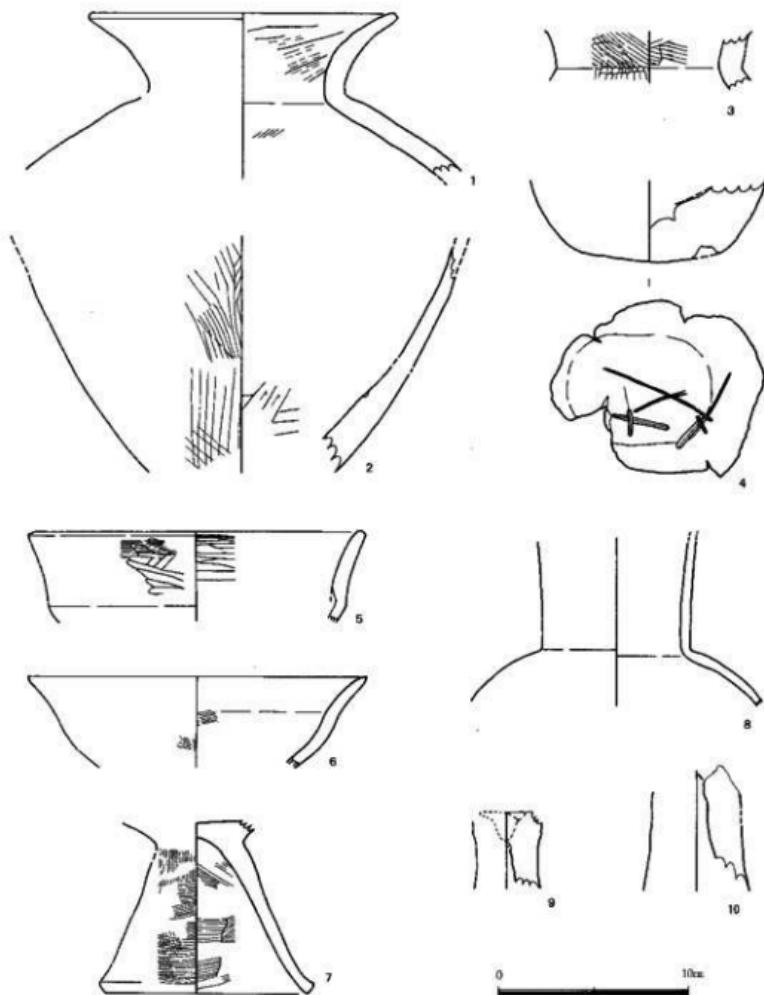
発掘調査終了直後、資材運搬車輌が玄室の天井を陥没させたため、急拠、調査を実施した。地権者の話によると、数年前にも陥没し、その際頭骨と傍らにあった刀を取り出して近くの寺に納骨したことであった。実際、埋土を除去すると頭骨以



第55図 D群遺物実測図（1:3）



第56図 F群遺構実測図（1:3）



第57図 IV区 出土遺物実測図 (1:3)

外の人骨が検出され、また、陥没口を塞いだと思われる直径約1m、厚さ0.2mのコンクリート塊を確認した。

当墳墓はS T-03から西へ10mの地点にあり、主軸方位はN 9°Wを示す。

堅坑1段目は、長さ1.28m、幅1.25m内外、深さ0.11m、2段目は長さ0.80m、幅0.70m内外、深さ1.12mを測る。次第は、長さ0.23~0.28m、幅0.52~0.60m、高さ0.78mを測り、堅坑底面とは僅かに段差がある。玄室は、長さ1.85m、幅0.96~1.22m、高さ0.9m内外を測る。両側壁は直立し、奥壁のみ幅0.04m内外の庇を有する。天井は切妻形であるが、雑な整形である。壁面には、刀幅50~70mmの工具痕が明瞭に残っている。

被葬者は1体で、遺存状態も良くない。

堅坑上部は、縦横0.9m内外と0.2m内外の板石で閉塞されていた。

#### 出土遺物 (第52図-45、図版42)

玄室奥壁の右隅に剣先が刺さっていた。これは人骨と混在していた小片と同一個体で、かつて取り出された「刀」

の一部と思われる。現

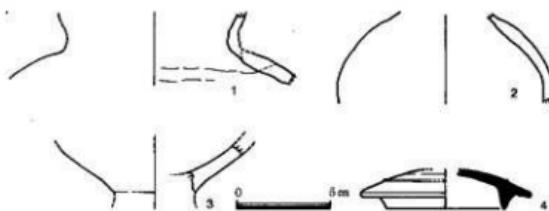
存長139mm、最大幅28

mmを測り、鏃が通る。

鋒は欠失し、壁面に刺

さっていた部分約70mm

は錆化が著しい。



第58図 V区出土遺物実測図 (1:3)

系	図版	出土地点	形	法量(mm)		文様および調査			土		焼成	色
				口径	底径	外 面	内 面	砂粒・量	赤褐色	外 面	内 面	
1	38-5	S T-02室上部	堅	162		ナデ	ハケ、ナデ	1~4'、多	1~4'、多	良	淡黄褐色	淡黄褐色
2	39-1	S T-03室-C層	堅			ナデ、マテケタリ	ハケ	1~2'、多	1~1'、多	良好	淡桃褐色	淡桃褐色
3		排土	堅			ハケ	ハケ	1~2'、多	1~5'、多	良好	淡桃褐色	淡桃褐色
4		排土	堅	58~76		ナデ	不明	1~2'、多	1~5'、多	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
5		排土	高环	177		ヘラミガキ	ヘラミガキ	標準	標準	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
6	39-6	排土	高环	178		ヨコナデ、下コハケ	ヨコナデ、下コハケ	標準	標準	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
7	39-3	S T-04室-B層	高环			ハケ	ハケ	1'、少	1'、少	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
8	37-12	III層(C層)	長頸壺			ナデ、重頭ハケ	ナデ	1~2'、少	少	良	淡黄褐色	淡黄褐色
9	39-5	排土	高环			ハケ	ハケ	1'、少	1'、少	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
10		排土	高环			不明	不明	1~2'、多	2~3'、多	良好	淡黄褐色	淡黄褐色

第5表 IV区出土遺物観察表

系	図版	出土地点	形	法量(mm)		文様および調査			土		焼成	色
				口径	底径	外 面	内 面	砂粒・量	赤褐色	外 面	内 面	
1	38-6	G群	堅			Hコナデ	Hコナデ、ナデ	1~2'、少	1~2'、少	良	淡黄褐色	淡黄褐色
2		G群付近	長頸壺			不明	ナデ	1~2'、少	1~3'、少	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
3		E群付近	高环			不明	不明	1'、少	1~3'、少	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
4	39-1	S T-17室崩落土内	蓋	61		ヘラケタリ	ナデ	1'、少	1'、少	堅	淡黄褐色	淡黄褐色

第6表 V区出土遺物観察表

### SK-01 (第53図、図版31)

S T-01の南に位置する土坑で、梢円形と長方形のものが接したプランを呈する。前者は、長さ1.46m、幅0.79m、深さ0.60mを測り、埋土は黒灰色土を主とする。後者は、長さ1.20～1.38m、幅0.81～0.93m、深さ0.63mを測り、埋土にはIV層の上塊を多く含み、地下式横穴墓の堅坑のように埋め戻されている。接触部には、長さ0.62m、幅0.02～0.05mの平坦面をもつ仕切り状のものがあり、狭道部に相当する。

以上を総合すると、小木原遺跡群・蕨A地区でみられた土壙墓に類似する遺構と思われる。出土遺物は無く、時期比定はできない。

### PP-01 (第54図、図版31)

S T-10の堅坑から北東へ0.2m離れて位置する。直径0.42～0.45m、深さ0.40mを測る。柱痕は無く、埋土はIV層の微細粒を含む淡黒灰色～暗灰褐色土である。

### PP-02 (第54図、図版31)

S T-02と07のはば中間に位置する。直径0.52～0.56m、深さ0.52mを測る。尖底の柱痕を有する。埋土は、IV層の粗細粒を含む暗灰褐色～淡黒灰色土である。裏込めの埋土は、IV～V層の粗細粒を含む暗灰褐色土である。

### 土器群D (第55図)

土器片数10片が散在する程度であり、壺と長頸壺、甕で構成される。1は長頸壺の肩～胴部で、最大径130mmを測る。外面はハケ調整、内面はナデ調整で頸部の一部にハケメが残る。胎土には1～2mmの砂粒を少量含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。2は甕の底部で、器面の摩滅が著しく、外面の一部にハケメが残る程度である。胎土には1～3mmの砂粒を多く含み、焼成はややあまい。

### 土器群F (第56図、図版38)

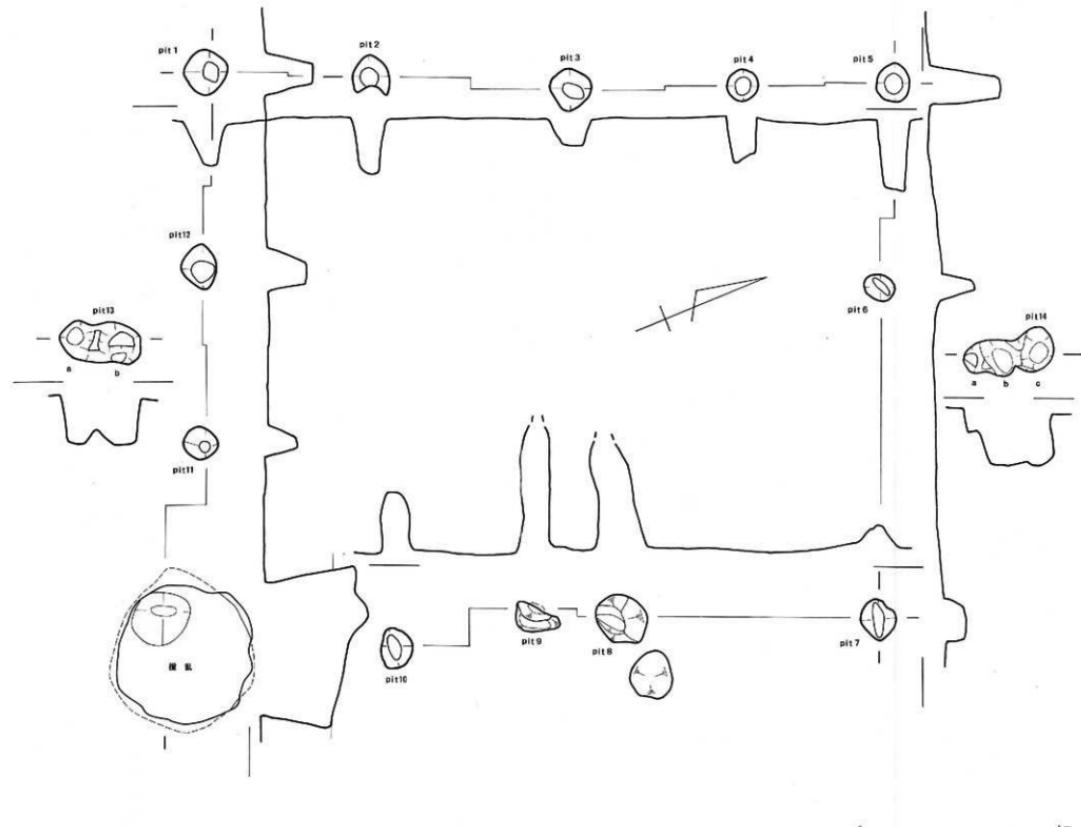
S T-14と15の間に數点づつ散在し、長頸壺と甕、高坏で構成される。1は高坏の口縁部で、口径233mmを測る。内外面ヘラミガキで、胎土は精良、焼成は良好で、淡橙褐色を呈する。2は高坏の坏部で、口縁部を欠く。外面はヘラミガキ、内面は器面剥落のため不明である。胎土は精良、焼成は良好である。外面は淡紅褐色、内面は淡橙褐色を呈する。

### 土器群G (第58図-1、図版38)

S T-16堅坑の西に位置し、甕と長頸壺で構成される。1は甕の頸～肩部で、頸部は内外面ヨコナデである。内面は、粘土紐の離ぎ目が頗著である。胎土には1～2mmの砂粒を多く含み、焼成は良。外面は淡黄褐色、内面は淡黄灰色を呈する。

pit	直 径 (m)	深さ (m)	柱間 (m)
1	0.20～0.23	0.22	0.80
2	0.16～0.22	0.28	1.03
3	0.19～0.21	0.13	0.85
4	0.15	0.23	0.76
5	0.17～0.20	0.35	1.02
6	0.13～0.15	0.18	1.67
7	0.15～0.19	0.11	1.32
8	0.24～0.27	0.55以上	0.38
9	0.13～0.24	0.65以上	0.75
10	0.16～0.20	0.30	
11	0.16～0.18	0.16	0.88
12	0.18～0.23	0.20	
13a	0.20	0.24	
b	0.19～0.24	0.24	
14a	0.14	0.12	
b	0.16～0.21	0.28	
c	0.18～0.24	0.26	

第7表 S B 01 柱穴一覧表



第59図 SB-01 連構実測図 (1:20)

#### その他の土器（第57・58図、第5・6表、図版39）

- a. 第57図-1 ST-02玄室の上面で検出した壺の口縁部から肩部の破片である。口縁部の内面にハケの痕跡を残す。
- b. 第57図-2、7 ST-13の盛土断面で検出した土器で、A群に帰属する。
- c. 第58図-4 ST-17玄室の崩落土上層内で出土した須恵器の壺である。副葬品ではないものの、築造年代を推定する手がかりになる。

#### 3. その他の遺構と遺物

時代不明の掘立柱建物1棟（SB-01）と溝約10条がある。

##### SB-01（第59図、第7表、図版32）

SA-01から西へ約14mの地点に位置する。梁4間、北の桁行2間、南の桁行3間の建物で南北に棟持柱を有する。梁間の全長3.45m、桁行の全長2.70mを測る。南東隅の柱は、後世の搅乱によって消滅している。柱穴は、直径0.15～0.24m、深さ0.2～0.3mの小型のもので、柱痕も無い。Pit 8・9は木痕であることから、自然木を利用した簡易な建物が想定される。

主軸方位は、N23°Wを示す。出土遺物は無い。

##### SD-01、04、05（第4図、図版32・33）

SD-01は、現道と並行して検出された。幅0.60m内外、深さ0.08～0.19mを測る。SD-04はほぼ南北方向に走る溝で、旧一筆境の畔と並行している。幅0.60～1.45m、深さ0.10～0.20mを測る。SD-05は台地縁辺に位置し、地形に沿って湾曲している。幅0.50m、深さ0.40mを測り、断面はU字型を呈する。

##### SD-06～08（第4図）

ST-16を囲むように、不定形な溝状遺構が検出された。SD-06は、長さ6.20m、幅0.74～1.24m、深さ0.07～0.26mを測り、中央部が最も深い。SD-07は、長さ4.70m、幅1.00～1.65m、深さ0.08～0.20mを測る。SD-08は、長さ7.06m、幅0.49～0.96m、深さ0.09～0.13mを測り、壁面は垂直に近い。

##### SZ-02（第4図）

ST-14から北東へ5mに位置し、長さ1.20～2.44m、幅2.30mの不定形な掘り込みである。埋土は黒灰色土で、深さは0.10～0.20mを測る。

## V. まとめ

I・II・VIおよびVII区では、現在の一筆境畦畔と並行する用排水路や、長方形・円形を呈する芋穴等を検出したにすぎず、調査はIII～V区に重点を置いた。

遺構面はIII b層上面で、後世の削平の度合によってIV層下部まで下がったりする。

旧石器～縄文時代の遺構・遺物は、皆無である。

## 1. 弥生時代

竪穴式住居1棟を検出したのみで、付属施設等は何ら発見されなかった。四隅を欠く間仕切り型で、内Xの南側に集中する3個の柱穴と南辺壁溝内の小柱穴から、入口を南側に設定し、埋土から磨製石鐵の破片が出土しており、集落内で製作していたことを伺わせる。土器は壺1個体が出土し、後期に比定できる。

## 2. 古墳時代

地下式板石積石室墓5基、地下式横穴墓19基、石組造構1基、土坑1基、柱穴2基、そして上器群を7ヶ所検出した。

### a. 地下式板石積石室墓について

調査結果と地権者の話を総合すると、調査区から東南部にかけて分布している。05号は、位置と規模・形態から、当該墳墓の未完成墓とみなした。

直径は1.7~2.6mとバラツキがある。02号のプランは長方形に近く、古い要素を持つ。

側石が遺存している01、02、04号についてドーム形の天井を復元すると、造構面(Ⅲ b層上面)よりも数10センチ上位に出ることから、半地下式(封土を伴うかどうかは不明)であったことは疑いない。従って造構の切り合いも無い。

石組造構(S Z-01)とA群土器は、ST-11と13構築の際に破壊を受けており、板石積石室墓群の祭祀施設および祭祀土器としてみなされる。また、C群上器も同様、ST-04・05への供獻ではなくS I-04の祭祀土器として、B群・D群土器およびST-02堅坑堆土内の土器も板石積石室墓の祭祀土器として扱うべきであろう。土器群は、4世紀末~5世紀に含まれる。

### b. 地下式横穴墓について

上記のことから、板石積石室墓という墓制を否定して営まれたものと言える。

IV~V区に集中し、竪坑上部閉塞(A類)6基と、表道閉塞(B類)13基を検出した。人骨の遺存例も多く、26体を数える。

#### 1) 規模について(第60図)

A類は、B類よりも一回り大きいことが明瞭である。B類においては、楕円形プランよりも長方形プランのほうが規模が大きい傾向にある。

#### 2) 群構成について(第61図)

A類とB類は混在しない。A類は、大きく2ヶ所に分かれて分布し、各々約10mの距離を置く。主軸位置も北西~北東と様々で、各々独立した墓域を有していたものと思われる。

18号はB類であるが、A類分布域に入っていることから、小人用として簡単に構築された特殊な例として、ここでは扱わない。

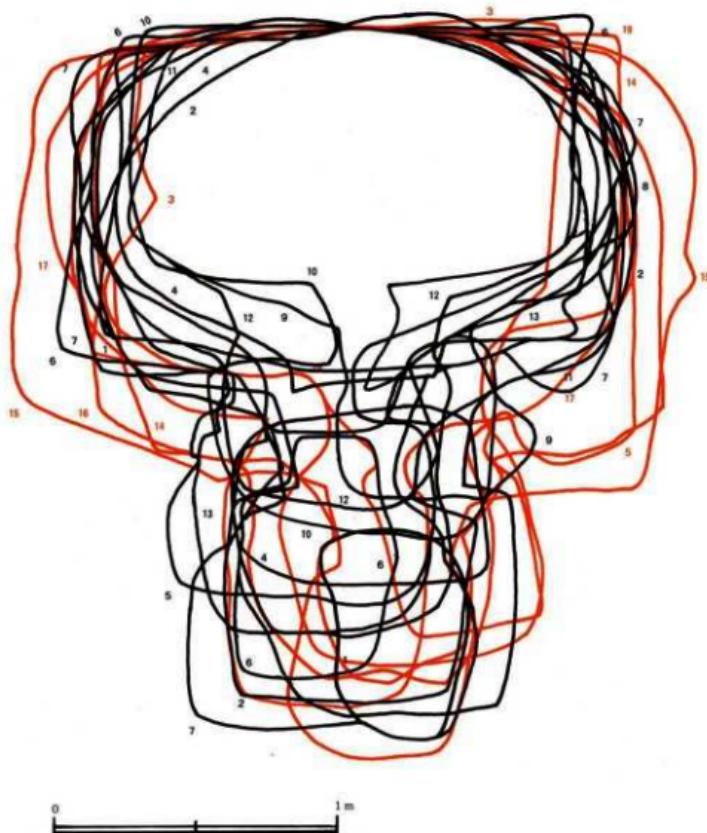
B類の主軸方位も繙りが無いものの、1つの群を構成していることがわかる。02と04・05・06・11・12号は環状に配置し、主軸を放射状に向ける。これらの玄室のスペースを空白帯とし、その外側に08と09、01と07・10、13号の3つの小群がとり巻く配置である。なお、12号が

東向きであることと、10号の位置的なズレおよび寸詰まりな感を呈するのは、板石積石室墓の存在を意識したことと思われる。

### 3) 副葬品について

土器は1点も無く、鉄製武器のみが副葬されている。

A類では、14号を除く5基が刀か剣を保有するのに対して、B類では保有率が低い。06号は大刀を有し被葬者も男性1体であることから、B類の中では最も権力が強かったものと思われる。副葬品を持たない02・04・09・12号の被葬者は、女性もしくは女性の可能性が高いという鑑定結果から、武器の副葬は男性のみに行なわれたと推定される。



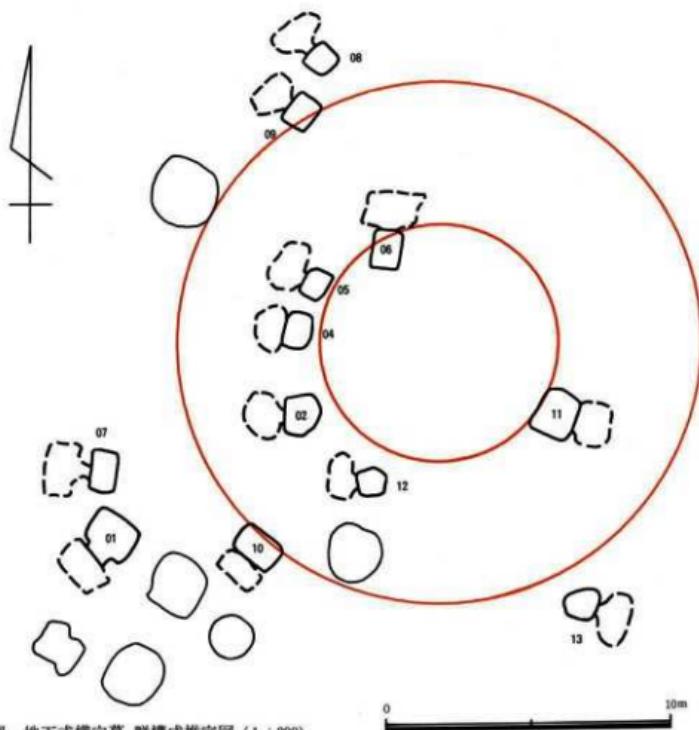
第60図 地下式横穴墓 集合図 (1 : 20)

鉄鎌は、圭頭・三角形・二段逆刺・長頭鎌と多様であるが、量的には少ない。樹皮巻き矢柄の遺存しない鉄鎌をみると、全て箇被を有さないタイプで、年代的要因か地域的要因かは断定し難い。

#### 4) 築造年代と変遷について（第62図）

A類の供獻土器としての可能が高いE～G群土器、二段逆刺鎌および大刀の形式から5世紀前半～6世紀後半には収められる。

玄室のプランを「長方形から楕円形へ」という仮定で変遷したのが第62図である。A類では二面底・切妻タイプの16号を最古とし、次いで一面底・切妻タイプの19号、長方形プランの03・14・15号、楕円形プランの17号を序列した。B類は、長方形・寄棟タイプの06号を最古とし、次いで長方形プランの01・07・10号とし、かつ、羨道部に仕切りを設けた01号を分別する。各々、次の楕円形プランへと繋がり、系統的様相を呈する。最終段階で、新たに羨道板閉塞の08



第61図 地下式横穴墓群構成推定図 (1:200)

・09号が現われる。

以上の状況から、A類からB類へという変遷は考えられない。

なお、05号の玄室が片袖に近いのは、04号が先に構築された後に隣接して堅坑を掘削したために、玄室を北寄りにとらざるをえなくなつたためと思われる。

### 5) 追葬について

A類では16・17・19号が複数埋葬であり、いづれも人骨の遺存度に差があることから、追葬とみられる。B類では01・02・05・08・11・13号が複数埋葬であるが、堅坑断面では01と02号のみ追葬坑を確認した。従つて05・08・11・13号は、当初から複数埋葬であったと思われる。

### 6) ST-13の排土処理について（第38・63図）

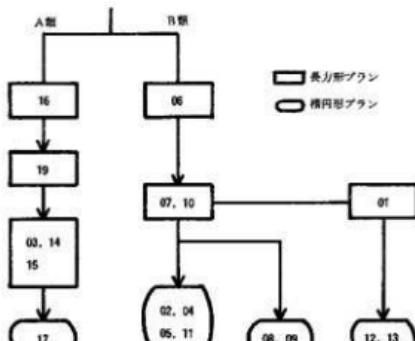
層序図（第38図）に見られるように、掘削土は、地表で殆ど目立たないように押し広げられている。そこで、掘削土と排土と堅坑埋土の関係を知るために、それぞれの体積を計算してみた。その結果、III b層とIV層の土塊から成る排土C層は、堅坑内の1層（机上での1層）とほぼ等しく、約0.60m<sup>3</sup>である。III b層とV～VII層の土塊から成るA・B層は、堅坑内の2層とほぼ等しく、約0.90m<sup>3</sup>を測る。次に、羨道と玄室の掘削土である3層は、堅坑内の埋め土（1層+2層）にほぼ等しく、1.4～1.5m<sup>3</sup>を測る。

以上のことから、小木原古墳や飯野古墳、平松古墳に共通する高い「墳丘」は持たないタイプであることがわかる。

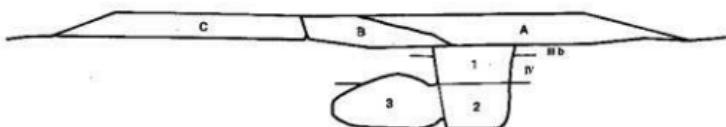
### 7) 封土について

IV区の機械掘削の際、ST-13以外では封土（掘削排土）は認められなかった。板石積石室墓を含めても遺構の切り合は全く無い。また、01・02号の堅坑を見ても、追葬時、当初の掘形を削ることもなく確実に掘削しているということは、堅坑の位置が明瞭に標示されていたと考えざるをえない。

13号の堅坑底面の小pitや10号の



第62図 地下式横穴墓 変遷図



第63図 ST-13排土 模式図

S/T	半地方位	用 途	ア ラ ン ジ	壁 厚 長さ×幅×深さ(m)	底 深 長さ×幅×高さ(m)	底 長さ×幅×高さ(m)	被 障 者	削 削 品	備 考
01	N175°E	溝道	平入り長方形	1.86×1.30×1.39	0.30×0.78×X	1.68~1.82×1.00~1.21×X	2	鉄錐2	頭部に赤色顔料 溝道部に赤色顔料
02	N130°W	溝道	平入り横円形	1.60×1.38×1.36	0.36×0.39~0.67×0.60~0.66	1.88×1.31×0.72	女2	無	頭部に赤色顔料 溝道部に赤色顔料
03	N	壁坑上部	平入り長方形	X×0.94×0.18 (0.62×0.52×0.96)	0.30~0.46×0.42~0.66×0.75	1.57×1.20×X	—	短剣1、鉄錐3	頭・足先にシラス塊
04	N127°W	溝道	平入り横円形	1.25×1.19×1.40	0.14×0.51×0.52	1.70×1.13×0.66	女1	無	頭・足先にシラス塊
05	N 98°W	溝道	平入り横円形	1.15×0.97×1.07	0.11~0.17×0.42×0.50	1.92×1.24×0.73	男2	鉄錐1	頭・足先にシラス塊
06	N 58°W	溝道	平入り長方形	1.62×1.48×1.12	0.20~0.27×0.41×0.50	1.64~1.82×1.12~1.24×0.79	男1	剪刀1、鉄錐2	寄棟型
07	N126°W	溝道	平入り長方形	1.41×1.12×1.57	0.25~0.41×0.39~0.57×0.84	1.97×1.12~1.24×0.84	1	鉄錐2	頭・足先にシラス塊
08	N 81°W	溝道	平入り横円形	1.12×1.04×0.96	0.22~0.28×0.50~0.58×0.41	1.89×1.21~0.61	2	鉄錐3	頭・足先にシラス塊
09	N 87°W	溝道	平入り横円形	1.35×1.16×0.90	0.30×0.43~0.48×0.69	1.71×1.05~0.69	1	無	頭・足先にシラス塊
10	N179°E	溝道	平入り長方形	1.61×1.21×1.06	0.21~0.30×0.70×0.52	1.65~0.91×0.72	男1	鉄錐3	頭・足先にシラス塊
11	N 73°E	溝道	平入り横円形	1.63×1.56×1.52	0.20×0.65~0.76×0.60	1.97×1.40~0.86	3	短剣1、鉄錐2	頭・足先にシラス塊
12	N142°W	溝道	平入り横円形	1.12×1.03×1.18	0.10~0.14×0.68~0.76×0.41	1.58×1.09×0.60	女?1	無	頭・足先にシラス塊
13	N 67°E	溝道	平入り横円形	1.20×1.14×1.24	0.22×0.39~0.61×0.48	1.86~1.16×0.73	男1、女1	短剣1	頭・足先に赤色顔料 溝道部に赤色顔料
14	N 21°W	壁坑上部	平入り長方形	X×0.66×1.17	0.24×0.67~0.75×X	1.67~1.80×1.41~1.54×X	—	鉄錐1	壁面に赤色顔料 溝道部に赤色顔料
15	N 28°E	壁坑上部	平入り長方形	1.51×1.42×0.07 (0.70×0.60×1.10)	0.28×0.38~0.49×0.73	2.36×1.20~1.63×X	男1	鉄錐1、鉄錐7	壁面に赤色顔料 溝道部に赤色顔料
16	N 25°E	壁坑上部	平入り長方形	1.38×1.31×0.11 (0.80×0.62×1.34)	X×0.77×0.89	2.00~2.16×1.07~1.42×0.97	男1、女1	小刀1、鉄錐4	切妻型
17	N 72°E	壁坑上部	平入り横円形	0.68×0.53×0.39	0.24×0.54~0.62×0.64	1.98×1.42×X	2	鉄錐1、鉄錐3	壁面に赤色顔料 溝道部にシラス塊
18	N 52°E	溝道	平入り横円形	1.42×1.08×0.74 (0.80×X×1.12)	—	0.92×0.49×0.45	—	無	切妻型
19	N 9°W	壁坑上部	平入り長方形	1.28× X ×0.11 (0.80× X ×1.12)	0.23~0.28×0.52~0.60×0.78	1.85~0.96~1.22×X	2	短剣1	切妻型

( )は2段目標方 第8表 地下式構穴墓一覧表

竪坑に隣接する柱穴は、竪坑の位置を示す標柱の存在を推定させる。

13号を除くB類の墳墓は、竪坑の埋め戻しに必要な土以外の掘削跡を、A類の「墳丘」の材として提供していた可能性もある。

### 8) ST-16出土の小刀（第47図）について

鎌尚刃造の類例としては、山口県朝出墳墓群のS13<sup>(15)</sup>および福岡県長行遺跡1号石棺の素襷頭<sup>(16)</sup>刀子、同山田遺跡<sup>(17)</sup>・佐賀県二塚山遺跡D36<sup>(18)</sup>および長崎県龜岡神社蔵の素襷頭大刀、京都府南原古墳<sup>(19)</sup>および静岡県松林山古墳の大刀、さらには正倉院北倉宝物の金銀鉢莊大刀などがある。これらは、3～4世紀代に集中し、当遺跡出土の小刀はきわめて希な例と言える。

### 9) 小結

以上、限られた調査範囲にもかかわらず多くの成果を得ることができた。築造年代については、墳墓の形態や副葬品から6世紀代に集中すると思われるが、資料の希薄さに加えて分析が不充分であるために特定できていない。

A・B2系統の墳墓は、分布域の相異や規模、個体間の距離、副葬品の優劣、赤色顔料の使用頻度などを総合すると、A類の被葬者が優位にあったと言える。また、平面プランはそれぞれ長方形から楕円形へと変遷し、A類のみ「墳丘」を有していた可能性が高い。

### 3. 古墳時代以降

近世～近代あるいは戦中戦後の入植によって、畦畔と水路で区画する大規模な開墾が行なわれるまでの間は、全くの空白である。このことは、人口の希薄さや移動、Ⅲ層（黒灰色火山灰土）が耕作土として不適当であることに起因する。

#### 【註】

- (1) えびの市教育委員会『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』1985
- (2) (1)と同じ
- (3) (1)と同じ
- (4) 宮崎県教育委員会「灰冢遺跡」『九州縦貫道埋蔵文化財調査報告書(1)』1972
- (5) えびの市教育委員会『小木原遺跡群 嵐・久見迫・地主原地区』1989
- (6) えびの市教育委員会『永田原遺跡』1987
- (7) (1)と同じ
- (8) 飯野町『飯野町郷土史』1966
- (9) 木崎原操「小木原古墳群調査報告」第2報～第7報『えびの』第2号～第8号 1971～1975
- (10) 宮崎県総合博物館『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』1983
- (11) えびの市小木原地下式横穴群・久見迫支群や小林市東二原遺跡、高原町立切遺跡では2～3基の一一群が主軸を1点に集中させるように位置する例があり、1つの墳丘を共有することを伺わせる。しかし、本遺跡では主軸が1点から放射状に並ぶという、

類例の無い分布状態を示している。

- (12) 1969年に調査した小木原A号墳は、直径16.0m、高さ1.2mを測る。(宮崎県教育委員会「小木原古墳、地下式A号墳」『九州縦貫道埋蔵文化財調査報告(1)』) このほか県指定の古墳が1基現存している(未測量のため規模は不明)。
- (13) えびの市大字建山に県史定の古墳が1基現存している。裾部は削失しているが、直径は20m(推定)、高さ2.5m(推定)を測る。
- (14) えびの市大字島内に県史定の古墳が1基現存している。直径23m、高さ2.5mを測る。
- (15) 山口県教育委員会『朝田墳墓群I』1976
- (16) 田頭喬「長行小学校庭の原始遺跡」『西谷 その歴史と民俗』小倉郷土会 1965
- (17) 福岡県朝倉高等学校史学部「朝倉町大字須川山田石棺」『埋もれていた朝倉文化』1969
- (18) 佐賀県教育委員会『二塚山』1979
- (19) 末永雅雄『増補日本上代の武器』1981
- (20) 後藤守一『日本古代文化研究』1942
- (21) 後藤守一ほか『松林山古墳発掘調査報告』1939
- (22) 朝日新聞社『正倉院宝物 北倉』
- (23) 地下式横穴墓(名称は統一されていない)は、いわゆる「古墳」の範疇に含めて良いかどうかの問題がある。玄海灘周辺の前方後円墳の主体部に箱式石棺が多用されるように、形だけ受け入れて中身は在地形ということを考えれば、当遺跡のA類の地下式横穴墓も同様、「古墳」と呼承しても良いと思われる。

調査地周辺  
航空写真



調査地周辺遠景  
(北から)



図版2



III～V区 調査前の状況（東から）

V～VII区  
調査前の状況  
(北から)



I区 完掘全景  
(北から)



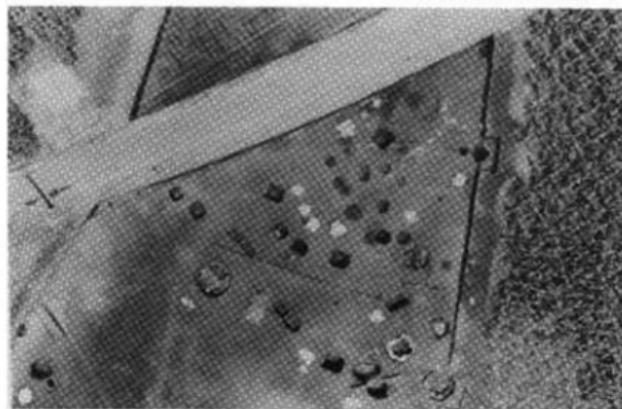
II～IV区 全景  
(南から)



図版4



III区 完掘全景  
(北東から)



IV区 完掘全景  
(上が北)



IV区 作業風景  
(北から)

V区 作業風景  
(南東から)



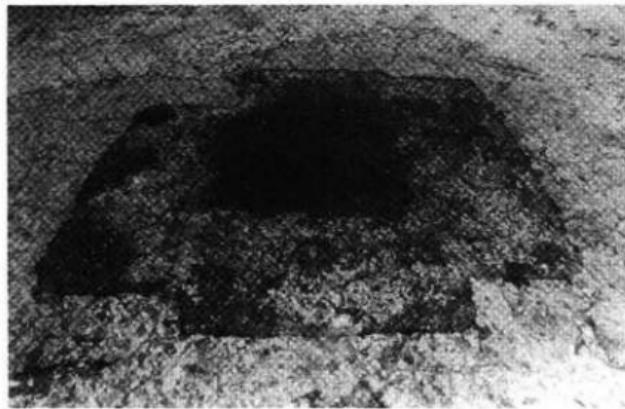
VI区 完掘全景  
(北から)



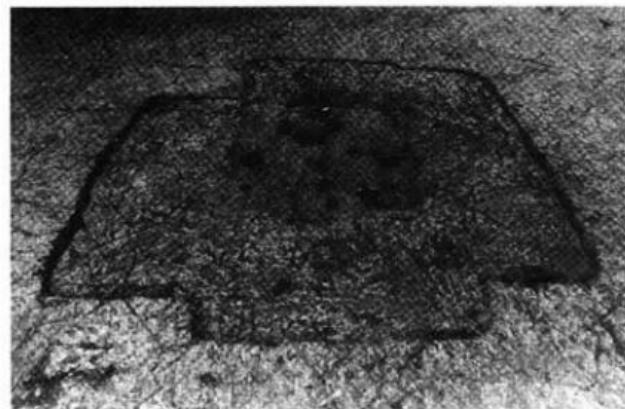
VII区 完掘全景 (北から)



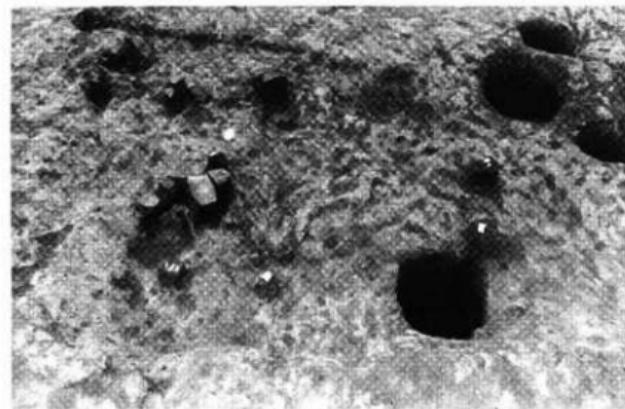
図版6



S A -01  
遺構検出状態  
(北から)

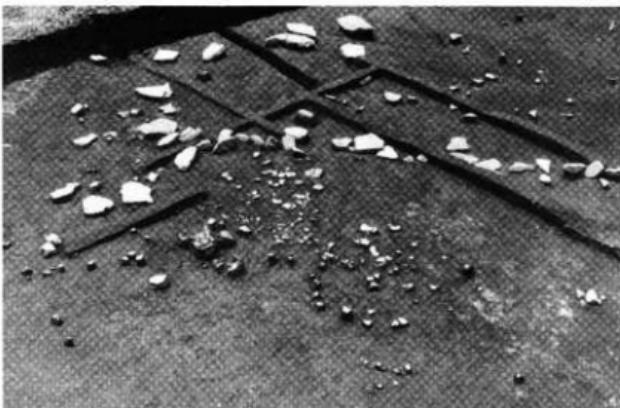


S A -01  
掘込・遺物出土  
状態  
(北から)



S A -01  
遺物出土状態  
(北西から)

S Z -01・A群  
遺物出土状態  
(北から)



S I -01~03  
遺構検出状態  
(北から)



S I -01~03,  
S T -01  
作業風景  
(北から)



図版 8



S I -01  
層序  
(北西から)



S I -01  
完掘全景  
(東から)



S I -01  
側石除去、完掘  
(東から)

S I -02

層序

(東から)



S I -02

完掘全景

(北から)



S I -02

側石除去

完掘

(北から)



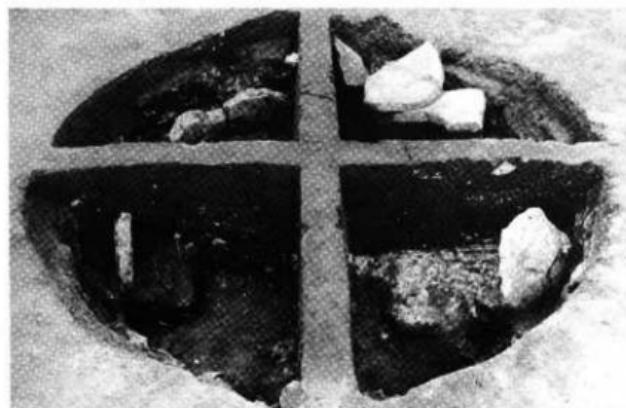
図版10



S I -03  
層序  
(西から)

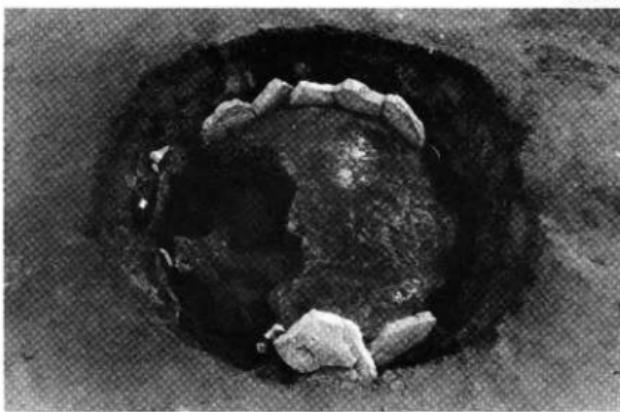


S I -03  
完掘全景  
(北から)



S I -04  
層序  
(北から)

S I -04  
完掘全景  
(北から)



S I -04  
側石除去  
(南から)



S I -05  
完掘全景  
(南から)



図版12



S T-01  
豊坑層序  
(西から)

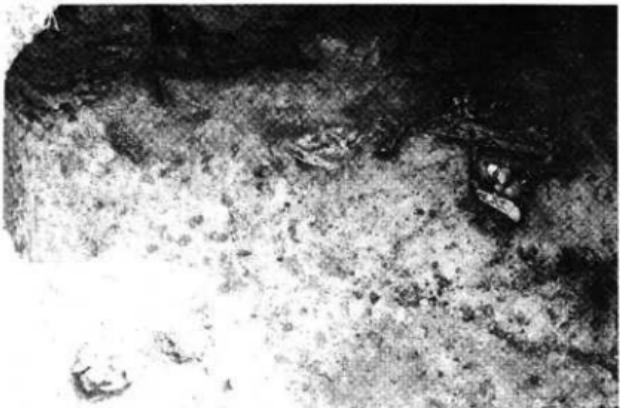


S T-01  
美道閉塞  
(北から)



S T-01  
完掘  
(北から)

S T-01  
玄室内  
(北から)



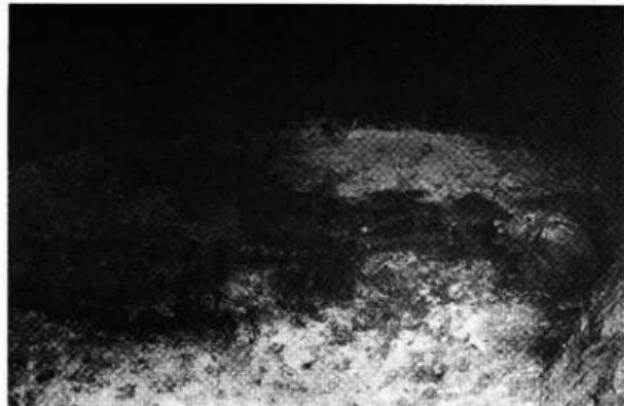
S T-02  
堅坑層序及び  
閉塞状況  
(南から)



S T-02  
閉塞石除去  
(北から)



図版14

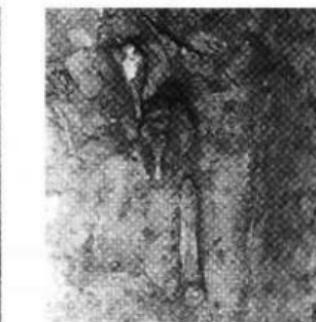


S T-02  
玄室内人骨

玄室内出土遺物



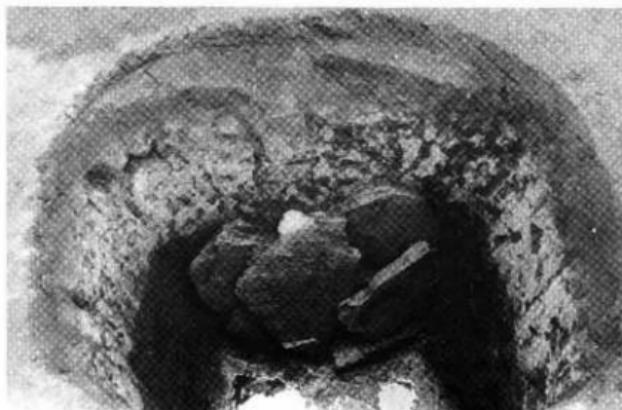
S T-03 完掘全景（南から）



豊坑上部閉塞状態（南から）



S T-04  
狹道閉塞状態  
(北東から)



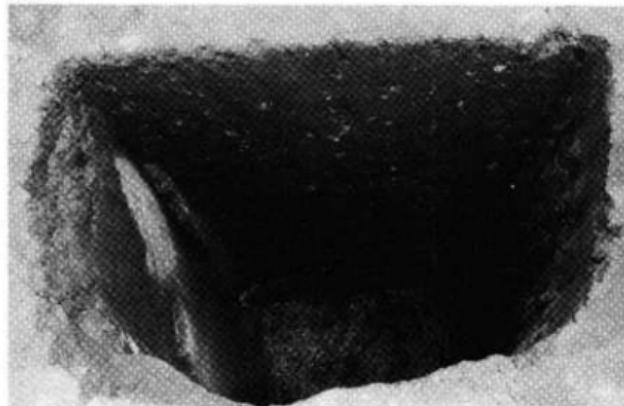
S T-04  
閉塞石除去  
(北東から)



S T-04  
玄室内人骨



図版16



S T-05  
堅坑層序  
(南から)



S T-05  
狭道閉塞状態  
(東から)



S T-05  
玄室内人骨

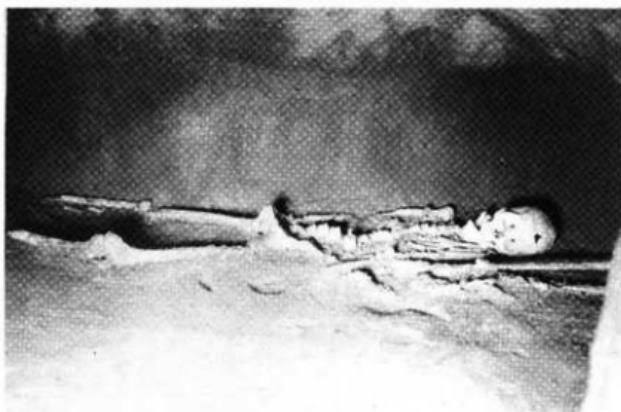
S T - 06  
整坑層序  
(南西から)



S T - 06  
閉塞石除去  
(南東から)



S T - 06  
玄室内



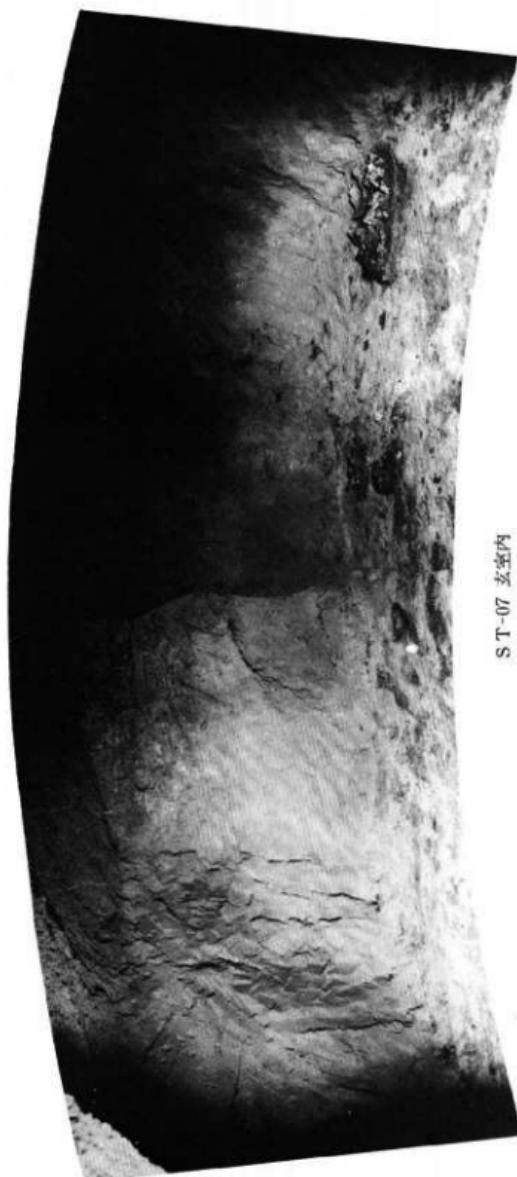
図版18



S T-07  
堅坑層序  
(南から)



S T-07  
表道断面状態  
(東から)



S T-07 玄室内

S T-08  
堅坑層序  
(南から)

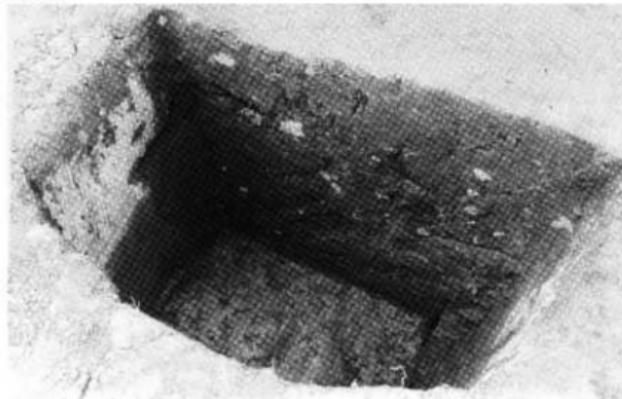


S T-08  
完掘  
(東から)



S T-08  
玄室内人骨





S T-09  
整坑層序  
(南から)



S T-09  
完掘  
(東から)

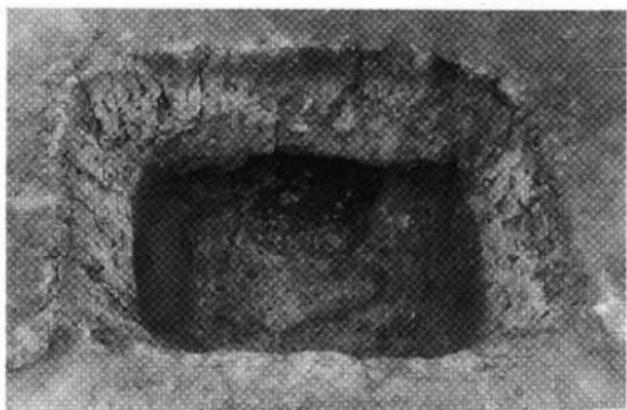


S T-09  
玄室内人骨

S T-10  
羨道閉塞状態  
(北から)



S T-10  
閉塞石除去  
(北から)



S T-10  
玄室内人骨





S T-11  
漢道閉塞状態  
(西から)

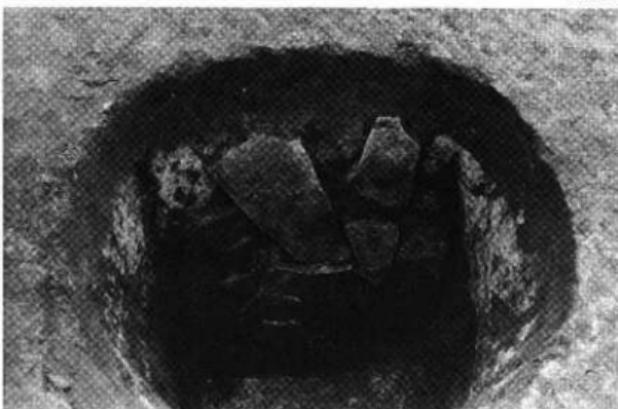


S T-11  
閉塞石除去  
(西から)

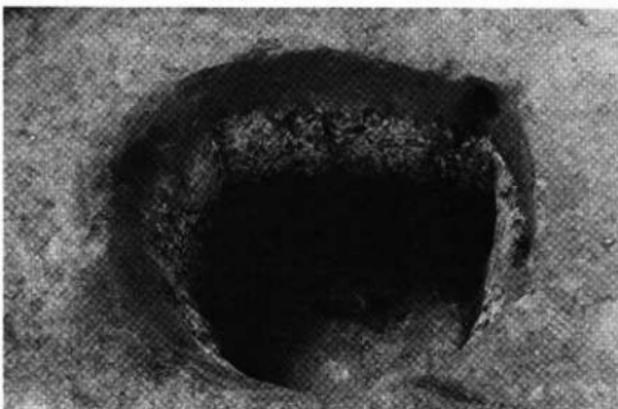


S T-11  
玄室内人骨

S T-12  
墓道閉塞状態  
(北東から)



S T-12  
閉塞石除去  
(北東から)



S T-12  
玄室内人骨



図版24



S T - 13  
層序  
(北から)



S T - 13  
豊坑層序  
(北から)



S T - 13  
狭道閉塞状態  
(北西から)